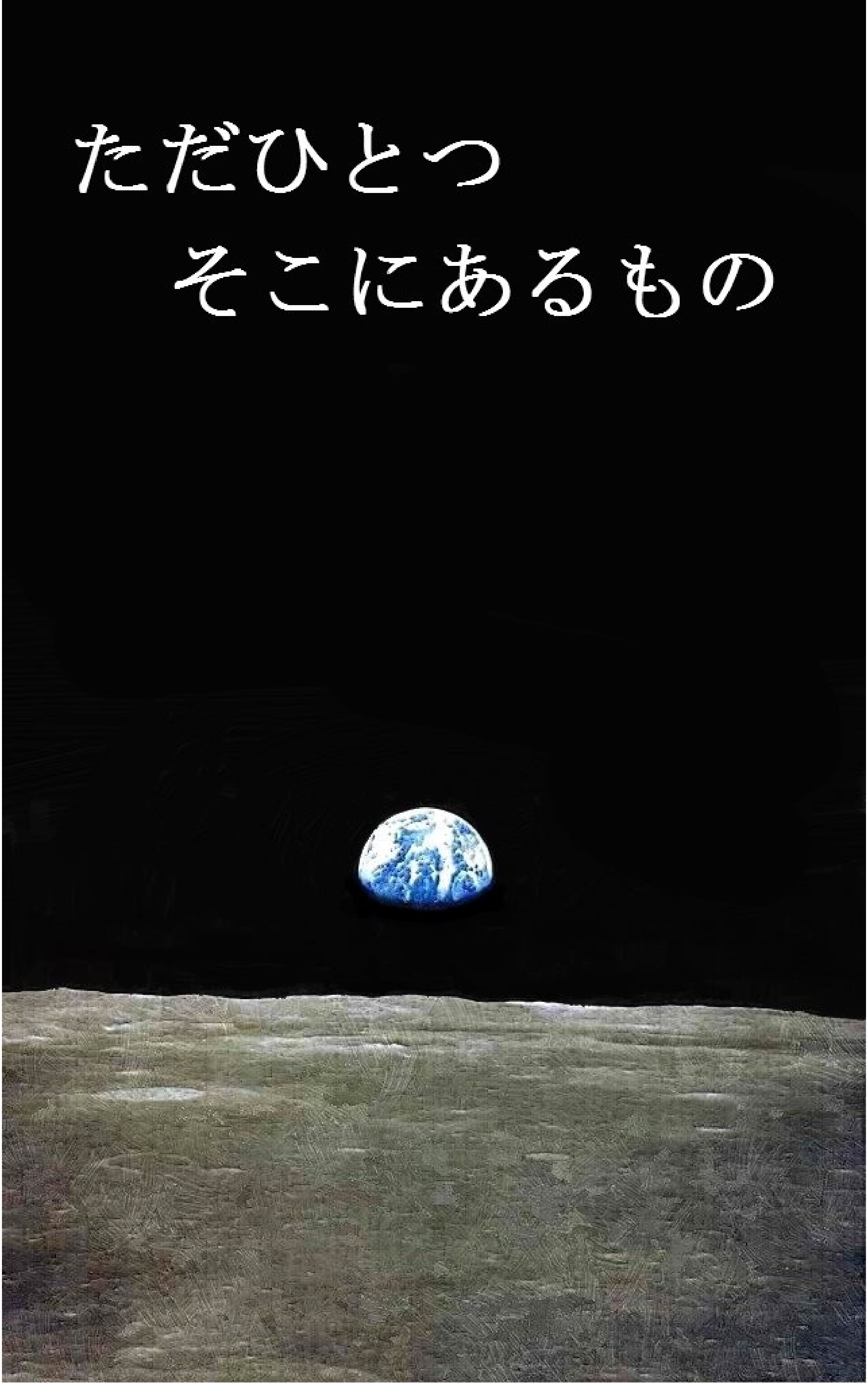
ただひとつ
そこにあるもの

プロローグ

”地球は青かった”
世界で初めて宇宙を飛んだその男は、窓からその星を眺めてそう呟いたという。確かに、その星をそこから眺めれば、誰もがそう感想を述べたに違いない。地表の七割を占める海の青さは目が覚めるほどに鮮やかで、森林の緑は色濃く陸地を覆い、空を漂う雲は撫でるようにその星を優しく包み込み、漆黒の空間の中、太陽の光を受けて輝くその姿は、それはもう、なんとも筆舌しがたい美しさだろう。故に、単純で捻りも飾り気もない言葉ではあったが、その星の姿を形容するのに、これ以上に最適な表現はなかっただろう。
そんな奇跡の星が今、雪合戦のそれのように、真っ白な雪玉へと姿を変えていた。それは突如として始まった寒冷化によって、極地の氷が急速にその勢力を拡大し、やがて赤道付近の一部を残して、地表をすっぽりと覆いつくしてしまったのだ。過去にこのようなことがあったことは、地層の中に眠るその痕跡から知ることはできる。しかし、寒冷化のメカニズムはよくわかっておらず、そして、地球は温暖化に向かっていると思われていたから、このような事態が起こるとは予想だにしていなかった。これはまさに、人類にとって、青天の霹靂と言って良かった。
このような急激な変化に、人類は対応すること事ができず、多くの者が命を失ったが、それでもなんとか生き残った人々は、かつての人類がそうしたように、陸地を或いは海を渡って、安住の地を求めて移動を始めた。しかし、それとて容易なことではなく、その地へと向かう間にも、一人、二人と死の淵へと落ちていった。この命がけの旅路はまさしく、現代の”出アフリカ”とも言えた。
そこは人々にとって、希望の地となるはずだった。熱帯に属する気候は気温も高く湿潤で、迫る氷もここには手を出せずにいた。だから彼らにとって、安住の地となるのは間違いないと思われた。しかし、この気候変動は、徐々に乾燥化を引き起こし、ほとんど雨も降らなくなって、やがて、森林の大部分は消失して、木々は歯抜けのようにぽつぽつと生えるばかりとなった。このような乾燥した土地では植物も満足に育たず、食糧を手に入れるのも事欠く次第となって、広がる飢饉は容赦なく人々の命を奪っていった。また、氷床の発達により海水面は下降して、陸地は若干の広がりを見せたものの、そもそも、赤道付近は陸地自体が多くはないから、その狭い土地に、人類と動物たちがぎゅうぎゅうとひしめくような状態となった。そうすると、なんらかの軋轢が生じるのは必然だ。動物たちは人間を餌として襲い、人間たちは身を守るために、食料を得るために動物たちを殺した。そして人間同士もまた、土地や水や資源を巡って対立し、それはやがて争いへと形を変え、ついには戦争へと発展していった。こうした環境下において、人類が生きるのは容易なことではない。彼らは生きることに疲弊し、将来への希望を失った。もはや、人類に未来はないと思われた。
そんな時、彼らはふと、空に浮かぶ天体の姿に気がついた。それは、かつては地球の一部であり、創世の歴史の中において分かれた兄弟で、常にそばに寄り添い付き従って、地球の歴史と、背負ってきたカルマを見守ってきた、荒涼として、水も空気もないでこぼことしたあばた星。しかし、そんな星ですら、危難にあえぐ人類にとっては楽園に見えた。

　いつか、地球を覆う氷も消えるだろう。そのことは、土の中に眠る幾層もの歴史が証明している。この星はそれを何度も繰り返し、生命はその度に、絶滅の危機に陥っては復活を遂げてきた。チャンスはいずれ必ずやってくる。だからいつかくるであろうその時まで、月へ逃れよう。その時が来たら、地球へ戻ろう。そしてそこから、再び歴史を謳歌するのだ。人類はそう考えて、彼らは月へと旅立った。

「いらっしゃいませ」
　女性店員の元気ではつらつとした声が、店内を木霊して男の耳へと届いた。二十代の中程、彼と同じくらいの年頃だろう。女性の快活な様子は見ていて気持ちがいい。男は少し気が落ち込み気味だったから、彼女の明るい声は彼をほっとさせた。男は軽く微笑んで言った。
「予約を入れているんですが」
「お名前を教えていただけますか？」
「神谷といいます」
「神谷様ですね」
　女性は予約リストを指でなぞり、その名を見つけると笑みを浮かべた。
「承っております。少々お待ちください」
　女性は奥へと消えた。
　店員が戻ってくるまでの間、彼は店内をぐるりと眺めた。店はこぢんまりとしていて、街角にある小さな花屋さんといった具合だが、花屋と呼ぶには華やかさがなく、むしろ殺風景で味気ない。本来あるはずの花の陳列がないからだ。
　花を育て維持するには水や日光が必要だ。しかしこの月面では、日光はともかく、水を確保するのは容易なことではない。だから花は全て専門の施設で育てられ、要望に応じて用意することになっていた。
「お待たせしました」店員が手に花を持って戻ってきた。「こちらでよろしかったですね？」
　彼女が差し出したのは、ひまわりで作られたブーケだ。太陽を思わせる鮮やかな黄色の花びらは、見ているだけで元気が出てくる。
「ええ、これで結構です。ありがとうございました」
　神谷は礼を述べるとブーケを受け取って代金を支払った。そして店員の「またのお越しをお待ちしております」との声を背に店をあとにした。
　神谷は病室に入る前に髪に手櫛を通して、軍服の襟を正してしわを伸ばし、身だしなみを整えた。恋人に会うからというわけではなかったが、その相手が大切な人であることには変わりなく、また、心配をかけたくないというのもあって、ぴしっとした格好をしなければと、そう考えたのだ。彼は万端準備が整うと、ドアをノックして中へと進んだ。
　病室は狭く窓もないためにひどく殺風景だった。その奥まったところにベッドが一つあり、女性が起き上がって本を読んでいた。彼女は訪問者の姿を認めると、瞬時にして華やいだ笑みを浮かべた。
　女性は十代の中程といったところだろうか、髪はショートで肌は色白く、小さい顔とは対照的に、大きくてはっきりとした目が印象的だ。彼女は本をベッド脇のテーブルに置くと、明るい口調で言った。
「こっちにはいつ？」
「ついさっきだよ」

　神谷はひまわりのブーケを差し出した。
「憶えてくれてたんだ」
　女性は少し驚いたような顔をした。
「大事な妹のことだからね。忘れたりしないさ」
　神谷は当然といった顔をした。彼は椅子を引き寄せて腰を下ろした。
「うれしい」
　妹は喜びの色をその声に込め、目を閉じてひまわりの花の香りを嗅いだ。
　大気のほとんどない月では、有害な宇宙線が直接、地表に降り注ぐ。そのため、研究者とか建物の修繕のための作業員でもなければ、建物外に出ることもない。従って、ほとんどの者が、太陽をその目で直接見たこともなく、太陽の光をまぶしいと思ったことも、その熱を肌に感じたこともない。ひまわりからは、ジャスミンやラベンダーのような香りは感じないだろう。だが、その姿は太陽そのものを想起させ、見ているだけで、華やいだ気分にさせる。だから彼女がそうやって香りを嗅いだのも、ひとえに、ひまわりの花から、太陽の存在を感じ取ろうとしてのことかもしれない。
　女性はひまわりの香りで胸をいっぱいに満たすと、ゆっくりと目を開け、ブーケを膝の上に置いて尋ねた。
「お仕事の方はどうだったの？」
　すると、それまで微笑ましげな笑みが浮かんでいた神谷の顔が、雨にしこたま叩かれでもしたかのような、しかめっ面へと変化した。
「良くなかったんだね」
　妹は兄の表情からその心中を素早く感じ取り、声を落として悲しげに言った。
「防ぎきれなかった……。迎撃に失敗したんだ」
　神谷は悔しそうに唇を噛み締めた。
　月にも地球と同じく、日々、宇宙の彼方より隕石が飛来する。ただ地球の場合は、大気があるために、大概は地表に到達する前に燃え尽きてしまう。しかし、月の場合は、大気がほとんどないので、燃え尽きることなくそのまま地表に激突する。その様は月面に残された無数のクレーターに見て取ることができる。隕石がもし街へ落ちたなら、被害は計り知れないものとなるだろう。事実、月では度々そういうことが起きている。なんとか被害を食いとめようと、隕石を迎撃するためのシステムが構築されてはいるが、高速で移動する隕石を地表から破壊するのは簡単なことではない。迎撃に失敗することもあって、その結果として、街の一部、或いは小さな街ならそれ一つが、丸ごとなくなってしまうなどということも少なくなかった。
「ところで、体の具合はどうだ？」
　神谷は憂色をその表情から吹き飛ばそうとでもするかのように、ふうっと、一つ息を吐き出すと話題を変えた。
「うん。今日は調子がいいみたい。起きてても苦しくないの」
　妹は明るく笑って、力こぶを作るようなしぐさをして見せた。
　事実、本当に調子が良さそうに見えた。ただそれが、一時的なものに過ぎないことはわかって

いた。
「でも、調子がいいからって、無理するんじゃないぞ」
「わかってる」妹は不満そうにほほを膨らませた。そして意地悪そうな目を向けて「お兄ちゃんの方こそ、心配かけるようなことはしないでよ」
「わかってるよ」
　兄は苦笑いを浮かべた。そして腕時計をちらりと見やると立ち上がった。
「もう行くの？」
「呼び出しを受けてるんだ。先生に会ってから基地へ向うよ」
「今度はいつ？」
　妹は寂しさを覗かせた。そんな彼女の様子を見ると、彼は心が苦しくなる。
「すぐだよ。そんなに長くはかからないと思う」
「……わかった」
　妹は小さく頷いて微笑を返した。
　神谷は労るように妹の頬を優しく撫でると、微笑みをその場に残して病室を後にした。
　主治医はほっそりとして背が高く、神谷と同じくらいに若かった。月では食糧に乏しいために大抵は細身で、低重力であるが為に高身長の者が多かった。また、月の環境は高齢者には負荷が高く、そのため、概して短命の傾向にあり、故に、平均年齢も地球に比べるとぐっと低かった。だから経験などがものをいう職業においても、若輩の者が多いというのも仕方のないことだった。
「妹さんの病状ですが……」
　医師はバインダ上の紙面に目を這わせた。そして視線を神谷に向けた。
「ここ最近は非常に安定しています。治療の成果が現れているのでしょう。しかし、残念ながら、回復に向っているというわけではありません」
　神谷は唇を真一文字に引き絞って医師の言葉を咀嚼した。そして飲み込んではみたものの、消化不良となってしまったそれを、吐き出すように尋ねた。
「どのくらい、持つんでしょうか」
「この病気は、低重力の影響で心筋が薄くなり、その結果、心肺機能が低下し、不整脈による突然死や心不全をもたらす可能性のある病気です。妹さんはお若いので、今はまだ大丈夫でしょうが、加齢による体力低下などと重なると、寿命を迎えられない場合もあります。事実、長く生きられない方がほとんどです」
　医師の言葉が津波のように押し寄せてきて、神谷は奥歯を噛みしめた。妹が自分よりも先に逝ってしまうことなど考えたくもないし、その瞬間を迎えたくもない。代われるものなら代わってやりたい。
　医師が言った。
「この病気は私やあなたも例外ではありません。これは言うなれば、月における生活習慣病と言えるでしょう」
　医師の言うとおり、これは人類が月で生きる上で逃れることのできない宿命だ。これから先も

、この苦悩はずっと続くだろう。だが、妹だけは、なんとか助けてやりたい。
「なにか、方法はないんですか？」
「あるとすれば、たった一つでしょう。完治するかどうかは、わかりませんが」
「それはなんです？」
　期待をこめて神谷は医師を見つめ返す。
「地球ですよ」
　医師は頷いて答えた。
「地球？」
　神谷は眉をひそめた。その顔には狐につままれでもしたような表情が浮かんでいる。
「地球に戻るんです。本来あるべき環境に身を置けば、或いは……」
　医師はそこまで言って口を噤んだ。それが難しいことだとわかっていたからだ。だから彼はこう付け加えた。
「あくまで、可能性の話です」

　神谷はカートを降りると胸ポケットから身分証を取り出して兵士に提示した。兵士はそれを目視で確認したのち、コンピューターに照会して、確認が取れると返却して敬礼をした。神谷は身分証を胸ポケットに滑り込ませて敬礼を返し、ゲートの両側に立つ警備の兵士の間を抜けて中へと入っていった。

　しばらく歩いて行くと、小さなラウンジがあり、軍服を纏った軍人たちが、真剣そうな顔や愉しそうな顔で、立ち話に花を咲かせていた。

「神谷じゃないか」

　呼び止める声が聞こえて振り向くと、雑談の輪の中から男が首を伸ばしてこちらを見ていた。彼は仲間に一言、断りを入れてから、一歩、二歩とステップを踏むようにして歩いてきた。

「久しぶりだな。どうしてたんだ？」

「いろいろと忙しかったのさ。ケイン」

　神谷はそう答えて、猫の手みたいにグーを突き出した。

　ケインは拳を握りゴツンと神谷の拳にぶつけた。これが、互いの無事を称え合うときの彼らの挨拶だった。

　神谷はケインの背後を覗き見て、少し意地悪そうな表情を浮かべた。

「君は暇そうだな。おしゃべりなんかして」

　ケインは不服そうに眉を吊り上げた。

「俺が暇だって？　言ってくれるじゃないか。これでも一応、地球から戻ってきたばかりなんだぜ」

「補給任務で？」

「ああ」

「どんな様子だった？」

「なかなか厳しい状況だね」ケインは顔をしかめた。「力の上ではこっちが上回っているはずなのに、なかなか敵の拠点を攻略できないでいる。連中、地下に潜んでるから、空爆も効果が薄いんだ。おまけにゲリラ戦をやってくるから、こっちの方が被害が大きいくらいさ」

　月と地球との間に起きた戦争は、初めこそ月が有利だったが、地球が戦力を整えていくにつれ、戦況は膠着し、被害ばかりが増大していった。月は何とか現状を打開しようと試みてはいるものの、地球の抵抗は強く、一向に解決の糸口が見えなかった。

「そうか……。歯がゆいな」

「ああ、全くだ」

　ケインは苦々げに同意した。彼はしばらくその苦さを租借したのち、話題を変えた。「ところで、どこに行くんだ？」

「司令部に呼ばれてる」

　司令部とは、月の政治の中枢であり、すべての意思決定機関のことで、月面基地と呼ばれる、地球で言うところの首都にあった。もっとも、月には国家という概念がないので、首都というの

は正確ではない。ただ、月面基地は、人類がこの地に初めて築いた街であり、月面基地を中心にして、あちこちに街が築かれ、政治だけでなく、経済の中心地となっていたことから、首都と呼称するのもあながち間違いではない。しかし、月の人々も地球の人々も、あえてこの街を月の首都とは呼ばず、単に月面基地と呼んでいた。司令部はその中心にある。
「ははぁ」
　ケインは頷きつつ、訳知ったような顔をした。
「なにか知ってるのか？」
「いいや、俺が知るわけないさ。ただ、お前が呼ばれたってことは、なにか重要なことに違いない」
　そこでケインを呼ぶ声がして、彼は頑張れよと神谷の肩を叩いてその場を去って行った。
　神谷はなにかに化かされでもしたかのような顔でケインを見送ったのち、ラウンジを抜けて通路を更に奥へと進んだ。
　会議室では、政府の重鎮たちがテーブルを挟んで座り、隣の者と互いの顔を寄せ合って、なにごとかをひそひそと話し合っていた。左手に並ぶ制服組はどこか得意げで、右手に並ぶ背広組は不安感をその顔に覗かせていた。神谷は足をきちんと揃えて立ち、誰かが話し出すのを待った。
　やがて、話題に途絶えたのか話し声がやんで、制服組の中で唯一、スーツを来た男が口を開いた。
「中尉。君は我々がおかれた現状をどう思うかね？」
「現状、ですか？」不意を突かれたような、思いもよらない質問に、神谷は思わず聞き返した。
「地球との戦争も、もうじき百年になる。その間、多くの者が傷つき、多くの者が命を失い、多くの者が家族を無くし、多くの者が、悲しみに打ちひしがれている。私はこの状況を、なんとかしなければばならないと考えている」
　氷期が終わり、地表を覆っていた氷床が減退を始めると、月の人々は、故郷への帰還を果たすべく、地球へと向かった。ところが、地球の人々は、彼らが帰ってくることを良しとせず、交渉に応じるどころか、突然、攻撃を始めた。月の人々は拒否されたことに衝撃を受け、また、攻撃を受けたことに対して強い憤りを覚えた。それは怒りへと変化し、彼等の手に武器を取らせて、こうして、地球と月との間に戦争が始まった。
　男は続けた。
「だが、戦争を終結させようにも、彼らの抵抗は強く、被害は増大するばかりだ。現状を打破し、戦争を終わらせるためには、この形勢を逆転させるための策が必要だ」
「私に何をしろと？」
「ふむ。よろしい」男は満足げに微笑み、続けた。「秘密裏に地球に潜入し、軍事情報を手に入れてきてもらいたい」
「軍事情報、ですか？」
「そうだ。軍の規模、装備、基地の情報などだ。我々はそれらの情報を元に、一気に攻勢にでるつもりだ」
　するとすぐさま、背広組の一人が机をバンと叩いた。彼は立ち上がらんばかりにテーブルに両

手をついて、体を前のめりにした。
「ヨウ司令官。我々はその考えには反対だ。そんなことをすれば、双方に甚大な被害がでる。そしてそれは、深い憎しみを地球の人々に植え付けることになる。そうなれば、いずれ取り返しのつかないことになるぞ。真にこの戦争を終結させたければ、平和的解決へ向けて、対話の場を設けるべきだ」
　ヨウは馬鹿にしたような目で見つめ返す。
「ホセ局長。貴君たちは甘すぎる。我々はこれまでもずっと、停戦へ向けて交渉を求めてきた。しかし彼らは、頑として聞く耳を持たなかった。それは今後も変わらないだろう」
「平和とは”和をもって平らかにする”と言うことだと私は考えている。戦争の行く末に、平和はない」
　ヨウは鼻を膨らませた。
「そもそもこの戦争が始まったのは、彼らの先制攻撃が発端だ。初めから話しを聞くつもりなどなかったのだろう。そんな連中に、これ以上なにを話しても無駄だ」
　ホセは口を噤んでしまった。ヨウの言っていることも一理あるのだと、心のどこかで理解しているからだ。しかし、なんとか戦禍の拡大だけは避けたい。彼はそう考えていた。
　ホセは神谷に意見を求めた。
「中尉。君はどう思う？」
　神谷はちらりとホセに目を向けてから、視線を前方の空間へと戻した。どう思う、と聞かれても、正直、なんと答えて良いかわからない。被害が拡大していることを思えば、戦争を早期に終結させるべきとの考えに異存はない。しかし、攻勢に出るということは、今以上に被害が出るということだ。それを考えれば、平和的解決を模索するべきというのも理解できないではない。ただ、彼は軍人だ。軍人ならば軍人として、答えるべき言葉は一つだ。
「私は、軍の命令に従うのみです」
　ホセの顔に落胆の色がありありと現れた。気持ちはわからないでもなかったが、神谷は、軍人として間違った選択をしたとは思っていなかった。
　一方で、ヨウの顔には充足感が広がって、口の端が鋭くつり上がっていた。彼は向かいに居並ぶ面々を見据えた。
「君たちもこれ以上、犠牲を増やしたくはないだろう。それに、身内の中にも病に苦しんでいる者がいるはずだ」
　彼らは観念したというような様子でうつむいた。ただ一人、ホセだけが、ヨウをひっしと睨まえていた。ヨウは、ホセをさらっと見やってから続けた。
「ならば、戦争を終わらせようではないか」
　背広組の面々は顔を上げた。ヨウは舐めるように睥睨し、更に言った。
「我々の故郷を取り戻すのだ」

　月は地球の六分の一しか重力がない。だから月の人間が地球上で活動をするためには、それなりの準備が必要だ。月の重力下では、それほど大きな筋力を必要としないため、地球に降りた際、その重力の影響をもろに受ける。筋力が弱いから、地球の重力に耐えられず、歩くどころか、立っていることもままならないのだ。だから地球の重力に体を慣らす必要があった。そこで月政府は、地球のとある場所に、トレーニングを行うための基地を建設し、そこで鍛錬を行うことで、筋力の増強と心肺機能の強化を行い、地球上での活動に支障がないように配慮した。軍事活動を行う軍人は皆その過程を経た上で部隊へと加わることになっていて、それは神谷も同様のことだった。

　そうして、訓練を終えて、任務へと赴く準備が整った。

「街へ行くには森を抜けて、この道路にでる必要があります。そのあとはまっすぐ北へ向かってください」

　ジョバンニは地図上を指でなぞりながら言った。彼は神谷よりいくらか若く、若干、小柄ではあったが、地上任務に就いているからだろうが、その体躯はしっかりとしているように見えた。ジョバンニは少し不安げな面持ちで続けた。

「本当に、一人で行かれるんですか？」

「これは俺が一人でやらなきゃいけない任務なんでね」

「それはつまり、極秘任務、と言うことですか？」

　神谷はジョバンニを鋭く見つめた。

「そう思うなら、察してもらいたい」

「わかりました。もう、なにも言いません」

　ジョバンニは申し訳なさそうな顔をした。

　神谷は地図に視線を落として「街まではどのくらいある？」

「二十キロです。遠いですよ。どうするんです？」

「歩くさ。地球の大地というものを、踏みしめてみるのも悪くはないだろう」

「気をつけてください。以前ほど、森は安全ではありません」

　神谷は苦笑を浮かべた。

「俺は以前がどうだったかを知らない。森がどれほど安全だったのかをね」

「おっしゃる通りですね」ジョバンニもまた苦笑を漏らす。「馬鹿なことを言いました」

「無理もないさ」神谷はバッグをたすき掛けした。「さて、世話になった」

「作戦の成功を祈っております。中尉」

　ジョバンニは敬礼をした。

「ありがとう。軍曹」

　神谷は敬礼を返した。

　いわゆる自然というものを映像の中でしか知らない月の人間にとっては、この森というのは憧れの場所だ。見渡す限りの草花と高々と聳える樹木、さわわと風に揺れる木の葉の擦れ合

う音……。草や花くらいなら、月面でも見ることはできる。が、この木というものを見るのは難しい。これほどの木を育てようと思えば、大量の水と空間が必要だ。しかし、月面では流石にそれは不可能だ。だから一生のうちに一度は、その目で本物を見てみたいと誰もが思っていた。それは神谷も同様で、実際にその中を歩き目の当たりにして、それがまさに”自然”に存在することを不思議に思いつつ、その存在にありがたさというか、愛おしさすら感じた。それはきっと、自然というものを身近に感じることのできない月の人間ならではの感想であり、地球の人間であるならば、そこにあるのが当たり前のことで、これといって特別な感情など浮かんでこないのかもしれない。

　そんなことを考えながら、三十分ほども歩いたところで、神谷は、なにかの気配を感じて振り向いた。それは刺し貫くような殺気を放ち、一直線に彼に向けられていた。ここはまだ基地からだいぶ近い。敵が潜んでいてもおかしくはない。神谷は右手をバッグの中へと滑り込ませ、銃のグリップを握った。視線を鋭くし、五感を総動員して周囲に注意を向ける。ほどなく、風にさわわと草木が揺れ、静けさがさざ波のように広がっていく。その波紋を追うように、彼は周囲を見回した。鬱蒼とした茂みが広がり、草木は気持ちよさそうに日の光を浴びている。特に変わったところはなさそうだ。神谷は首をひねった。そして再び歩き始めた。

　行く手を遮るように張り出す木の枝や草の葉に足を取られるなどして、森を歩くのは決して楽なことではなかったが、そもそも森を知らない月の人間にとっては、それでもなかなか楽しいものだった。見たこともない草花が咲き誇り、聞いたこともない不思議な鳴き声が響き渡って、なんとも言えない不思議な感覚が体を駆け巡っていくのは、神聖な場所に身を置いたときと似てもいるが、しかしそれとは根本的に異なるものであるようで、憑きものが落ちて、心と体が綺麗さっぱりと洗われたように感じた。そうすると、自分がこれからしようとしていることがばかばかしいことのように思えてきて、すべてを放り出してしまいたくなるが、課せられた使命感がなんとかそれを押しとどめて、神谷はため息を吐き出して、森と言うところは本当に不思議なところだと、そんな感想を心に浮かべた。そうしてやがて、彼は森の外れへとやってきた。木立を抜けた向こうに、二車線の道路が見える。神谷は森を出て、アスファルトに足を踏み入れたところで、地図と方位磁石を取り出して、行くべき方角を確かめた。左の方を見て、陽炎に揺れる白いラインを見つめる。森は途中で途絶え、その先には赤茶けた大地が広がっていた。彼は地図と方位磁石をバッグにしまった。

　三歩ほど足を踏み出した時、ガサガサっと草木の擦れ合う音が聞こえて、神谷は振り向いた。そしてそこに見たものに息をのんだ。黄色と黒の、縞模様の毛皮を纏った獣が、体をしなやかに波打たせながら、のそりと姿を現した。以前、地球の生き物を紹介するビデオで見たことがある。確か虎と呼ばれる猛獣だ。見た目はそれに間違いない。しかし、その体躯は映像の中のものとは異なり、馬ほどにも大きく、波が迫ってくるような威圧感がある。それは虎と言うよりは、別種の生き物と言っても良さそうだ。獣は荒々しい鼻息の中から絞り出すように唸り声を上げ、上目遣いに神谷を見つめた。その様子から、物見遊山で、人間とやらを見てやろうというのではなく、その肉塊で、腹を満たしてやろうと追いかけてきたのだろう。初めに感じた視線は、この猛獣のものに違いない。基地を出発するとき、ジョバンニが、森は以前ほど安全ではないと言っ

ていた。それはきっとこのことなのだと、彼は今になって初めて理解した。
　この猛獣がどれほど腹を空かせているのかは知らないが、おいそれと餌になってやるつもりはない。神谷はわずかに腰を落とすと、ゆっくりと後ずさった。そうしながらバッグに手を伸ばし、銃を取り出して獣に向けた。獣は敵意を察知して、首を落として探るような目で神谷を見つめた。その様子は、傍目から見ると、躊躇してるようにも思えたが、それはただ単に、相手の出方を窺っているだけだった。獣は笑うかのような唸り声を上げると、ゆっくりと歩いて、足音もなく静かに間合いを詰めた。そしてその鼻息が間近に感じられるほどに近づいたとき、神谷はいよいよかと覚悟を決めて、引き金に掛ける指に力を込めた。と、それを待っていたかのように、獣は地に這うように体勢を低くすると、その刹那、素早く跳躍して獲物に飛びかかった。準備を既に終えていた人差し指は、迷いなく引き金を引き、銃声が三発とどろいて、獣が覆い被さるようにして、一人と一匹は倒れ込み、動かなくなった。
　暫しの沈黙が訪れて、ほどなく、猛獣の腹の下から、腕がにょきりと飛び出して、なにかを探すように宙をぐるりと一巡りしたのち、もぞもぞと、イモムシが歩く時みたいに、神谷が這い出てきた。彼は立ち上がって一つ大きく息を吐き出すと、猛獣の骸を冷めた視線で見下ろした。獣の精気は既に無く、真っ赤な鮮血が地面を濡らしている。到着早々、猛獣に襲われるとはついていない。前途多難といったところだろうか。彼は銃をバックに戻してため息を吐き出すと、やれやれと頭を降りながら衣服についた汚れを払い落として旅の続きへと戻った。
　三十分ほども歩いたところで、ファンファーレにも似たクラクションが鳴った。赤い乗用車が神谷の横を通り過ぎ、五メートルほど先で停車した。車はぶるんぶるんと音を上げ、体を小刻みに左右に揺らして、彼が近づいてくるのを待っている。見たところ官憲関連の車両ではないようだが、いったいなんの用だろうか……。神谷は警戒を向けつつ、車の脇を通り抜けようとした。すると、助手席の窓が開いて、運転手が声をかけてきた。
「こんにちは」
　アジア系であろうか、長い黒髪を後ろで束ね、黒縁のめがねを掛けて、ベージュ色のカーディガンを羽織った、全体を通して地味な印象の女性だ。見た目に違わず大人しそうな感じで、彼に対して警戒を抱いた様子もない。彼女は続けた。
「こんなところで、どうされたんですか？」
　こんな場所を一人で歩いていたら、当然、こういう質問になるだろう。
「ああ……実は……」神谷は困った素振りを見せ、相手が心配そうな顔で続きを待っている僅かな時間に、素早く思案を巡らせて、それらしい答えを言った。
「迎えの車が故障してしまいまして……修理に時間がかかるそうなんですよ。でも、こんな場所で、じっと待っているわけにもいきいませんから……それで……」
「そうですか。それは大変ですね」女性は本当にそう感じている様子を顔に滲ませた。「どちらまでいかれるんですか？」
「シアトルへ」
「私もそこへ向かうところなんです。よろしければ、お送りしますよ」
　実のところ、先ほどの出来事のこともあり、目的地まで車で行けるならありがたい。

「いいんですか？　私なんかが乗っても」
　女性はくすりと笑った。
「かまいませんよ。私には、あなたはそんなに悪い人には見えませんから」女性はそこで、僅かに表情を曇らせて「あなたが月人なら別ですけど」
「月人、ですか」
　地球の人々も、月の人々も、元は同じ地球人のはずではあるが、まるで別種の生き物であるかのように、地球では、月の人々のことを月人と呼んでいた。その言葉の裏には、侮蔑と憎悪が込められている。
　神谷は探るように女性を見つめた。彼女の様子から、彼のことを月人とは思っていないようだったが、それでも、神谷は確かめずにはいられなかった。
「私が月人だったらどうするんです？」
　女性は引き潮のように笑みを消した。まずいことをしたかと、神谷は思った。が、一旦は消えた微笑みが再び現れて、次に放たれた言葉で、彼はそれが杞憂であることを知った。
「そんな、冗談言わないでくださいよ。月人が、こんなところにいるはずないじゃないですか」
　神谷は愉快そうに満面に笑みを浮かべた。
「ええ、そうですね。もちろん冗談ですよ。それじゃ、お言葉に甘えさせていただきます」
　女性はにこりと微笑むと、ドアを開け、神谷を招き入れた。
　車は軽快なエンジン音を響かせて、川を泳ぐ魚のように快調に進んだ。時折、対向線をトラックが通る以外には、他に車両の姿はない。いかにものんびりとした風情ではあったが、それらのトラックの前後を、機関銃を備えた四輪駆動車が、睨みをきかせるように走る姿は、やはり戦時中なのだと実感させた。
　走り始めて暫くは、二人とも無口で、エンジン音と風を切る音だけが聞こえていた。お互い顔見知りというわけでもなく、交わすべき話題もないわけだから、当然と言えば当然だ。だが、こうして二人きりという状況で、会話がなく静寂だけがあるというのは、どうにも居心地が悪い。それで、我慢できなくなったのか、とうとう女性が口を開いた。
「そういえば、来る途中で虎が道路に倒れていましたけど、もしかしてあれはあなたが？」
「えっ？」一瞬、神谷はなんの事を聞かれているのかわからなかった。が、すぐに質問の意図を理解して「ああ、あれですか。ええ、そうなんですよ。突然、襲われまして。護身用に銃を持っていましたので、それでなんとかなりました」
「そうですか」
　女性はまるで自分のことのように言って、安堵のため息を漏らした。彼女は続けて尋ねた。
「でも、どうしてそんなことに？」
　もちろん、本当のことを話すわけにはいかないので、一部の事実を元に、彼は話を創作した。
「実は、私は植物学者でして、生育状況について調べていたのです。氷期が終わってからのち、植物がどれくらい戻っているのかを知るのは、私たちの今後にとっても、とても重要なことですからね。で、調査が終わって帰ろうとしたとき、あれがじっと睨んでいるのに気がついたんです」

女性はまっすぐ前を見て、頷きつつわずかに眉を吊り上げた。その彼女の横顔には、好奇心の色が浮かんでいた。神谷は続けた。
「それで、恐ろしくなって、なんとか森の外まで逃げてきたんですが、そこまで追いかけてきたんです。きっと、私を食べるつもりだったんでしょうね。うなり声を上げて、いまにも飛びかかってきそうでした。私は持っていた銃を手に身構えました。すると、虎は笑うように一つ唸ると、猛然と襲いかかってきました。私は逃げ出しそうになりましたが、なんとか踏ん張って、銃の引き金を思い切り引きました。銃弾は虎の心臓を打ち抜いて、そして、獣は動かなくなりました」
女性の目がくわっと見開かれていた。疑っている様子はなさそうだ。
神谷は頬を緩ませて「いや、一時はどうなることかと思いましたが、なんとか助かって良かったですよ」
「ええ、本当ですね。実際、虎に襲われて亡くなる人も多いですから。時折、森の外まで出てくることもあって、とても危険なんです」
「ええ、まったくですね。私も、森に入るのは初めてというわけではないのですが、あそこまで大きいのは初めてです」
「虎だけではないですよ。巨大化しているのは……。詳しいことは分かっていませんけど、酸素の量が増えたことが理由だとか……。もっとも、すべての動物が大きくなったわけではありません。でも、凶暴性を増しているのは共通していますね。餌が不足しているので、当然と言えばそうかもしれませんけど」
「なるほど」
神谷はあえて大きく頷いて、同意を見せた。もちろん、そのようなことは月の住人である彼には知る由もない。しかし、話を合わせておく方が、なにかと都合が良いだろう。
話が一段落して、彼は窓の外を眺めた。遠くに、林立するビルの群れが見えてきた。「あれがそうですか？」
神谷はそのビルの山をみつめて尋ねた。
「ええ、そうです」女性はちらりと神谷を見てから答えた。「シアトルは初めて？」
「ええ」
「とてもいいところですよ。あれさえなければ」
女性はそう言って顔をしかめる。
神谷は怪訝そうに女性を見やり、次に視線を転じて道路の先へと目を向けた。シアトルの街並みは立派で、住むのに問題などなさそうに見える。
「あれとは？」
「空爆ですよ」
「ああ、なるほど……」
今も昔も、東でも西でも、政治、経済の中枢とされる都市は、戦時においては、その攻撃対象となるのが常だ。だからどんなに風光明媚で発展した都市でも、それがあっては、魅力は半減どころか失われたと言って良いだろう。神谷は同情を込めて、そしてその深層においては、本音を

その言葉に覗かせた。
「早く戦争が終わるといいですね」
「……ええ」
　そんなことあるはずもない、とでもいうように、女性は力なく答えた。
　街に入ったところで、神谷は車を降りた。女性はもう少し先まで行くらしく、街の中心部へと向けて車を走らせていく。彼はそれを見送ると、バッグを肩に掛け直して、車を追いかけるように歩き始めた。
　とある公園で彼は公衆トイレに入り、バッグから作業着を引っ張り出して着替えた。銃と身分証は帰りに回収するため、ビニール袋に入れてタンクの中に沈め、先程まで着ていた服はゴミ箱に捨てた。バッグを肩に掛け、鏡の前に立ってその中の自分をじっと見つめ、一つ息を吐く。蛇口をひねって手を濡らし、顔を覆って湿らせる。冷たい水滴が火照りと共に緊張感を適度に解いて、彼は”よし”と気合いを入れると、トイレを出て、公園を取り囲む木立の向こうに見えるビルの方へと歩みを進めた。
　街の中心に近づくにつれて、建物に刻まれた破壊の爪痕はだんだんと大きく、そして深くなっていく。荒廃の度合いも色濃くなって、生の気配も感じられない。本来なら賑やかなはずの繁華街も、まるでゴーストタウンのように寂れ廃れていた。街の中心部には、大概、重要な施設や建物が集まっていて、故に、月の攻撃も必然的に、こうした場所に集中していて、そのために、街の郊外よりも被害が大きかった。そんな場所にいったいどんな用事があるのかと、不思議に思えるが、そこにこそ、彼の目的があった。
　その建物は背の高いのっぽと言うよりは、ずんぐりとした体型の建物で、五階ほどの高さしかなく、天井はかろうじてその形を保ってはいたものの、壁面のガラスはところどころ砕け落ちていた。その姿はまるで、過疎化の波に押し流されて、学ぶ者のいなくなった廃校のようだ。かつては多くの企業がここに籍を置き、世界を相手に戦っていたに違いない。が、今はその面影すらない。そこにあるのは、熱意を失った、ただの抜け殻だ。
　神谷は、半開きの自動ドアを抜けて中へと入った。床に散らばったガラスの破片をじゃりじゃりと踏みつけながら少しばかり進むと、左手に受付があって、その向かいには、待合のための椅子がずらりと並び、正面のエレベーターホールの右手に、コーヒーショップがあった。もちろん、受付には笑顔振りまく女性などいないし、椅子に座って待ち合わせをしている人の姿も、コーヒーにほっと一息をついている人もいない。この建物自体、現在はその目的を果たすためには使用されていないから、ここを訪れる者もいないのだ。ではなぜ、彼はここへ来たのか。それは、この地下に秘密があった。神谷はコーヒーショップの方へと向かい、その左手の細い通路へと入って、重い防火扉を開けて、階段を降りていった。
　ドアを抜けて再び通路に出たところで、左に少し歩くとエレベーターがあった。ボタンは下降を示すものが一つだけある。ドアが開いて中へと入り、あらかじめ用意しておいた身分証をパネルにかざして、無事に承認が下りると、彼は目的の階数のボタンを押した。エレベーターはゆっくりと動き出し、徐々に加速を始める。神谷は僅かに顔を上げて監視カメラを視界の端に捕らえた。緊張感を気取られては不審がられるかもしれない。彼はバッグの位置を直してみたり、眠

そうにあくびなどをしてそれをごまかした。そうしてエレベーターは数秒後に目的の階に到着した。
　エレベータを降りて通路を進み、扉の前で認証装置に身分証をかざすと、ピピッという音と共にガシャッと鳴って、セキュリティは解錠された。そうやって、通路を進んでは認証を繰り返して、ようやく彼は、目的の部屋へとやってきた。
　中へと入ると、明かりは付いてなく、室内は暗闇のように真っ暗だった。その暗がりの中、緑やオレンジ色の光が忙しそうに点滅を繰り返していて、その様はまるで、宇宙空間を漂っているかのような錯覚を覚える。神谷は、壁をまさぐってスイッチを入れた。手前から奥の方へと順繰りに明かりが付いて、一気に現実世界が現れた。彼はぐるりと見回した。ビルのように並ぶラックの中に、コンピューターが押し込められて、慌ただしくチカチカと、ランプを明滅させている。人の姿はなく、空調が風を吐き出す音だけが聞こえた。
　神谷はラックの番号を確かめながら、迷路のような通路を部屋の中程まで進んだ。そして立ち並ぶラックの列の中に目的の番号を見つけると、扉を開けて目当てのコンピュータを確認した。バッグを下ろし、しゃがみ込んで、携帯型の装置を取り出してコンピューターと接続する。教えられた通りに操作して、該当の情報へと辿り着くと、ダウンロードを開始した。進捗を知らせる数字がゆっくりと値を増やしていき、五分後、八十パーセントに達した。ダウンロード完了までもう少しだ。
　その時だった。
「そこで何をしてるの？」
　鋭い声が聞こえて、神谷はぴくりと体が震えて固まった。そのまま視線だけを動かして、開け放たれたラックの扉に目を向けると、うっすらと女性の姿が映っていた。
　彼女は続けた。
「ここに入るには許可がいるのよ」
　もちろんそうだろう。だからいるはずのない人間がそこにいるとわかれば、彼女はすぐに警戒行動へと動くはずだ。それは阻止しなければならない。彼はゆっくりと立ち上がる。
　女性はその動きを目で追いながら「今日は私以外にはいないはず……」と言いかけたところで、その顔に驚きの色が浮かんだ。つい先ほどまで、車の助手席に座っていた男がいたからだ。
「あなた……どうしてここに……」
　そう言いながら、女性は一歩、後退した。神谷が足を踏み出したからだ。彼女の顔から血の気が引いて、みるみると青みを帯びていく。限界は近そうだ。神谷は更に一歩を踏み込んだ。
　そこまでくると、女性の動きは素早かった。ライオンを前にして、危機を感じ取ったインパラのように、くるりときびすを返すと、一目散に出口へと走った。神谷は慌てて駆け出すが、ラックの陰から飛び出したときには、彼女の姿はもうどこにもなかった。部屋を抜け出るほどの時間は無かったはずだから、どこかラックの陰にでも隠れん坊をしているのかもしれない。神谷はゆっくりと歩きながら、慎重にラックとラックの間を確かめていった。
　そうして数十秒ほどたった頃、警報がけたたましく鳴り響いた。隙を見て、女性が警報ボタンを押したのだろう。神谷は舌打ちをして、急ぎ取って返すと、荷物を引っつかんで出口へと走

った。外へ出て、廊下を全速力で突っ走り、反応の鈍い認証システムに苛立ちが沸き上がってきて、それをぶつけるようにして扉を肩で押し開き、もと来た道を戻っていく。そしてエレベーターホールに飛び込んだとき、ドアが開いて、警備員が二人、降りてきた。神谷はびっくりして急ブレーキを掛けたために、つるりと滑ってしまい思わず転びそうになった。それでもなんとか体勢を立て直すと、くるっと体の向きを変え、引き返そうと足を踏み出した。だが、勢いよく扉が開いて、別の警備員が入ってきて、扉をしっかりと閉めるとその前に仁王立ちになった。神谷は立ち止まり、振り向いた。二名の警備員が警棒を手にじりじりとにじり寄ってくる。もはや前にも後にも逃げ場はない。降参するより他になかった。彼は両手を挙げた。背後に気配を感じたが、あえて振り向くようなことはしなかった。後頭部に鈍い痛みが走って、彼は気を失った。

　その小さな部屋に窓はなく、その中程に机がぽつんと一つだけあって、天井からぶら下がった裸電球が、薄暗く室内を照らし出していた。出入り口の扉の隣には男が厳つい顔でぬっと立ち、威嚇するように神谷を睨み付けていた。
　神谷は視線を落として手錠を見つめた。両手を胸元まで挙げて、腕を広げるようにして引っ張ってみる。所々錆びついてはいたが、一つ一つの輪っかはしっかりと繋がり合って、離れる様子はまったくない。手入れが行き届いていないだけで、引きちぎれるほどには腐食してはいないらしい。男の咳払いが聞こえて、神谷は顔を上げた。男は神谷の手元に注意を向けていて、どうやら、無駄なことはやめろと言いたいようだ。神谷は男を見つめたまま、鼻をすすって、敢えてじゃらじゃらと音を立て、机の上に両手を上げた。男はそれを確認して、視線を元に戻した。
　それから暫くして、扉が開いて男が二人と、女が一人入ってきた。女性と男の一人は机を挟んだ正面に立ち、もう一人の男は机をぐるっと回り込んで神谷の隣に立った。神谷はその男を見上げた。眉間に大きなほくろがあって、まるで弥勒菩薩のようではあったが、彼の様子を見る限り、その名とは異なり、神谷を救済へと導いてはくれそうにもない。もう一人の方は、はんぺんみたいな顔に、小さな目と鼻と口がちょこんと乗っかっていて、なんとものっぺりとした印象だ。どうにもそれが可笑しくて、彼は笑いをこらえようと下唇を噛みしめて、そのはんぺんを見つめた。ほくろの男が言った。
「自分がいま、どういう状況に置かれているのか、理解していないのか？」
　やはり、その声からは慈悲深さは微塵も感じない。そのような相手にはなにを言っても意味を成さないだろう。神谷はなにも答えず、はんぺんの男から視線を逸らした。それを確認して、男は女性に尋ねた。
「君が見たのはこの男に間違いないね？」
「はい。間違いありません」
　神谷が視線を向けると、彼女は僅かに怯む様子を見せた。しかし、彼は手錠を掛けられているし、この場には味方が三人もいるので、それで心強いと思ったのか、彼女は胸を張って説明した。
「迎えが来ないと言うので、街まで乗せてあげたんです。あんな場所を一人で歩いているなんて、危険ですから……。それに、植物学者だと名乗っていたので、問題ないと思ったんです」
　しまいには言い訳がましくもなったが、男はそれを咎めることはしなかった。彼女はそこでふと思い出し、付け加えた。
「そういえば、もし自分が本当に月人だったらどうするんだと、そんなことを言ってました」
「なるほど。で、どう答えたんだね？」
「冗談はやめてください、と……。本当に、そうは見えなかったんです」
　男は苦笑いを浮かべた。
「まあ、傍目には区別はつかんからね。おそらく、自分が月人と見破られるかどうか確かめたんだろう。で、あなたはまんまと騙されたわけだ」

「彼が月人だとわかっていれば、乗せてはいませんでした」
　女性は申し訳なさそうにうなだれた。
「あなたが気に病む必要はない。それで、彼をどこで拾ったんだね？」
「街からずっと離れた路上でです。森の中で植物の調査をしていたと言っていました。それで、外に出たところで虎に襲われたそうです。路肩に死骸がありましたから、それについては本当のことだと思います」
「ふむ。森の中か……」
　男はそう言いながら二度ほど頷いて、神谷をじろりと見据えた。なにかを探るような目だ。視線を逸らすと余計に怪しまれると考えて、彼は敢えてじいっと見つめ返した。
「それで、街で彼を降ろした？」
「はい。街を少し入ったところでです。どうしてこんなところで、と思いましたが、あまり立ち入ったことを聞くのもなんでしたので……。申し訳ありません」
　女性はぺこりと頭を下げた。
「いや、誰でもそうするだろう。謝る必要はない。で、その彼が、なぜかあそこにいたと、そういうわけだね」
「はい」
「なるほど、よくわかったよ。ありがとう。ところで、その死骸のあった場所は覚えているかね？」
「はい」
　女性は名誉挽回とばかりにはっきりと返事した。
「では、彼にその場所を伝えてくれるかな？」
　ほくろの男ははんぺんの男を目で指し示した。
「わかりました」
　女性ははんぺんの男と共に外に出て行く。
「さて……」
　ほくろの男は神谷の正面へと回り椅子を引き出した。キイキイと耳障りな音が響く。彼は腰を下ろし、机に肘をついて両手を顔の前で組み合わせ、息を吹きかけるようにして言った。
「君は何者だね？」
　神谷はとぼけた様子で肩をすくめた。
「彼女が言ってたでしょう？　植物学者だって」
「森に入って調査を行うには、事前の申請が必要だ。その報告は受けていない」
「それはあなた方の不手際でしょう。適材適所という言葉がある。考え直した方がいいですね。あなたも含めて」
　男は愉快そうに目を細めて口角を吊り上げた。
「なるほど。なかなか挑戦的だな。私はそういうのは嫌いではない」
　彼は腕を組み、背もたれに身を預けた。男は続ける。
「さて、君が持っていた端末を調べさせてもらったよ。軍事情報にアクセスしていたようだね。

なにを企んでる？」
　もちろん、神谷がそれに答えるわけはない。そんなことは、男も百も承知だろう。
「まあ、いい。いずれ全て明らかになるだろう」
　ほくろの男は、扉の前に立っていた男に合図した。彼は神谷のそばにやってくると、腕を掴んで立ち上がらせて、外へと連れて行った。

　アンナは地下街の通路を行きつ戻りつして、負傷者の手当てに忙しく走り回っていた。彼女は地球連合の陸軍に所属する兵士で、本来であれば、前線で武器を持って戦うところだが、医師としてのスキルを買われて、また、彼女自身の希望ということもあって、こうして市民を救護する任に就いていた。もちろん、専門職としての医師もいるにはいたが、負傷者の数に対して圧倒的に少なく、彼女のように、医師としての技術を持つ者が借り出されていたのだ。その彼女の耳に、少し離れた場所で粥をすすりつつ話をする男たちの声が聞こえてきた。彼女は諜報部の兵士だから、こういうときは必然的に、そちらへと意識が向かう。彼女は包帯を巻きながら、その話に耳を傾けた。
「早く上に戻りてぇな」
　すると別の男が答えた。
「そいつは無理だな。戦争が終わりでもすりゃあ別だがね。月の連中は強情だから、終わりっこねえや」
「あいつら、なんでそんなに強情なんだ？」
「さあね。直接聞いてみろよ」
「馬鹿言っちゃいけねえよ。ただじゃすまねえだろうが」
「冗談だって」クツクツと笑って「そんなに怒るなよ」
　男は、はあ、とため息を漏らして「こんな穴蔵生活。いい加減うんざりだぜ」
「だったら出てきゃいいじゃねぇか」
「俺はまだ死にたかねえよ」
「なら我慢するしかねえな」
「ちぇっ！」
　男は不満そうに舌打ちした。
　月からの空爆により、街は激しく破壊され、人々は生活の基盤を失った。郊外に逃れようにも、街の外は未だ動物たちの領域で、人間が住むにはまだまだ安全ではない。だから人々の目はその足下に向けられた。そこには地下鉄、下水道、電線路、地下街などが、縦横無尽に張り巡らされていて、十分とは言えないまでも、ひとまずの生活を送れるだけの空間があった。そこでなら、彼らは、生きていけると思ったのだ。とはいえ、地下とて安全というわけではない。度重なる空爆は地面をえぐり大地を揺らす。それによって地盤が崩落することもあり、命を失う者や怪我を負う者が絶えなかった。それでも、地上よりはましだからと、人々はこの地下で暮らすことを選んだわけだが、やはり、地球の子たる彼らにとって、抜けるような青空と、肌を刺すような太陽は懐かしく、それを欲するのも無理のないことだった。
　アンナはため息を吐き出した。
「どうしたの？　なにか心配事？」
　アンナははっとして声の方を見上げた。
「ぼうっとしたりして、手がお留守だったわよ」

　彼女の言う通り、包帯の進行は途中でとまっており、患者は怪訝な顔でアンナを見つめていた。
「ごめんなさい」
　アンナは苦笑いを浮かべ、急いで包帯を巻き終えた。そして患者に笑みを送って立ち上がり、女性に向き直って尋ねた。
「いま戻ってきたところ？」
「ええ。ついさっき……」
　そう答えた彼女の顔が曇りがちであることが、よくない状況であったことを物語っている。
「ひどかったのね」
　自然とアンナの表情も靄がかかったようになった。
「ここはまだましな方ね」
　女性はため息と共に辺りを見回した。
　壁も天井もまだしっかりと残っているし、なにより、負傷者の数も他に比べれば多い方ではない。ある街では、あらゆる構造物は形を失くし、地盤は崩落し、人の住めない場所となっていた。ここもいつそうなるとも知れないわけだが、それでも、一応の生活を送ることができるというのは”まだまし”というのもうなずける。
「街の人たちは？」
「近くの街に移ってもらったわ。そこなら地盤も固いから、しばらくは大丈夫でしょう」
「そう……。それはよかったわ」
　女性は同意を示すように笑みを浮かべた。そして、敢えて、といった様子で朗々とした声で尋ねた。
「手当てはもう済んだの？」
「ええ。みんな軽傷で良かったわ」
　アンナは安堵の笑みを浮かべた。
「あなたがいてくれて助かるわ。安心して任せられるもの」
　女性は壁に寄りかかった。アンナも同じようにする。
「本当は、私なんかが活躍しない方がいいのよ」
「そうね。でもおかげで、みんな安心していられる。きっと、お父さんも褒めてくれるわ」
「そうかしら」
「あなたの医師としての能力は、お父さん譲りだもの」
「父のこと、知らないでしょ」
　アンナは苦笑いを浮かべた。
「母がよく言ってたの。腕のいい医者だったって……。何年になるの？」
「そうね……もう、十年になるわ」
　アンナは懐かしむような遠い目をして答えた。
　彼女の父親がとある街の病院で医師として勤務していたとき、突如として現れた月の船団からの空爆を受けて、街は壊滅的ダメージを受け、多くの犠牲者を出した。父親が勤めていた病院も

破壊され、がれきは砂山のように積み重なって、生存者など皆無と思われた。事実、彼女の父親の遺体は見つからず、かろうじて生き残った者も、指折り数えるほどしかいなかった。捜索を担当した軍関係者は、爆撃の激しさに、きっと肉片も残らなかったのだろう、と無表情に答えた。その様子に、当時の彼女は怒りさえ憶えたが、彼らにしてみれば、あちこちで同様のことが起きていたわけで、そのことにいちいち反応していては身が持たない。だからあんな人情味に欠けた態度となったのだ。だから今、おなじ環境に身を置く彼女としても、当時の彼らの反応を理解できないでもない。もちろん、彼女自身はそんな風に冷徹にはなれないし、医師としての彼女には、人の命を希薄に扱うことなど出来ようもなかった。

「お墓参りにも行けていないんでしょう？　早く戦争が終わるといいわね」

「ええ、本当に、そうね……」

　戦争の終結。その言葉が希望的観測に過ぎないことは、彼女たちにも良くわかっていた。互いへの拒絶反応、深まる対立。それらは彼らとの間に大きく立ちはだかって、歩み寄りというものを至極困難なものとしていた。双方共に着地点を探してはいるものの、出口の見えない戦争は、終結へと向けたその道筋を暗澹たるものとし、彼らを迷子のように彷徨わせていた。

「アンナ少尉」

　呼ばれてアンナはその声の方を見た。兵士が通路を歩いてくるところだった。兵士は言った。

「申し訳ありません。手を貸していただけますか？」

　アンナは医師でもあるが、それ以前に兵士でもある。すべきことは多い。彼女は兵士の方へ歩いて行こうとしたが、それを女性が制止した。

「私が行くわ」

「でも、戻ってきたばかりじゃない」

「いいのよ。ここは任せて」

　こうなると、一歩も引かない性格であることはアンナも良く知っている。だから彼女は微笑みで了承を示した。親友は笑みを返して、アンナの肩をぽんと軽く叩くと、兵士と共に歩いて行った。

　それから一時間ほどがたった頃、突如として、大きな爆発音と共に空間がゆがむように大きく揺れた。それは頭を捕まれて、思いっきり左右に揺さぶられたかのようで、頭がくらくらとして、アンナはその場にぺたんと座り込んでしまいそうになった。どーんという音は立て続けに響いて、照明がちかちかと明滅し、コンクリートの塵が霧雨みたいに降ってくる。彼女は天井を見上げて眉間に皺を寄せた。終わったと思っていた空爆が再開されたのだ。アンナは素早く左右を見回した。驚き、戦いて、首をすくめて天井を見上げる人々の姿が見える。こういうとき、彼女がすべきことは、彼らをより安全な場所へと誘導することだ。アンナは避難路を指さして、大きな声で指示した。

　爆撃はいつにもまして激しく、爆音は絶え間なく空間を切り裂き、地下街を激しく揺さぶった。そうした中を、人々は助け合いながら避難していく。そうして、あと少しですべての住人の待避が終わろうかという時、轟々たる音と共に激しい振動が地下街を揺るがして、もうもうとほこりが舞い上がり、砂嵐のように通路を埋め尽くした。その砂粒の中から、小石ほどの塊が飛び出

して、ダンスのように跳ね回り、アンナの頬をぴしっと打ち据えた。危険を感じた彼女はとっさにしゃがみ込み、背を丸めて頭を両手で覆う。やがて、喧噪が消えて、礫の乱舞も終演を迎えると、アンナはそろりと顔を上げた。通路の先、角を左に曲がった方から、寒い日の呼気みたいな煙がふわっと湧き出ているのが見えた。そこは彼女の友人が兵士に誘われて向った場所だ。アンナは勢いよく立ち上がると、走り幅跳びの選手みたいにその煙の中へと飛び込んだ。

　通路は埃にまみれ、土砂とコンクリートの瓦礫が山を作っていた。道は完全に塞がれていて、向こう側がどうなっているかを見て取ることはできない。まさかこの山の下敷きに？　とアンナはいやな予感に胸が張り裂けそうになった。そこに兵士が駆けてきた。

「少尉。お願いします」

　彼の顔は汗とほこりにまみれてべっとりと黒くなっていた。彼がなにを求めているのかは聞くまでもない。

　アンナは振り向いて瓦礫の山を見つめた。きっと、彼女なら大丈夫だ。アンナは強く、そして願いを込めてそう結論づけると、責務を果たすべく通路を引き返した。

　混乱の中、アンナは臨時の病院を開設し、怪我人の手当てに奔走した。多くの者が避難していたとはいえ、逃げ遅れて巻き込まれた者も数多く、被害は大きい。こういうとき、トリアージは重要だ。軽傷な者より、より重症な者を優先する。助かりそうもない者よりも、助かりそうな者を先に治療する。それでも助けられないこともある。彼女にとってそれがなによりも一番つらかった。そして、医師としての限界を痛感させられる瞬間でもあった。

　そんな彼女の元に、患者が一人、運び込まれてきた。衣服は破れ、顔はほこりで黒く染まっている。初め、その患者が誰かわからなかった。しかし、まさかと思って顔の汚れを拭き取ると、それが友人のものであることがわかって、彼女は、電流がつま先から走って頭のてっぺんから抜け出るのを感じた。アンナはかがみ込んで彼女に呼びかけた。が、息はしているものの反応はない。

「瓦礫の下敷きになっていました。話によると、仲間を庇って自らが犠牲になったようです」

　彼女を運び入れた男性が言った。

　彼女らしい、とアンナは思った。そういう自己犠牲的な精神は嫌いではなかったし、尊敬できる部分でもあると思っていた。

　アンナは彼女の心音を計測した。脈は蚊が鳴くほどにか細く、上下する胸の鼓動はまさに微動と言ってよいほどだ。アンナはもう一度、呼びかけてみた。耳元に口を寄せ、大きな声で……。すると、彼女はうっすらと目を開けた。が、視線はぼうっとした様子で目に力が無い。アンナはその視界に入るよう、その瞳を覗き込んだ。それが功を奏したのか、彼女の目に希望の光が入るのを見たような気がした。しかし、次の瞬間、彼女は大きく咳き込んだ。咳と共に血を吐き出して、口の周りがベットリと真っ赤に染まった。内臓を損傷しているのは間違いない。視界の端に、幼子を抱いてうずくまり、じっとこちらを見つめる母親の姿が見えた。どうするべきか、迷っている暇はなかった。

　部屋のちょうど真ん中に、大きめの机が一つあり、その机を挟んだ反対側に、男が二人座っていて、左手の男の背後には、ほくろの男が控えていた。
　神谷は二人の男を検分した。左手の六十代くらいの男は骸骨みたいな顔立ちで、そのせいか弱々しくも見えるが、その様子は毅然としていて、見た目とは異なり、堂々とした居住まいだ。一方で、右手の男は毅然とした様子は同じではあるものの、少しふっくらとした顔に、どことなく困惑したような表情を浮かべていた。
　左手の男が言った。
「なにか不便はなかったかな？」
　神谷は直接答える代わりに肩をすくめてみせた。問題ない、という、皮肉を込めた意思表示だ。
　骨張った顔に苦笑いが浮かぶ。
「そうか、それは良かった」男は短く息を吸い込んで「私は安全保障理事局局長のマーク・ブライトだ」マークは隣の男を視線で指し示す。「そちらは経済社会理事局のイブラヒム局長」
　イブラヒムは憤りのこもった目を向けた。視線の先の男はスパイをしていたわけだから無理もない。神谷はちらりと見やるだけで挨拶は返さなかった。
　マークは続けた。
「さて、我々は君を解放しようと思っている」
　神谷は驚きもせず、眉一つ動かさずに「タダでってわけじゃ、なさそうだな」
　マークは軽く微笑んだ。「察しが良くて助かるよ」そして、すぐにまじめな顔になって「我々の仲間を、月面基地まで連れて行ってもらいたい」
「なんのために？」
「聞くまでもないだろう」
　マークはにやりとした。
　つまり、考えることは一緒、と言うことなのだ。だが、そんなことを許すわけにはいかない。
「お断りだね」
　マークは背もたれに寄りかかった。
「月ではどんな方法で刑を執行するのかな？　宇宙空間に放り出すとか？」
　彼はそう言って笑った。
　宇宙空間に放り出されれば人間などひとたまりもない。すぐには死なないまでも、酸欠によって意識を失い、終いには体液が蒸発し干物みたいになってしまうだろう。まるでゴミでも捨てるみたいなこのやり方は、残虐で人間性に欠けると言える。では、他の方法なら良いのか、という議論はあるが、人類が月へ移住して以降、幸いにも、死刑が執行されたことはない。いずれにしても、言うことを聞かなければ死刑だぞと、脅しを掛けているのだ。
　神谷は苛立ちが喉を撫でるのを感じたが、それを吐き出すのはなんとか我慢した。
「つまり、選択肢はない、ということか？」

「あるさ。我々の願いを聞いてくれればいい。無事に彼女を送り届けてさえくれれば、あとは好きにしていい」
　マークはそう言うと、首を傾けて合図を送った。すると女性がすっと出てきて、彼の二メートルほど後方に立った。
「こちらは、アンナ・ローゼンベルグ少尉。彼女が月基地まで同行する」
　神谷は女性を見つめた。彼女の方は、神谷を見もせず、ただ真っ直ぐ前を見据えている。
「それで、どうするかね？　死を選ぶか、それとも、助かる方を選ぶか」
　イブラヒムが口を挟む。
「断ってくれて構わないのだぞ。我々としても、部下を危険にさらすような真似はしたくはない」
「部下と言うが、彼女は、あなたの直接の部下ではないだろう？」
「それはそうだが」イブラヒムの顔に浮かぶ憂慮が更に深くなる。彼はこのことにはあまり乗り気ではないようだ。「彼女も貴重な戦力だ。それに医師でもある。それを、無駄に失いたくない」
「無駄かどうかはやってみなければわからん」マークはアンナに目を向けて「それに、彼女も軍人だ。軍人なら、軍の命令には従うさ。そうだろう？」
　イブラヒムは一縷の望みを込めてアンナを見つめたが、彼女は視線を逸らすようにただ前を真っ直ぐ見据えている。アンナは決められた台詞を繰り返すロボットみたいに答えた。
「それが私に課せられた任務なら、それに従うのみです」
「どうだね。軍人の鏡ではないかね」
　マークは得意げな顔でイブラヒムの横顔を見つめた。イブラヒムの方は苦り切った顔をしている。マークは神谷の方に視線を向けて続けた。
「さて、もう一度聞くが、どうするね？」
　彼らの望みを聞いてやったところで、そもそも助けるつもりなどないだろう。用が済んだら処分されるのが落ちだ。ならば、恭順を示した振りをしておいて、隙を見て逃げてやろう。神谷はそう考えた。
「わかった。言う通りにしよう」
　マークはにいっと笑った。

　車はゆっくりと速度を落として、滑るように路肩に停車した。数メートルほど前方の路面には、黒いしみがうっすらと残っている。神谷が倒した獣の血の痕だろう。誰かが処分したのか、死骸はもうない。
　アンナは車を降りて、車体後方をぐるりと回って反対側へと向かった。銃を向けながらドアを開ける。
「降りて」
　神谷はアンナを見据えつつのそりと車を降りた。
「あっちよ」
　アンナは銃を振って行き先を示す。
　神谷はドアを閉めてくるりと向き直り、指示された方へと歩き出す。アンナはその背に銃を向けたまま後をついて行った。
　運転席のパワーウィンドウがすうっと下に降りて男が言った。
「うまくやれよ。これがうまくいくかどうかに、地球の未来がかかってるんだ」
「わかってます。必ず成功させます」
　アンナは表情を引き締めた。
　窓が閉じて車は走り出し、少し進んだところでユーターンすると、通りがけにクラクションを鳴らして去っていった。
「さあ、行きましょう」アンナは言った。
　神谷は両手を挙げて「手錠は外してくれないな？」と言って鎖を揺すり、チャラチャラと音を鳴らした。
　アンナは手錠をちらりと見遣り「立場がわかっているの？」
「俺がこんなのをつけてたら、仲間が不思議がると思うけどね」アンナは不服そうに神谷を見つめた。彼の言っていることが正論であることは理解しているのだ。彼はもう一押しと続けた。「いいさ。彼女がそういう趣味なんだと、言ってやるから」
　アンナは悔しそうに神谷を睨むと、ポケットから鍵を取り出して錠を外した。
「言っておくけど、妙なことしたら、撃つから」
　神谷は両手で交互に手首を撫でて「妙なこと？　ここでかい？」となにやら意味ありげに言った。
　アンナはすかさず「減らず口を叩いても、よ」と釘を刺す。
「わかったよ。優しくないね」
　神谷は手のひらを向けて降参の意を示した。
　アンナは冷ややかな眼差しを向ける。
「甘やかされる歳でもないでしょ。わかったら、さっさと行って」
　神谷は軽く笑って、すねた子供みたいに口を尖らせた。が、くるっと背を向けたときには、その顔からは笑みが消えていた。

　森に入って暫くすると、神谷ははたと立ち止まった。森が持つ独特の雰囲気と緊張感に、獣に襲われた時のことを思い出したのだ。彼は振り子のように首を回して辺りを見回した。動物や鳥たちの姿は見当たらず、鳴き声すらも聞こえない。もしかすると、近くにやつがいるのかもしれない。

「どうして立ち止まるの？」

　アンナの警戒の声が飛ぶ。

「俺は武器を持ってないんだ。また襲われでもしたらたまらない」

　神谷は振り向きもせず答えた。視線は辺りに向けられていて、注意を怠らない。

「それなら心配ないわ」

　落ち着かせようとするような、少しだけ優しい口調でアンナは答えた。

「どうして？」

　神谷は振り返り、驚きを表情に浮かべる。地球人の彼女なら、森の危険性は充分に知っているはずだ。なのにその顔には、不安など微塵も浮かんでいない。

「熊除けみたいのを持ってるのよ」

「熊除け？」

　熊というのは確か、雑食性の大きな獣であると、図鑑で見たことがある。もちろん月にはいないが、それを模ったおもちゃとして親しまれてはいる。ただ、危険な生き物であることは充分に認識されていた。

「そう。彼らの苦手な周波数を出しているの。だから彼らは寄ってこないわ。昆虫は別だけど」

　なるほど、だから近くに動物たちの姿が見えないわけだ。たしかにそれなら安全かもしれない。

　アンナは続けた。

「ともかく、こんなところで立ち止まっている方が危険よ。わかるわね？」

　彼女の言う通りだ。猛獣もただ黙って見ているわけはなく、虎視眈々とチャンスを窺っているはずだ。となれば、移動を続ける方が安全だろう。彼らは再び歩き始めた。

　森が危険な場所だと言うことは、既に身を持って知っている。だが、彼女のおかげでその心配もしなくて済みそうだ。それで少し気分が楽になって、彼は世間話を始めた。

「今日はいい天気だな」

　暫く間があって「そうね」と返事。

「雨が降るときもあるのか？」

　ため息が聞こえて「当たり前でしょう」

「月では雨は降らない。およそ大気というものがないからね」

「それで同情を買おうとしているの？」

　アンナの冷たい声が背中を叩く。

　神谷は僅かに首を傾け、背後を仰ぎ見て「羨ましい、と思ってるだけさ」

「出て行ったのはあなたたちの勝手よ。私たちを置き去りにしてね」

「月は資源が少ない」神谷は視線を前に戻す。「すぐに全員が移住するのは不可能だ。だから時

間が必要だった」
「結局、その約束は果たされなかった。でも、結果として良かったのかもしれないわね。あなたたちがいなくなったおかげで、ずっと住みやすくなったから……。随分と苦労はしたけど」
　彼女の最後の言葉にはその思いがありありと浮かんでいた。
「苦労したのは俺たちも同じだ」
「言ったでしょう？　それは勝手だって」
　彼女の声には刺々しさがにじんでいる。
「それだけじゃない。多くの者が病に苦しんでいる。君たちと違って長くは生きられないんだ」
「……それは」
　アンナは意気消沈するように弱々しく言った。そして、それを振り払うように声高に続けた。
「初めから分かっていたことよ」
「そうさ……。仕方のなかったことだ。だけど、もう限界だ。俺たちはどうしても地球に戻る必要がある」
「だから私たちを攻撃する？　奪うために？」
「奪うなんて！」神谷は背後を振り向く。アンナの鋭い視線が目に入り、顔を正面に戻す。「ただ、認めてくれればいいだけだ。俺たちを」
「認められるわけないじゃない！」よほど声が大きかったのか、どこかの木の枝から鳥が飛び立った。アンナは声の音量を抑えて「あなたたちは、私たちを見捨てたのよ！」
「だから、それは……」
「この戦争のおかげで、いったい何人が命を失ったと思っているの？」
　彼女の銃を握る手に力がこもる。いつ引き金が引かれても不思議はない。彼女は言い募る。
「あなたたちのせいで……彼女は……」
　声が震えているのを神谷は感じた。が、戦争で死んだのはなにも地球人だけではない。
「俺たちだって何人も死んでる。お前たちだけじゃない」
「あなたたちのことなんて、どうでもいいわ」
　カチャリ、と金属の音が鳴る。アンナは続けた。
「本当なら、今すぐにでもあなたを撃ってやりたいわ。でも、今は生かしておいてあげる。あなたには、やってもらわないといけないことがあるから。わかったら、もう口を閉じた方が賢明ね」
　彼女の冷たい声が、銃身を伝わって彼の背中をぐりぐりと押した。神谷は口を真一文字に引き絞り、もうなにも言わなかった。
　基地まではまだ暫くあるが、かといって彼女をそのまま連れて行くつもりはない。ミイラ取りがミイラになる、ではないが、スパイしようとした者が逆にスパイをされたとあっては、とんだお笑い種だ。だから、なんとか機会を見て逃亡を図りたいところだが、彼女も流石に訓練を受けた兵士だ。なかなかその隙を見せない。ちょっとしたきっかけがあればそれで十分なのだが……。神谷は悔しげに下唇を噛みしめて木立を睨んだ。
　そうして数分ほどが経過したときのことだ。どこからか、ぶうん、という、ハウリングに似た

音が聞こえてきた。それは恐ろしいほどに低音で、びりびりと空間を震わせながら右へ左へと移動している。
「伏せて！」
　突然、アンナが低い声で言って、神谷の襟首を引っつかんでしゃがませた。彼女は緊迫の表情で空を見上げている。
　その視線の先に目を向けると、二メートルはあろうかという大きな昆虫が、彼らの上空を怒り狂ったように、ぐるぐると飛び回っていた。図鑑で見た、カマキリという虫に似ている。
　アンナが言った。
「彼らの巣が近くにあるんだわ。守ろうとしてるのね」
「例の熊除けは効かないのか？」
「そもそも体の構造が違うのよ。効くわけないわ。退治したいなら、殺虫剤が必要ね。もっとも、あれだけ大きいと、効くかどうか疑問だけど」
「人間は襲うのか？」
「滅多なことでは襲わないわ。こうして巣を守ろうとする場合か、食糧が乏しくなったときか、そのくらいね」
　神谷は目を丸く見開いた。
「餌にされることもあるってことか？」
「そうよ。あごの力は人間の太刀打ちできるレベルじゃないから、気をつけて」
　神谷は生唾を飲み込んで、飛び回る昆虫を見つめた。ぷっくりと膨れた腹部から伸びる、人間の腕ほども太さのある胴体の先の、三角形の頭の先端にある強靭そうなあごもそうだが、まるでプロレスラーの腕みたいな大きな二本の鎌も、名匠が作り出す刀のように危なそうだ。こういうときは、この昆虫が警戒を解くまで大人しくしているのが普通だろう。が、彼はむしろ好都合だと考えていた。神谷は昆虫に注意を向けつつアンナの様子を窺った。彼女は息を潜め注意深い眼差しで、昆虫の動きを一心に追っている。彼は、したり、と微笑んだ。神谷は林立する木々の奥へと目を向けて、逃げ込む先に当たりをつけた。そして顔を上げ、昆虫の動きに目を向けた。虫はなかなか思ったように動いてくれなくてじれったいが、短気は損気で、ここはぐっとこらえるところだ。
　そうやって待ち続けて、ようやくそのときはやってきた。昆虫は反時計回りにぐるっと旋回すると、二人の方へと向かって飛んできた。神谷はその軌道を確認して、隣へと目を向けた。アンナの注意は昆虫に向けられたままだ。そして、それが二人の真上へやってきたとき、彼女の視線は彼から完全に外れた。よし、と神谷は心の中でかけ声を掛けると、ジャンプするようにして草むらから飛び出して、猛然と駆けだした。
「待ちなさい！」
　アンナは驚いて思わず立ち上がり、裏声混じりに声を張り上げた。しかし、むろん彼が待つはずはない。神谷はみるみるうちに木立に溶け込んでいく。アンナは素早く銃を引き抜くと狙いを定めて引き金を引いた。銃声が轟き、銃弾は森を突っ切って木々の合間を抜けていく。それは神谷の体を貫いたように見えたが、確かめる間もなく彼の姿は森の奥へと消えた。

　ふと、羽ばたきの音が聞こえて、アンナははっと我に返った。音の方に目を向けると、昆虫はすぐ目の前で、虫はその大きな巨体を揺すって体当たりしてきた。アンナは避ける間もなく直撃を受け、突き飛ばされて、後方の木の幹にしたたかに体を打ちつけた。息ができなくなり、一瞬で気を失って、彼女は膝から崩れ落ちた。

　どのくらい意識を失っていたのか、目を覚ましたときには、昆虫は既に姿を消していた。諦めたのか、或いは安全と判断したのか、いずれにしても、愛子待つ我が家へと戻っていったらしい。アンナは二度、三度ほど目をぱちくりとさせてから、ゆっくりと体を起こした。背中の辺りに激痛が走って、苦悶に顔を歪める。やがて、その痛みが引き潮のように引いていくと、彼女は一つ深呼吸をして空を見上げた。

　太陽は真上より少しだけ西に傾いた辺りにあって、木の葉が日の光を受けてきらきらと輝いていた。森に入ったときはまだ午前中だったから、数時間は気を失っていたことになる。アンナは舌打ちをしたい気持ちを押さえて立ち上がり、神谷が消えた茂みの方へと向かった。もちろん、そこに彼の姿はない。ただ、真っ赤な血が葉っぱをじっとりと濡らしていて、とある方へと点々と続いていた。血の量からすると、致命傷とは言わないまでも、相当の深手を負ってはいるようだ。きっと、そんなに遠くまでは行ってはいないだろう。彼女はバッグから携帯端末を取り出して、スイッチを入れた。画面上を黄色い点が踊る。彼女はその点滅が示す方を見やると、歩き始めた。

　神谷はふらりと大きく揺れたのち、肩からぶつかるようにして木の幹に寄りかかった。苦しげに、喘ぐように呼吸を繰り返して、ほんの少しだけ楽になると、ゆっくりと体を半回転させて幹に背中を預け、来た道の方を振り返った。追っ手の姿はなく、森は静けさに包まれている。彼は顔を正面に戻して、安堵のため息を一つ吐き出すと、傷口を押さえた手を見つめた。鮮血の海に幾筋もの手筋が広がって、まるで、空からのデルタ地帯の眺めを見ているようだ。神谷はポケットからハンカチを取り出して、傷口を強く押さえた。一刻も早く手当てをしなければ、いずれは出血多量で命を失うことになるだろう。銃創はそれくらいには深手だった。ただ、幸いにも基地はもうすぐ近くで、そこまで辿り着ければなんとかなるかもしれない。彼は木の幹を背で押しやるようにして離れると、傷口を押さえながら歩き始めた。

　五分ほども歩いたところで、神谷はなにかの気配を感じて立ち止まった。まさか件の獣が腹を満たすために跡をつけてきたのだろうか……。彼は戦慄を覚えつつ、素早く振り向いた。しかし、草木が風にゆらゆらと揺れるばかりで、その気配の持ち主の姿は見当たらない。だが、それでもなお、気配は彼を握りしめるように取り巻いて、とりもちみたいに引っ付いて離れようとしない。神谷は不快感に眉間の皺を厚くして、威嚇するように緑の茂みを睨んだ。

　それからほどなくして、カサカサと草の擦れ合う音が聞こえて、神谷はその音の方を振り向いた。そこには一匹の猿がいた。猿は木彫りの置物みたいにぽつんと鎮座して、探るような目で神谷を見つめている。そうやって、値踏みの視線でひとしきり眺めたのち、猿は口をすぼめて、甲高く鳴き声を上げた。すると、草むらがわさわさと鳴って、あちこちから、ぞろぞろと猿が現れた。彼らはのそりと歩いてきて、神谷から四、五メートルほど離れた場所に腰を下ろした。いったいなんのために集まってきたのかと、神谷は猿たちを眺めた。そして、その中の一匹で目をとめた。

　その猿は毛むくじゃらのなにかを手にぶら下げていて、時折、口で引きちぎってはもぐもぐと租借をしていた。神谷は目を凝らしてその猿が手にしたものを見つめた。そして、それがなにかの生き物の腕であることに気がついた。被毛の奥に見えるピンクのそれは、生々しくぬめりを帯びて光っている。月では実験のために猿を飼育している。人間に近い生き物だからだ。しかし、肉を食うとは聞いたことがない。神谷は寒気を覚えて身震いし、その場に立ちすくんだ。

　そうして呆気にとられていると、止血のために傷口にあてがっていたハンカチを、どこからか音もなく忍び寄った一匹の猿に奪われてしまった。不意のことにびっくりして振り向くと、数匹の猿たちが、取っ組み合うようにしてハンカチの奪い合いをしていた。こういうとき、強いものが勝つのは自然の摂理だ。一匹また一匹と脱落していき、やがて、最も体躯の優れた猿が勝利し、血のたっぷりと染みこんだハンカチの独り占めに成功した。勝者の嬉々とした声が森に響き渡り、敗者は悔しげに、遠慮がちに小さく吠えた。勝者となった猿はひとしきり勝ちどきを上げ終えると、堂々とした様子でどかりと草の上に腰を下ろし、ちゅぱちゅぱと舌を鳴らして血を吸い始めた。肉を喰らい、血をすするその様子から、もはや疑う余地はなかった。彼らは、目の前にいる、いずれは死の世界へと向かうであろう男が、やがて力尽きて果てるのを待っているのだ

。神谷は身の毛もよだつような思いがして、目をかっと見開いて猿たちを見つめた。
　一匹や二匹くらいなら、蹴散らしてやることも可能かもしれない。しかし、彼らの数は多く、その体はずっと小さいが、動きはすばしっこく、犬歯は大きくて鋭い。一方で、神谷は大怪我を負っていて、満足に動き回ることさえできない。そんな状況では、一匹ですら倒すのは難しいだろう。ただ、幸いにも、基地まではもう少しだ。そこに逃げ込んでしまえば、彼らも手出しはできないはずだ。神谷は意を決すると、基地の方へと歩き出した。その先には猿が群れをなしているが、基本的には人間を畏れているはずだから、そこのけそこのけと進んでいけば、脇に退けて道を譲るはずだ。彼はそう考えていた。しかし、それは甘い考えだった。神谷が近づこうとすると、猿たちは腰を上げて威嚇の声を発しつつ、攻撃の姿勢を見せた。まるで、この先にあるものを知っていて、彼が考えていることを見透かして、そこへ行かせてなるものかと、行く手を阻もうとしているかのようだ。神谷は驚いて立ち止まり、しばし逡巡したのち、ゆるりと後退した。すると、猿はよしよしとばかりに、腰を下ろして静かになった。
　行くも戻るも猿たちがその行く手を遮っていて、にっちもさっちも行きそうにない。このままでは、本当に朽ち果てて、この獣の餌となってしまうだろう。神谷は悔しげに唇をぐっとかみ締めて、ぐるりと辺りを見回した。そして、その一角に、ぽっかりと空間が空いているのを見つけた。猿たちは隣の者とじゃれ合って遊んだり、毛繕いなどをしてスキンシップに勤しんでいて、その抜け道に気付いた様子はない。そんな猿たちの姿を見ていると、それが、実は彼らの仕掛けた罠で、敢えてそっちへ進めと誘っているようにも思える。神谷は一つため息を吐き出して、傷口を押さえた手を見つめた。指の間から鮮血が流れ出て、指先をじっとりと濡らしている。躊躇している時間はなさそうだ。彼は猿たちを睨むように一瞥してから、警戒を向けつつゆるゆるとそこへと向かった。猿たちはじっと神谷の動きを見つめ、彼が逃げ道から森の奥へと進むと、すっくと腰を上げて、跡を追いかけ始めた。

　神谷が立ち止まると猿たちは足をとめ、歩き始めると再び動き出すいった具合で、ストーカーのように付かず離れず、ひたひたと陰みたいに跡をついてきた。その様子はなんとも不気味で、背筋をぞわぞわと寒気が走って、広がる焦燥感と傷口の痛みが相まって、神谷の額にはぷつぷつと冷や汗が浮かんだ。そうやって逃げて、追われて、神谷はとうとう森の境界へとやってきた。その境目の向こうには、毛の生え替わる時の犬の背中のような、まだら模様の草原が広がって、その先に、青白い氷の壁がそそり立っていた。氷壁は日に照らされてテカテカと光っており、水がひたひたと滴り落ちて幾筋もの小川が生まれて、小川はやがて寄り添うように集まって、あちこちに小さな水たまりを作っていた。神谷は立ち止まって振り向いた。草葉の陰から、或いは樹上から、一瞬たりとも目を離すものかと猿たちが見つめている。ただ、その眼光には焦りの色がはっきりと浮かんでいた。いつか倒れると思ってあとを追っては来たが、餌はしぶとく生きていて、眼前には、彼らの領域外の世界が広がっている。このままではご馳走を失ってしまう。きっと、そう考えているのだろう。その苛立ちを現すように、木上の猿が枝をゆさゆさと揺らしながら甲高い声を上げげた。仲間がそれに呼応して、次々と声を上げる。もはや我慢の限界だった。

はらはらと舞い落ちる木の葉の中を、神谷はじりじりと後退した。すると、行かせてなるものかと、数匹の猿が突進してきた。慌てた神谷はくるりと向き直り、一目散に走り出すが、それを阻止しようと、猿が木の上から彼の背中にダイブした。神谷は猿を引き剥がそうとして背中に手を伸ばすものの、猿はがっしりと掴まっていて引きはがすことはままならない。更には、別の猿が彼の足にしがみつき、引き倒そうとして引っ張るので、足がもつれて前のめりにすっころんでしまった。猿たちはきぃきぃと歓喜の声を上げ、神谷を取り囲んだ。

そこに一匹の猿が駆けてきて、ひときわ甲高い声を上げたかと思うと、慌てたように木をよじ登って、見ろと言わんばかりに、森の奥の方を見つめた。何事かと、猿たちは怪訝な様子でその視線の先へと目を向けた。そうして、じいっと木立を見つめて、やがて、緊張感と警戒感に落ち着かなそうに体をもぞもぞとさせた。すると、猿たちの中に一瞬の隙が生まれた。神谷はさっと立ち上がり、森の外へと向けて走り出した。猿たちははっとして腰を上げかけたが、こちらに向かってくる気配が気になって仕方がないらしく、金縛りにでもかかったかのように固まっていた。おかげで彼は無事に森を抜けることができ、充分に離れたところへ来ると立ち止まって振り向いた。猿たちは時折、神谷の方へと送りながらも、森の奥へと警戒を向け続けていて、跡を追いかけてくる様子はない。一体、なにがやってこようとしているのかはわからないが、ともかく、命拾いしたことは確かだ。神谷は安堵に胸を撫で下ろした。そうすると、銃創の疼きがぶり返してきて、彼は痛みに顔をしかめた。

怪我を治療するためには、一刻も早く基地に戻るべきではあったが、森に戻ればまた猿たちが追いかけてくるだろうし、彼等が恐れるなにかに鉢合わせになるかもしれない。そのような状況では、基地に向かうのは危険だろう。神谷は振り向いて、氷の平原を眺めた。かつては地上を支配し、威容を誇っていた氷の壁も、今は勢力を失って、どんどんと規模を縮小している。神谷はため息をついて歩きだした。この氷の壁の先になにがあるのかはわからない。しかし、行くしかなかった。

アンナは木の幹に片手をついて、樹皮を濡らす赤い液体を見つめた。血液は鮮度を失い、黒く変色して固まりかけている。この場を去ってからだいぶ時間がたっているようだ。彼女は周辺を見回した。下生えが踏みつぶされて、争ったような形跡が見られる。彼は熊よけを持っていないから、血の匂いを嗅ぎつけた猛獣にでも襲われたのかもしれない。が、肉片がその辺りに散乱してはいないから、別の何かが彼の身に起きたのだろう。彼女はその考えに安堵して、そんな自分に驚きつつ、更に辺りを見渡した。そして一角に、草の葉を点々と湿らせた血の跡を見つけた。その赤いシミは、北へと向かって伸びている。アンナは装置を取り出して、発信器が示す点の位置を確かめると、追跡を再開した。

黄色い点は森を抜け、氷壁を越えて暫く進んだところで停止していた。氷の世界は人間が生きるには厳しい世界だ。よほどの理由がない限り、そこに足を踏み入れるなどということはまずない。アンナは森の境界線上で立ち止まり、彼がそこへ向かった理由を考えた。そして、微かな鳴き声と、何かが動き回る気配に気付いて振り向いた。猿たちが、木の上から、或いは草葉の陰

から、悔しげに、そして怒りの眼差しで人間の女を見つめていた。彼女は、神谷が北へと向かったわけに思い至り、彼が無事にこの場をやり過ごし、逃げおおせたことに図らずも、にやりと微笑を浮かべた。アンナは端末を見やり、点の位置を確かめると、猿たちに一瞥を残して歩き始めた。

　目を開けると、真っ白な天井が見えた。蛍光灯が柔らかな光を放って、室内を優しく照らしている。神谷は頭を上げて、ぐるりと首を回した。右手には心電図モニターと呼吸器があり、左手には無人のベッドがあって、その奥で、白衣を着た女性が椅子に腰掛けて何か書き物をしていた。神谷はマスクを外し、起き上がろうとして体を起こした。しかし、衰えた体力はそれを許さず、彼はドサリとベッドに倒れた。
　それに気付いた女性が振り向いた。「あら、気がついたのね」彼女はくるりと椅子を回転させて向き直ると、すっと立ち上がりそばまで歩いてきて「痛いところはない？」と心配顔で聞いた。
「き……」声がかすれていたために神谷は言いかけてやめ、軽く咳払いをして言い直した。「君は？」
「私はセドナ。ここで医師をしているわ」
　女性はジーパン姿に白衣を着て、黒髪の頭はチリチリとして短く、その髪と同じように肌色も黒くて、そこに小さな目と鼻とピンクのかわいい唇がちょんと乗っかっていた。
「君が、俺を助けてくれたのか？」
「いいえ」セドナは頭を振る。「私の仲間が、倒れているあなたを見つけたの」
　神谷は視線を彷徨わせて記憶をまさぐった。無限とも思える氷の大地を、方向も定まらぬままに歩き続け、やがて寒さと失われる血液に体力を奪われ、そこで力尽き倒れて、喪失しつつある意識の中で彼は死を覚悟した。覚えているのはそこまでだ。
　セドナは続けて言った。
「もう少し遅れていたら危険だったわ」
　そうだろう、と神谷は頷き「死んだと思ったよ」とため息交じりに言った。
「だいぶ出血していたし、あの寒さの中ではね……。急所を外れていたのが不幸中の幸いね」
　神谷は包帯の上から銃創の辺りをさすった。しっかりと治療が施されているらしく、痛みはない。彼は手厚い手当てをしてくれたことをありがたく思った。
「ありがとう。感謝するよ」
「私は医者だもの、当たり前のことをしたまでよ」
　セドナはそう答えてクスリと笑った。
　神谷は笑みを返し、辺りを見回して尋ねる。
「ここは？」
「北部と呼ばれる場所にある、街の一つよ」セドナは答えて白衣のポケットに手を突っ込んだ。そして興味と関心の入り交じった目を向けて「あんな軽装で、良く来る気になったわね」
「特別な事情があってね」神谷は察してくれと言うように見つめ返して答えた。
「そう。聞かない方が良さそうね」
「そうしてくれるとありがたい」
　セドナは了解とばかりにクスッと笑った。

　神谷は話題を変える。
「通信装置を借りたい」
「出歩くのはまだ無理よ」
「のんびりしている時間はないんだ」
「医師としては縛り付けてでも大人しくさせておきたいところだけど……」
　セドナはなんとか言い聞かせたいと思ったが、彼の表情が決意の固さを物語っていて、故に、結局諦めた。
「わかったわ。話は通しておくわ。だからせめて、今日一日くらいは大人しくしていてちょうだい。いいわね？」
「わかった」
　目的が達せられるならば異存はない。神谷は素直に頷いた。
　実際のところは三日ほど待たされたが、それは仕方のないことだ。ここの人間たちにとって彼は余所者だし、彼らの都合もあるだろうから、そう簡単にはいかないだろう。それでも、本当に約束を取り付けてくれたことはありがたい。神谷はドアをノックした。
「どうぞ」
　彼は中へと進んだ。室内はいたって質素で、本棚と机とソファがそれぞれ一つずつあるだけだ。男性は椅子に座ってなにかの書類に目を通していたが、神谷が現れると視線を上げて彼をじっと見つめた。
　神谷は机の前まで進んだ。
「あなたがビクトルさん？」
「ええ」
　ビクトルは柔和な笑みと共に答えた。
　年は五十代の後半くらいだが、深く顔に刻まれた幾筋ものしわのせいで、実際の年齢より老けて見える。おそらくは相当の苦労をしてきたに違いない。ビクトルは続けた。
「神谷さんですね。話は聞いています。もう、体の方は良いのですか？」
「おかげさまで。セドナさんのおかげです」
「それはなによりです」ビクトルは微笑んだ。「通信機がご入り用とか？」
「ええ、月に戻りたいと思いまして。あちらに連絡をしたいのです」
「そんなに戻りたいですか？」ビクトルは意外そうな表情を浮かべた。「ここもいいところですよ」
　神谷は微笑んだ。
「ええ、確かに……。でも、月には妹がいるんです。いつまでも一人にさせておく訳にはいきません」
「そうですか、そういうことなら仕方がありませんね。わかりました。そこの通信機を使ってください」
　ビクトルは首を右に傾け、その視線によって、それを指し示した。
　しかし、そこにあるのは本棚で、通信装置らしきものは見当たらない。怪訝な顔の神谷を見て

、ビクトルは微笑みながら立ち上がり、本棚の方へと歩いて行った。そしてある本の頭を指で引っかけて手前に傾けると、ガチャリと音がして、本棚がスライドして、その奥から通信機が現れた。ビクトルは装置を操作して、周波数を合わせた。

「さあ、どうぞ。これで話せますよ」

　神谷は驚きの中に苦笑を交えつつ、通信機の前まで進み、マイクを取って話し始めた。長い間、言葉の交換は続き、やがて結論が出ると、神谷はマイクを置いた。

「いかがでしたか？」

　ビクトルが聞いた。

「シャトルを派遣するには、しばらく時間がかかるそうです。今はその余裕がないとのことで……」

　神谷は落胆の色を見せた。

「そうですか。でも、いずれは派遣してくれるんでしょう？」

「ええ、それは、そうです」

「でしたら、せっかくですから、それまでは、どうぞここでゆっくりしていって下さい。歓迎しますよ」

　ビクトルはにこやかに、本当にそう思っているという顔で言った。

　果報は寝て待て、とは、東の端にあるとある国のことわざらしいが、なるほど、確かに彼の言うとおりだろう。今は待つより他はない。

「そうですね」神谷は頷いて、続いて軽く会釈して言った。「宜しくお願いします」

「お疲れ様」

　ベンチに腰掛けて、休憩を取っているアンナに、セドナはコーヒーを差し出して言った。

「ありがとうございます」

　アンナはカップを受け取った。

「隣、いい？」

「はい」

　アンナは少しだけ脇に退けてスペースを作る。

「ありがとう」とセドナは腰を下ろして「ゆっくりしてていいのよ」

「お世話になっておきながらなにもしないなんて、そういう訳にはいきませんから……。せめてものお礼です」

　神谷を追って北へ向かった彼女は、寒さに気を失いそうになっているところを、この街の住人に救われた。もし、あのまま倒れていたら、今頃は間違いないく夜空の星の一つとなっていただろう。今こうして無事でいられるのも、彼等のおかげだ。だからその感謝の印として、彼女はちょっとした仕事を手伝うことにしたのだ。

「気にしなくていいのよ。そんなこと」

「いいえ、それでは私の気が済みません」

セドナは微笑んでコーヒーをひとくち飲んだ。どうしても、と言われれば、無下に断る訳にもいかない。彼女はアンナの横顔を暫く眺めてから、ほどなくして、ふっと息をついて、腫れ物にでも触るように言った。
「彼、気がついたわよ」
「そうですか」
無関心な様子で、無感情にアンナは答えた。
セドナは、聞かない方が良かったのね、というような表情を見せたあと「ところで、街にはもう慣れた？」と話題を変えた。
アンナはコーヒーを飲んでほっと息をついたのち答える。
「ええ、いいところですね。氷の下に造られてるなんて、とても思えません」
セドナは天井を見上げて「ずっと昔に造られた地下街を利用しているの。ここまで来るのは相当、大変だったらしいわ」
氷の世界で、その氷床の上に居を築くのは現実的ではない。身を切り裂くような寒さの中で、生きていくのは簡単ではないし、荒れ狂う吹雪の中では建物などあっという間に氷雪に埋もれてしまう。だから必然的に、その下へと目が向けられた。そこなら氷の上よりは暖かく、地面の下には人類が残した地下世界が広がっていて、それを利用することができたからだ。とはいえ、分厚い氷の壁の下にあるわけだから、そうそう容易にはいかない。そこに辿り着くまでには、多くの困難と犠牲があった。しかし、これまでも、人間はそういった艱難辛苦を何度も乗り越えてきた。このときも、彼等は開拓史に名を刻んだ人々と同じように、苦難の末にそれを克服し、こうして街を築いたのだ。
「大変な覚悟が必要だったでしょうね」アンナはその苦労を思いやって、感慨深げに頷いた。
セドナは遠くを見るような目で「一部が月へと旅立ったあとも、人々は争いをやめなかった。戦争は収まるどころか、むしろ酷くなったくらいね。それで、戦争を嫌った人たちは、それから逃れるために、敢えてこの地を選んだの。苦労することはわかっていたけれど、戦争の中に身を置くよりは、ずっとましだと思ったのね」
アンナは目を丸くして「それは、本当のことですか？」
「本当よ」セドナはちらりと目を向けて「なんて聞かされてるの？」
「仲間を見捨てて逃げた裏切り者だと……」
「逃げたのとは少し違うわね。彼らはただ、平和に、幸せに暮らしたかっただけよ。それを裏切りだなんて、酷い言いようね」
「でも、苦しいときに自分たちだけ安全なところに避難するなんて、裏切りと呼ばれてもおかしくはないと思います」
「あなたたちはそう考えてる？」
「ええ」
「だから北部人なんて、差別的な呼び方をするの？」
アンナは僅かにむっとした様子で「そちらだって、私たちのことを南部人、と呼んでいるじゃないですか」

「あなたたちがそう呼んでるから、便宜上、私たちもそう呼んでるだけよ。本来、私たちにはそんな風に区別する考えはないわ」
「でも、実際に、違いはあります」
「どんな違い？」
「それは……」アンナは言葉に詰まる。
「南部と北部と言うように、一度区別をつけてしまうと、それはそこに住む人たちにも向けられる。北部人、南部人と言った具合にね。でも違いなんて、言葉の上でのものでしかないのよ」
「でも、月人は違います」
「彼らだって元々は私たちと同じ地球人よ。違いなんで、地球と月とに分かれて生活している、という程度のものでしかないわ」
「でも、彼らは……彼らは地球を攻撃したんです」アンナは僅かに声を震わせた。
「だから彼等を蔑んで、そして憎み続けるというわけ？」
　アンナは興奮気味に、そして口調を荒々しくして「あなたたちは、彼らと戦争をしていないからわからないんです」
「それはそうもしれないわね。でも、私たちには、彼らと争う理由なんてないの。だから私たちは、彼らに対して特別な感情はないわ。あなたたち南の人たちに対してもよ。だってそうでしょ？　みんな、同じ人間なんだもの」
　セドナはコーヒーを飲み干すと「さて、仕事に戻らなきゃ」と立ち上がり、近くのゴミ箱にカップを捨てて去って行った。
　アンナはセドナの背中を見送って、姿が見えなくなるとカップに視線を落とした。黒い液体は、森の奥深くにある湖の如く静かに漂っていた。それは冷え切っていて、口に含むととても苦かった。

「こちらにいらっしゃいましたか」
　神谷はその声に振り向いて微笑んだ。
「ああ、ビクトルさん。こんにちは」
　ビクトルは神谷の手元を見遣り「ナポリタンですか。おいしそうですね。私もいただこうかな」と椅子を引き出して向かいの席に腰を下ろした。すぐにウェイトレスがやってきて、彼は同じものを注文した。
「ビクトルさんも、こういうところで食事をするんですか？」
「ええ、もちろんですよ。もっとも、私のお気に入りは別の店ですが」
「それはすみませんでした」
　神谷は申し訳なさそうな顔をした。
「いえいえ。私も一度ここで食べてみたいと思っていたんですよ」
「では今度、ビクトルさんのお気に入りの店で、ご一緒させてください」
「ええ、是非……と、言いたいところなんですが……」

　ビクトルは困った顔をした。
「なにかあったんですか？」
　神谷は不安を覗かせる。
「実は……」
　ビクトルは勿体ぶるようにたっぷりとタメを作ってから続けた。
「月から連絡がありまして、五日後に、迎えのシャトルを送るそうです」
　神谷は一気に気が抜けて、思わずフォークを落っことしそうになった。
「意地悪ですね」
　ビクトルは神谷の様子を眺めつつ、にやにやと笑った。
「ではついでにもう一つ、意地悪な質問をしましょうかね」
　神谷は眉根を上げた。ビクトルは続ける。
「彼女のことはどうするんです？」
「彼女？」
「アンナさん、と言いましたか。お知り合いなんですよね。あなたを追いかけてここまで来たとか……。なんでも、月に行きたがっているそうですね」
「らしいですね。でも、連れて行くつもりはありませんよ」
「それで彼女と揉めましたか」
「ええ、まあ……」
「で、その脇腹の傷がその結果ですか」
「ええ」神谷は、今では完治した傷口の辺りを手で押さえ「おかげで、あと少しで死ぬところでした」と苦笑を浮かべた。
「しかし、それだけであなたを銃で撃つとは……根底には、なにか根深いものがあるのでしょうかね」
「あるでしょうね」
「なるほど」ジョセフは暫し黙考し「それほど、アンナさんはあなたたちを憎んでいるわけですか」
「彼女だけではありません。地球人すべてがそうでしょう。……ああ、北部人は別ですよ」
「確かに、私たちは月の人々に対して、特別な感情は持っていません。が、しかし、すべてというのは、少し大げさではありませんか？」
「少なくとも、我々はそう理解してます」
「そうですか」ジョセフはそう言って目を伏せた。そして悲しみをその声色に滲ませて続けた。
「月の人々も、地球の人々を憎んでいるのでしょうね」
「家族や恋人、友人を亡くした者も大勢いますからね。少なからず、そうでしょう」
「あなたはどうなんです？」
「私？」
　神谷は怪訝そうにジョセフを見つめ返した。
　彼は軍人だから、軍の見解こそが、軍属としての彼の意見でもある。それを、あなたはどう思

うのか、と問われて戸惑わないはずがない。
　そんな神谷の気持ちを慮ってか、ビクトルは言った。
「月では立場的にいろいろとあるでしょうが、ここではそういうものは忘れても、良いのではないでしょうか」
　にこにこと微笑むビクトルの表情を見ていると、重たい口も、羽が生えたように軽く感じてくる。
「確かに、地球人が憎くないわけではありません。仲間がたくさん殺されているわけですからね。でも一方で、うまく共存できたらと、思わなくもありません」
「なんだか微妙な言い方ですね」
「それが可能だとは、思っていませんので」
「しかし、このまま戦争が続けば、被害は拡大するばかりでしょう」
「我々も、戦争を終わらせたいとは思っています」
　ビクトルは僅かに思案して、言った。「それであなたが地球に？」
　なかなかの鋭さに、神谷の眉がぴくりと反応した。これ以上、話していると面倒なことになりそうだ。彼は締めに入った。
「ともかく、難しいでしょう」
「難しいですか？」
　ビクトルは小首を傾げた。純真無垢な子供のように。
　神谷はため息を漏らす。
「ええ……。地球は頑なに、それを拒んでいますから」
「でも私は、うまくいくことに期待したいですね」
「だといいんですけどね。あまり期待はできませんよ」
　神谷は諦め気味にそう言って、通路を歩く人々を見つめた。曇天のような神谷の顔とは裏腹に、道行く人々の様子はみな幸せそうで、明るく、晴れ渡った表情を浮かべていた。

　これと言ってとくにすることがないような時は、氷に覆われる前の地球なら、外に買い物に出かけるとか、映画でも見に行くなどして暇を潰すところだろうが、ここでは、外は見渡す限りの氷の世界なので、どこにも行くところはないし、街で暇を潰そうにも、そもそも娯楽というものがほとんどない。電力の使用が限られているから、電気をたくさん使うような遊びは難しいのだ。そして、お世話になっている身で、ふらふらとしているのも申し訳ないので、なにか力になれることはないかと申し出ても、ビクトルには、なにもしなくて良いと言われてしまった。暇がないのも嫌だが、かといって、暇すぎるのも楽ではない。そういうわけで、彼は気分転換も兼ねて、街並みや人々の様子を眺めながら、ふらり通路を歩いていた。
　そうして通路の交差する、ちょっとした広場のようなところで、思いもかけない人物に再会した。
「こんなところで会うとはね」
　当然、互いにその存在を知ってはいたものの、あんな事があったわけで、会わない方が良いと思っていたので、必然的に避けるようになっていた。
「そうね」
　どことなく怒ったような様子でアンナは答えた。彼女は広場の中ほどにある大きな円柱に寄りかかり、足を交差させて立っていた。
「なかなかしつこいね」
「みすみす逃がすわけにはいかないわ」
「諦めてないわけだ」
「それが私の任務だもの」
「どうやってここから月へ行くつもりだ？」
「あなたこそ、どうやって月に帰るつもり？」アンナは腕組みをした。「方法は考えてあるんでしょ？」
　神谷は肩をすくめた。
「いや、なにも考えていないね」
「それは嘘ね」
　アンナは鋭い眼差しを向けた。
　神谷はその視線から逃れるように周囲へと目を向けた。行き交う人の視線が、遠慮がちにではあるが、興味深げに向けられている。神谷はそんな彼らをおもしろそうに見やって、心にもないことを言った。
「ここに住むのも悪くないと思ってる」
「あなたが？　ここに？」アンナは目を丸くした。「ここの人たちが、あなたが住むのを許すはずないわ」
「どうして？」
「だって、あなたたちは敵なのよ」

「それは、君たちにとっては、ということだろう？　彼らには関係ないさ」
　アンナはセドナの言葉を思い出した。この北人たちの中に、月人に対する敵愾心がないのなら、神谷がこの場所に居つくのを拒否する理由はない。そのことがより一層、彼女にはおもしろくなかった。アンナはむすっとした。
　神谷は言った。
「そんなに俺たちが憎いのか？」
　アンナはきっと睨み付ける。
「当たり前よ。この戦争で、いったい何人が犠牲になったと思ってるの？」
「それは俺たちも同じだ。君たちだけが被害を受けてるわけじゃない」
「自業自得よ」
「なにがだ？」
　神谷は眉間に深々としわを寄せて目を怒らせた。
　今度はアンナの目が吊り上る。
「先に仕掛けてきたのはあなたたちの方じゃない！」
「それは違うね。俺たちは平和的に事を進めようとしていた。なのに君たちは、対話を拒否し、一方的に戦端を開いたんだ」
「そんなの、嘘よ！」アンナは声を荒げた。
「嘘じゃない。上官に聞いてみるんだね」
　地球では、この戦争は月の先制攻撃によって始まった、というのが定説であり、地球の人々は、厳密に言えば南人たちは、皆、それを信じて疑わない。それを、戦争を始めたのは地球の方だ、などとは、あまりにも荒唐無稽であり、言いがかりも甚だしい。地球の人々がそれを聞いたなら、きっと笑い転げて卒倒するに違いない。
「馬鹿なこと言わないで。そんなことあるはずないわ。……あなた、どうかしてしまったの？」
　アンナは本当に心配そうな顔をした。
　神谷は鼻を鳴らして「なんとでも言うがいいさ。だけど、真実は一つだ」彼は腕時計を確かめた。「それじゃ、俺はこれで失礼するよ」
　神谷が去っていくと、人々の関心はショッピングへと戻った。アンナはその様子を舐めるように見つめてから、苛立ちをぶつけるように、踵で床をゴツンと踏みつけた。

　翌日、神谷はビクトルの呼び出しを受けて、とある場所へとやってきていた。そこは街の居住区画の一つで、こぢんまりとした家が肩寄せ合うように並んだ、下町のような場所だった。静かで、どことなく、牧歌的な雰囲気が漂っている。
　ビクトルがその家々を眺めながら言った。
「ここはちょっと特別でして、是非、お二人に見ていただきたいんですよ」
「二人？」神谷は眉を寄せた。
「ええ……。ああ、来たようですね」

ビクトルは通路の方に目を向けた。
その視線を追うと、遠くに、こちらへと向かって歩いてくるアンナの姿が見えた。彼女は神谷を認めると、すぐさま表情を硬くした。
ビクトルが、足取り重そうに歩くアンナを眺めながら言った。
「やりあったそうですね」
神谷はビクトルをちらりと見遣り「情報が早いですね」
「狭い街ですからね」ビクトルは微笑を浮かべる。
神谷は静かに息を吐き出して「少し、意見の食い違いがあっただけです」
「街の者たちが不安がっています」
「それは申し訳ありませんでした」神谷は頭を下げた。「ですが、我々は……」
「わかっています」ビクトルは遮って、アンナに笑顔を向けた。「良く来てくださいました。さあ、そちらにどうぞ」
ビクトルは神谷の隣に並ぶよう勧めたが、アンナはそちらへは行かず、ビクトルを挟んだ反対側に並んだ。
神谷はビクトル越しにアンナを覗き見た。見られていることに気付いてはいるはずだが、そんな素振りなど一切見せず、彼女はじっと前を見据えている。ビクトルと目が合って、神谷は肩をすくめてはにかんだように笑うと、家並みへと視線を向けた。
しばらく眺めていると、ある一軒の家から、父親と母親が二人の子供を連れて出てきて、玄関先で縄跳びをして遊び始めた。子供たちはきゃっきゃと歓声を上げ、父と母は優しく応援の声をかけている。一家はとても楽しそうで、そして幸せいっぱいの笑みを浮かべていた。戦争の渦中にある月と地球では、なかなか見ることのできない、貴重な光景だ。
「あの家族ですが、どう思いますか？」
ビクトルが尋ねた。
「どうって……」戸惑いつつ神谷が答える。「幸せそうな普通の家族に見えますが……」
「あなたはどうです？」
ビクトルはアンナに意見を求めた。
「ええ、幸せそうですね」
彼女は一家に視線を向けたまま答えた。その横顔には、自分の子供時代を懐かしむような表情が浮かんでいた。
「では、なにか違いは見えますか？」
「違い……ですか？」アンナは戸惑いの眼差しでビクトルをみつめ「いいえ」と頭を振った。
神谷も首を横に振る。
「そうでしょう？　違いなんて見えないでしょう？　でもね、違うんですよ。お二人の考える論理によれば……」
神谷はゆっくりと首を回して問いかけの眼差しを向けた。
ビクトルは頷いて「あの家族ですが、父親は地球人ですが、母親は月人です。大きい子の方は父親の連れ子ですが、小さい子の方は、二人の間にできたお子さんです。つまり、地球と月のハ

ーフということになりますね」
　アンナは目にも留まらぬほどの素早さで振り向いて、まん丸とした瞳でビクトルを見つめた。その視線が神谷の視線とぶつかって、彼女はすぐに目を逸らした。ビクトルは続けた。
「でも、違いなんてわからないでしょう？　私が言わなければ、あなたたちはそれを意識すらしなかったはずです」
　確かに、言われなければ違いなど気付かない。猿と人間ほどの違いがあるならば話は別だが、人間の違いなどというのは、思想や言葉や肌の色が異なるという程度の、至極些細なことに過ぎないのだ。
「それは、確かにそうかもしれません」神谷は続けて尋ねる。「彼らはお互いに、そのことを知っているんですか？」
「ええ、もちろん知っていますよ。でも、彼らはそのことを、なんら問題とは思っていないようですね」
「どうしてです？」
「心持ち次第、だからですよ。それによって、どうにでも変わるでしょう」
　ビクトルは自信たっぷりといった表情を浮かべた。自分の言葉が、嘘偽りのないものであると、そう言っているのだ。
　アンナが尋ねる。
「彼らは実際、どんな風に変わっていったんですか？」
　ビクトルは微笑んで答える。
「彼はまず、自分を理解してもらおうと、彼女に自分のことを話しました。そして彼女のことを理解しようと、彼女の話にじっくりと耳を傾けました。彼女と円滑な関係を築くためには、それが必要不可欠だと、考えたのですね。で、中には難しい部分もあったようですが、それでも、彼らは互いを理解することに努め、そして互いを受け入れました。その努力が実って、いま二人は夫婦となって、子供を儲けるまでになりました。これは、なにも彼らだけの話ではありません。この街、この北の大地で生きる者たち全てにおいて、そうなのです」
「……信じられない」アンナは青ざめた様子で呟く。
　ビクトルは続けた。
「私たちはそもそも、月に対して敵意など持っていませんからね。それに、私たちは、戦争から逃れるために北へとやってきたのです。だから月の人々と争うことを望んではいません。ですから、互いを理解しあい、受け入れることで、平和的に共存する道を選んだのです」
「そんなこと、できるとは思えません」
「そうですか？　実際にこうして、共存できているではないですか」
「私たちには、無理です」
　アンナは”無理です”の部分を強調した。
「そうでしょうか。私にはそうは思えませんね。あなた方にもできると思いますよ」
「無理です」
　彼女は再び否定した。

「消せませんか、憎しみを」
「ええ」
「あなたはどうです？」
　神谷に尋ねた。
「難しいでしょうね」
　彼は苦しそうな顔で頭を振った。
「そうですか……。しかし、そうした憎しみは、やがて、必ず、あなたがたの家族や、大切な人に向けられることになるでしょう。そうなれば、彼らは深く傷つくにちがいありません。どうです？　嫌じゃありませんか？　彼らを守りたいですよね？」神谷とアンナの表情がきゅっと引き締まる。ビクトルは二人の顔を交互に見て、言い聞かせるように続ける。「それを防ぐ方法は、たった一つです。わかりますね？」
　神谷とアンナは見つめあった。今度は、彼女も視線を逸らすことはしなかった。ビクトルは最後に言った。
「もっともっと話し合って、互いを理解しあいさえすれば、きっと、共存は可能だと思いますよ」
　子供たちのはしゃぐ声が聞こえて、神谷とアンナはそちらへと視線を転じた。兄弟は仲良く遊んでいたが、なにか気に食わなかったのか、兄が弟の頭を小突いてしまった。弟はわんわんと泣き始め、怒った父親が兄に謝るよう叱責した。すると兄は弟の頭を撫でながら、素直にごめんと謝った。暫くして弟は泣き止み、二人は再び遊び始めた。そうして、家族にまた笑顔が戻った。

　装飾店を改装して作られた居酒屋で、神谷は一人、酒を飲んでいた。月への帰還へと向けて、準備は既に完了しており、その前祝いというか、この地への送別も兼ねて、杯を掲げようとやってきたのだ。店は満席とは言わないまでも、そこそこには混雑しており、笑い声や話し声でざわざわと騒がしかった。
「こんばんわ」柿の種に似た辛味のある食べ物を口に放り込んだところで、セドナが声をかけてきた。彼女はいつもの白衣姿ではなく、水色のタートルネックのセーターに、足の細さがよくわかる、ぴったりとフィットしたジーンズを穿いていた。「ここ、いい？」
「どうぞ」断る理由もないので、神谷は快く了承した。
　彼女は椅子を引き出して腰掛け、テーブルの上で手を組み合わせると「一人酒？」と瞳に穏やかな笑みを浮かべた。
　神谷は肩をすくめて「一緒に飲んでくれる相手がいないんでね」
「それじゃ、私が相手になるわ」
　セドナはウェイターを呼んで、神谷と同じものを注文した。ほどなく、白い泡の浮かんだ黄金色の発泡した液体を運んできた。
「それじゃ、いろいろと乾杯」彼女はジョッキを掲げた。
「いろいろ？」
「そう、いろいろと、あるでしょ？」
　違いない、と神谷はふっと微笑を漏らし、グラスをカチリと合わせた。
　セドナは、風呂上がりにそうするときみたいに酒をグビグビと音を立てて飲み下し、液体がほどほどに喉に刺激を与えると深くため息を吐き出した。
　神谷はその様子にクスッと笑い、ピーナツをかみ砕く。
　セドナはジョッキを置くと、白い髭をおしぼりで拭き取って言った。
「あした、帰るんですって？」
　神谷は頷いて「帰りを待っている者がいるんでね」
「あら」セドナは目を細めた。「恋人？」
「いや、妹だ」
「そう、それは残念。おもしろい話が聞けると思ったのに」
「仮にそうだとして」神谷は酒を一口飲んで「なぜおもしろい話だと決めつける？」
「だって、そうじゃないとつまらないもの」とセドナも酒を一口。
　神谷は苦笑いを浮かべて、やれやれと頭を振った。
「妹さんて、どんな人？」
「そうだな」神谷は少し考え込んだ。妹がこの世に生を受けてから、今の今まで、そのことを考えてもみなかった。なにより、気に掛かるのは病気のことばかりで、そんな余裕もなかった。「かわいいよ。俺が言うのもなんだけど」
「あら」セドナはにこりと微笑む。「妹馬鹿なのね」

「妹馬鹿って……」神谷ははにかんで、恥ずかしさを紛らわそうとするように、グラスをを指先で弄びながら「家族を思うのは当たり前のことだろう？」
「確かにね」
「家族は？」
「私は一人よ。両親とも、数年前に死んだわ」
「それは……」神谷は目を伏せて「申し訳ないことを聞いた」
「いいのよ、気にしないで……。もう、随分前のことだから」セドナはジョッキの取っ手を指先で撫でた。「会ってみたいわ。妹さんに」
「機会があればね」神谷は答えてグラスを口に運ぶ。そしてぐいぐいと二口飲んで「君は、医者だよね」
「ええ、そうよ。それがどうかした？」
　神谷は一呼吸おいてから、呟くように言った。
「月の人間は病気を抱えてる」
「ええ、知ってるわ。そして、それに苦しんでいることも」
「月の重力が、地球よりもずっと小さいからだそうだ。だから医者に言わせると、地球に降りれば、或いは治るかもしれないと……」
　セドナはちらりと神谷を見た。その視線には、その意を汲み取ったというような光が宿っていた。神谷は続けて尋ねた。
「同じ医者として、君はどう思う？」
「そうね」セドナは深く息を吸い込んだ。そして慎重に言葉を選びつつ「治る、と言い切ることはできないわ。ただ、私たちの体は、地球で生きるように進化してきた。地球こそが、私たちに適した環境なの。だからその環境に身を置けば、体に起きた変調を正すことは、可能かもしれないわ」
「可能性はある……と？」
「ええ。試してみる価値はあると思うわ。でも、そのためには、早く戦争を終わらせないとね」
　神谷は彼女の瞳をじっと見つめた。その青色の虹彩は鮮やかな海色に輝いて、漆黒の瞳孔は引き込まれそうなほどに深く大きく見開かれている。その目を見ていると、心の奥底にあるなにかが、地震みたいに揺れるのを感じた。彼はその震動をなんとかして鎮めようとして、金色の液体を飲み干した。しかし、それが収まる気配はなかった。

　その日の夜、ドアをノックする音が聞こえて、神谷はタオルで髪を乾かしながらドアを開けた。アンナが立っていて、彼女ははっとした表情を浮かべたのち、きょとんとした彼の顔を見て、どぎまぎとした様子で言った。
「ごめんなさい。出直してくるわ」
　少し間があってから「いや、かまわないよ」と立ち去ろうとしたアンナに神谷はそう言って、タオルを肩に掛けると脇へ退き「どうぞ」と入室を促した。

　アンナは少しばかりためらいを見せたが、結局は「ありがとう」と微笑みを浮かべて中へと進んだ。
　神谷はドアを閉め、机から椅子を引き出してアンナに着席を促し、自身はベッドの縁に腰を下ろした。
「ごめんなさい」アンナは謝罪を述べて、椅子に腰掛けながら「いきなりのことで、驚いたでしょう？」
「まあ、ね」
　神谷は微かにはにかんで、ペットボトルの蓋を開け、ミネラルウォーターを飲み下しながら横目に彼女を眺めた。少なくとも、仲が良いと言えるような状況ではなかったから、突然の訪問にびっくりしたというのは確かだ。ただ、じっと前を見据え、背筋を伸ばしてちょこんと椅子に腰掛けているその姿からは、初めて会ったときに感じた茨のような刺々しさは消え、芯の部分は変わらないのであろうが、優しさというか、慈しみのようなものを感じた。
「少し、雰囲気が変わったかな」
「そう？　いつもと変わらないわ」アンナはどことなく恥ずかしそうに言って、ちらりと神谷を見遣り「あなたこそ、前とは様子が違うみたい」
　神谷は肩をすくめて「そうかな」とペットボトルを手に取って、もう一口飲んだ。そしてそれをサイドボードに置いて言った。「それで、なにか話があって来たんだろう？」
　アンナは視線を一旦余所へと転じてから、神谷へ目を向けて尋ねた。
「昨日のこと、どう思う？」
　神谷は暫し回想してから「良い家族だったな。幸せそうだった」
「ええ。なに一つ変わらない、どこにでもいる普通の家族だった」
「月人と地球人の家族であることを除けばね」
「彼女たちはそんなこと問題にしてないって、ビクトルさんは言ってたわ」
「本当にそうかな」神谷は口をきゅっと引き絞って疑問を呈する。
　アンナは少し思案げに黙したのち「そうね。普通なら、気にならないはずないわね」と一応の同意を見せ、すぐに異論を述べた。「でも、本当に気にしてないんだと思う。いえ、気にしないようにしているんだわ」
「それこそが最大の問題だね。意識するなと言われて、そうそう簡単にできるもんじゃない」
「ええ、でも、彼女たちにはそれができた」
「俺たちは彼女たちとは違う」
「違わないわ」アンナはすぐさま頭を振る。「彼女たちにできたのなら、私たちにだってできるはずよ」
「それは難しいね」今度は神谷が頭を振る。「瞳の色、肌の色、言葉、文化、宗教……上げればきりがないくらい、違いはある。それが現実だ。……それを意識するなと言われても、できるはずもない」
「違いがあるのは当たり前だわ。長い歴史の中で、違いが生まれるのは当然のことよ。だからそれを踏まえた上で、私たちは変わらなきゃいけないのよ。そうじゃなきゃ、これから先もずっと

、争い、憎しみあい続けることになるわ」
「だからっていまさらどうしようって言うんだ？　長い間、ぴくりとも変化の兆しを見せたこともない、心の奥底に根付いたそれを、引きはがすことなんてできないぞ」
「難しいことは充分、わかってる。でも、やるだけやってみなきゃ、変わるものも変わらないわ」アンナは強い意志の込められた口調ではっきりと言った。
　神谷はアンナを鋭く見つめた。「どうする気だ？」
「連合に戻って、上に話しをしてみようと思ってる」
「聞いてくれるとは思えないな」神谷は眉をひそめる。
「そうかもしれない……でも、このままなにもしないでいることはできないの」アンナは目を伏せて、悲しげな色をその顔に浮かべた。「もう、戦争はこりごりよ。人が傷つくのも、人が死ぬのを見るのも……」
「だから説得をしてみると？」
「あれを見たあなたなら、私の気持ちは分かるはずよ」
「うまくいくとは思えない」頭を振りながら、神谷は吐息混じりに言った。
「それでも私はやるわ」
　アンナはなにかを期待した目で神谷を見つめた。が、彼は特段、反応を見せなかった。彼女は悲しげな顔ですっくと立ち上がる。
「ありがとう。話を聞いてくれて。もし、縁があったらまた会いましょう」
　アンナは早口にそう言ってドアへと歩いて行く。その途中で思い出したように立ち止まり、振り向いて言った。
「ごめんなさい」
　神谷は怪訝な顔でアンナを見つめた。
「あなたを撃ったこと……。危うく死なせるところだった。もう、会えないかもしれないから、謝っておくわ。……それじゃ」
　アンナはくるりと振り返り、さよならと語りかけるように背を向けて、部屋をあとにした。

　月へと戻るその日、神谷はビクトルのもとを訪れていた。これまでの感謝と、別れの挨拶を述べるためだ。
「いろいろと、お世話になりました」
　神谷はぺこりとお辞儀をした。
「もう、行かれますか。寂しくなりますね」
　ビクトルは眉尻を下げ、本当にそう思っているという風に言った。
「私は月の人間ですから、いつまでもここで世話になるわけにはいきません。妹も待っていますので」
「そうですか……。そういうことでしたら仕方がありませんね。気が向いたら、いつでもお越し下さい。歓迎しますよ」

「ありがとうございます」
　神谷は再度、頭を下げた。
「そう言えば、アンナさんも戻るそうですよ」
「らしいですね」
「地球と月の共存について、上に話してみるそうです」ビクトルは捜し物をするような目で神谷を見つめ、続けた。「どう思いますか？　実現できれば、すばらしいことだとは思いませんか？」
「ええ、確かに、実現できれば、それはとても素晴らしいことでしょう。でも、難しいでしょうね」
「どうしてです？」
「長すぎた対立の中で蓄積された負の感情は、身動きがとれなくなるほどに、鎖のようにその心をがっしりと縛り付けています。それを解きほぐすのは、簡単ではないでしょう」
「なるほど、なかなか詩的な表現ですね」ビクトルは感動したように頷く。「確かに、あなたの言うとおりかもしれません。しかし、私は、例え歩みは遅くとも、その感情がやがて薄れて、世界が平和になると信じています。少なくとも、その努力はするべきです。そうだとは思いませんか？」
　神谷は口を噤み、喉を絞められたかのような苦しげな表情を浮かべた。彼の言ったことは正論だ。そう感じていたから、返す言葉がなかった。
　ビクトルは続けた。
「ともかく、アンナさんの努力が実って、いつか、あなた方が、互いの手を取り合う日が来ることを、切に祈っていますよ」

　連合に戻るとすぐに、アンナは上層部への面会を求めたが、色よい返事はなく、代わりに彼女を待っていたのは、自宅待機という名の軟禁だった。重要な任務に失敗したわけだから、懲罰を受けるのは覚悟をしていたし、仕方のないことだとは思っていた。しかし、北の大地で見てきたこと、感じたことを報告し、共存共栄への提案をするつもりが、それができずにいることが歯がゆく、残念でならなかった。こうしている間にも、戦争はあちこちで人の命を奪い、憎しみを生み、悲しみを広めている。そのことを思うと、おちおち眠ることもできず、目の下にはうっすらと隈ができた。
　そうして幾日かが経ったころ、ようやく呼び出しがあって、アンナは兵士に伴われ、上官の自室へと連れて行かれた。部屋には男が三人いて、正面の机には、安全保障理事局のマーク局長がのけぞるようにして腰掛けて、机の右手には、将校と思しき男が、両手を腰の後ろで組み、睥睨するような目でアンナを見つめていた。そしてソファーには、初老の小柄そうな男が背を向けて座っていた。
　アンナは机の前まで進むと、いつ倒れるともわからない棒倒しの棒みたいに直立した。
　暫く間があって、マークが口を開いた。
「任務は失敗したそうだな」
　ひび割れた野太い声がゴロゴロと響く。
　まだ小さい頃に、曇天から聞こえる雷鳴におびえて震えていたときのことを思い出す。当時は父親が良く励ましてくれたものだが、今はその彼はいない。もっとも、成長し大人となった今では、雷ごときに身を竦ませることもない。
「申し訳ありません。その件に関して言い逃れするつもりはありません」
「当然だ」マークはすぐさまそう言って、アンナを睨み付ける。「攻勢に出るチャンスを失ったのだ。言い逃れなど許されぬ」
　有無をも言わせぬ言葉にアンナは身を固くした。彼の口振りには怒りも込められていて、彼女はすぐにでも処断が下されるのではないかと覚悟した。しかし、マークはまるでそんなことには興味などないとでも言うように、むしろ満足そうな表情を浮かべていて、彼はソファーに座る男を睥睨するように見て言った。
「イブラヒム局長。これはあなたの責任でもあるぞ。彼女を推薦したのは、他ならぬあなたなのだからな」
　アンナは一驚と共にその人物を見つめた。彼は経済社会理事局の局長であり、軍人ではない。それがどういった理由で自分を指名したのか、彼女には分からなかった。背中越しではその表情をはっきりと見て取ることはできなかったが、うつむいた様子は後悔を滲ませたように見えるものの、僅かに覗く横顔からは、どちらかと言えば安堵の色が浮かんでいるようにも見えた。ともかく、任務に失敗したのは事実であり、責を負うべきは自分の方にある。だから彼女は、イブラヒムがなにかを言おうとするより先に、こう宣言した。
「全ての責任は私にあります。ですから、罰は私が受けます」

マークは苛立ちをその視線に乗せてアンナを見つめた。彼女は冷凍庫に放り込まれた魚みたいに体を強ばらせた。そうやって、マークは視線を向け続けたのち、聞こえるか聞こえないくらいの舌打ちをして、背もたれに寄りかかった。
「なるほど、覚悟はできているようだな。良かろう。処分は追って下す。もう下がっていいぞ」
マークはしっしと犬を追い払おうとでもするかのように言って、机上に積み上げられた書類の山から一つを手に取ると、左から右へと紙面に目を走らせた。
尋問はこれで終わりだった。思いの他あっけなくて、拍子抜けするほどではあったが、どのような処分が下されようが、それは問題ではない。今は伝えるべきことを、ここで話さなければならない。
「意見、申し上げてよろしいでしょうか」
「意見？」
マークは顔を上げた。その表情には怒りさえ滲んでいる。何様のつもりだ、とでも言うような顔つきだ。彼は暫くアンナを見据えたのち、書類を机の上に放り投げ、聞いてやろうじゃないかといった様子で言った。
「なんだね？」
アンナはプレッシャーを感じて、思わず息が詰まりそうになるのを、深呼吸をすることで防いだ。そしていくらか緊張が和らぐと、彼女は言った。
「追跡の過程で、私たちは、北部の街に暫く滞在することになりました」
「私たち？」
「私と、神谷さんです」
「神谷さん？　例の月人か？」僅かに声が上ずって、ややのち嘲笑が浮かぶ。「ずいぶんと仲良くなったものだな」
「いえ、それは……」
「まあ、いい。それで、北部がどうしたというのだね？」
アンナは姿勢を正して「北部では、北部人と月人が平和的に共存していました。彼らは家族となり、子供を儲けた人たちもいます」
「ほう。それで？」
マークは驚きもせず、あたかも知っていたかのような口振りで続きを促した。その様子を訝しく思いながらも、アンナは続けた。
「彼らは互いを理解し、尊重しあうことで、争いのない、共存の道を選択したのです。これは、私たちにも言えることだと思います」
イブラヒムが振り向いて、驚きと興奮の色をその視線に乗せた。
マークは腕を組んで威嚇するように睨み付け「つまり、我々も月と共存しろと、そう言いたいのかね？」
「はい。それが地球にとっても、月にとっても、最も良い選択だと私は考えます」
アンナは毅然と、そして強い口調で言った。
マークは一時ほど真顔でアンナを見つめたのち、のけぞるようにしてリクライニングをきし

ませ、高らかな笑い声を上げた。
「おもしろい。いや、実に愉快だよ。任務のあまりの過酷さに、頭がどうにかしてしまったらしい」そうして彼は一瞬のうちに心配そうな真顔を作り出すと、隣の軍服の男を仰ぎ見て「彼女に腕の良い医者を紹介してやってくれ。これではあまりにもかわいそうだ」
　軍服の男はくっくっくっと笑った。
　アンナは髪の毛が逆立ちそうなほどの嫌悪を感じて、苛立ちが表に現れそうになったが、なんとかそれを押さえ込んだ。
「このまま争いを続ければ、多くの命が失われます。それは月も地球も望んではいないはずです」彼女はそこで身を乗り出すようにして「ですから、今こそ、戦争を終わらせるべきなのです」
　マークは表情を掻き消した。「だからこそ、お前を月へ送ろうとしたのだろう？　忘れたか？　それを……任務に失敗したのは貴様だぞ」
「それはわかっています。でも、そんなことをしなくても、戦争を終わらせることはできるはずです。私はそんな世界があることを、そんな世界を作ることができると言うことを、この目で見てきました。どうか、月との和平交渉を検討してください」
「ありえんな」寸分の間もなくマイクは言った。そして盛大に鼻を鳴らして「和平などありえん」
「どうしても、ですか？」
「ありえん、といったらありえん」マイクはぴしゃりと言い放つ。
「つまり、私の提案は受け入れられない、ということですか？」
　アンナはむっとした顔でマイクを睨んだ。
「くどいな」
　マイクは吐き捨てた。
　ククッと軍服の男が喉の奥であざ笑う。
　説得は失敗したのだと、アンナは確信し、唇を噛み締めた。それでも、なんとかならないものかと、助力を求めてイブラヒムに目を向けたが、彼は苦渋の表情を浮かべるのみで、ただ黙ってじっと座っているだけだ。彼もまた、失望を感じているのだろう。アンナは視線を戻して口を開いた。
「では最後に、もう一つ質問よろしいでしょうか」
　続けろ、とマークはあごをしゃくる。
「この戦争は地球が先に仕掛けたということですが、本当ですか？」
　マークの顔色が擬態するタコみたいに一瞬で変化した。答えは聞かずともそれが物語っている。
「誰から聞いた？　月人の男か？　やつを信じるのか？　いや、それは愚問だな。どうやら月人に感化されてしまったようだ。となれば、もはやここに貴様の居場所はない」
　マークは軍服の男に合図を送った。男は頷き返すと、机に近づいて受話器を手に取り命令を発した。数分後、憲兵が二人、部屋に入ってきて、アンナに手錠をかけた。その間、彼女はマークをじっと見つめていたが、彼は目を合わせることもなく、我関せずといった具合で、再び資料を

手にとってそれを眺めていた。
　憲兵はアンナを両脇から挟みこみ、腕を絡めて逃げられないようにして、部屋から連れ出した。ドアが騒々しい音を上げて口を閉じ、全ての希望は吐き出された。廊下に響く靴音は、残された運命を切り刻む時計の音にも似ていた。いかに人間が神に似せられて造られているとはいえ、その命運を知りようはずもなく、彼女のその後の行く末は、まさに、神のみぞ知る、だ。しかし、その結末は、推して知るべしであった。

　シャトルのハッチが開いて、舌を突き出すようにして伸びたスロープの先で、ケインとジョバンニが、足を肩幅に開き手を後ろに組んで待っていた。その三メートルほど後には、銃を手にした兵士が数名立っている。
「銃は彼に渡してくれ」
　親指でジョバンニを指さしてケインが言った。
　神谷は言われた通りに銃を渡し、そして短く嘆息して眉尻を下げた。
「悪いな。こんな役目させちまって」
「いいさ。むしろ俺で良かったと思ってるよ」
　ケインは答えて、ジョバンニが手錠を掛けようとするのを手で遮った。彼が抗議の視線で見返したが、ケインはそれをさらりと無視した。
　神谷は頷いて感謝を示し、そしてずっと心を占めていた心配事を尋ねた。
「妹はどうしてる？」
「元気にしているさ。いつもの通り、かわいい笑顔で出迎えてくれたよ」
「そうか」神谷は胸を撫で下ろす。「お前に頼んでおいて良かったよ」
「親友の頼みだからな。それに、あんなかわいい子を放っておくわけにもいかないさ」
　神谷は片眉を下げて「手、だすなよ」と冗談とも本気ともとれるように言った。
「もう遅いかもな」ケインは申し訳なさそうに答えた。
「なんだって？」
　神谷は丸々と目を見開いた。
　ケインは暫くの間、まさしく本気だというような面持ちで親友の顔を見つめていたが、やがてぶうっと吹き出した。神谷はやれやれとため息と共に苦笑を漏らした。
　その二人の間にジョバンニが割って入る。
「司令官がお待ちです」
　その言い方があまりにもぶっきらぼうだったので、ケインは、つまらない男だ、という顔で肩をすくめた。三人は神谷を真ん中にして、その左右にケインとジョバンニが並び、前後を兵士に挟まれて彼らは歩いていった。
　会議室にはヨウ司令官とホセ局長の姿があった。二人は小さなテーブルを挟んで座っており、双方とも落ち着いた顔つきで互いを見合っていた。
　神谷が部屋に入ってくると、ヨウが言った。

「さて、説明を聞こうか」
　神谷は地球潜入から任務失敗までの経緯を話した。その間、二人とも怒った様子も懸念を示すこともなくただ黙って耳を傾けていた。ただ、地球が月にスパイを潜入させようとしていたことに対しては、それぞれが思うところをその表情に覗かせた。
「スパイなどしようとは、いかにも厚顔無恥な地球のやりそうなことではないか」
　ヨウは不満げに鼻を鳴らす。
「始めにそれをしようとしたのは月の方ではないか」
　咎め立てするような口振りでホセが言い返す。彼はヨウを見もせずあさっての方に目を向けている。
　当然、なんらかの反論があるだろうと神谷は思った。しかし、ヨウはなにも言わず、ただおちついた様子でホセを見つめるだけだった。神谷は真っ直ぐ前を見据えたまま、視界の中で二人の様子を窺った。
　そんな静かなやりとりが暫く続いたのち、ヨウが口を開いた。
「報告は以上かね？」
　神谷は待っていたとばかりに踵をカチリと合わせ、背筋を伸ばして声を張った。
「意見申し上げてよろしいでしょうか」
「なんだね？」
　ヨウは背もたれに寄りかかった。ぎしぎしと音が鳴る。彼は神谷の申し出を咎めることもせず、むしろ余裕の表情を浮かべていた。
　神谷は一つ深呼吸をしてから言った。
「地球との和平交渉ならびに、共存協定の締結を提案いたします」
「なんだと？」ヨウは眉毛がくっつきそうなくらいに眉間に皺を寄せた。「地球と和平？　共存だと？」
　その提案を良く思っていないことは、彼の表情を見れば一目瞭然だ。が、それでも、神谷は言わずにはいられなかった。
「北部では北部人と月人が共に暮らしています。中には家族となって子供を儲けている者もいます。彼らは互いを理解し、尊重することで、争うことなく共存しているのです。彼らにできるのであれば、我々にもできるはずです。しかしそのためには、和平を結ぶ必要があります」
　ヨウは信じられないという顔で、目をぐわっと見開いて「地球人と共に暮らすそのために、和平を結べと？」
「そうです」
「馬鹿な！　そんなことはありえん！」
　解き放たれるようにその言葉が飛び出して、同時に唾が飛散する。絶叫のようなヨウの声が空間を震わせた。
　神谷はびくりと体を震わせて、思わず後じさりしそうになった。あまりの剣幕に驚いたのだ。しかし、ここで引いては和平はおろか、共存、共栄など成り得ない。彼は土を掴むように足の指に力を込めて、なんとか後退を凌ぎきると、胸を反るようにして堂々と反論を述べた。

「ですが、事実として、共存は実現できています。我々がそれをしない理由はありません」
「理由？　理由だと？」眉間の皺が更に深くなる。彼は汚いものを吐き出すように「やつらが我々になにをしたかわかっているのか？」
「わかっています。しかし、このまま戦争を続けていては、被害は拡大するばかりであり、ひいては、地球との共存はなお難しくなります」
「いいか？」ヨウは前屈みになって、指先でコツコツと机をつついて苛立ちを覗かせる。「そもそも我々には、共存などと言うばかげた考えはない。我々の心にあるのは、地球をこの手に取り戻すことだけだ」ヨウは神谷を睨み付ける。「だからこそ貴様に任務を命じたのだ。それを忘れたか？」
　神谷は眼光を鋭くして「総攻撃などするべきではありません。そんなことをすれば、戦禍はなおも拡大し、多くの人が命を失うことになるでしょう。そうやって傷つけあったその先に、いったいなにがあるというのです」
「なにがあるだと？」ヨウは鼻腔をぷうっと膨らませ、興奮を交えて続けた。「地球人のいない世界だ。連中など、みな死んでしまえば良いのだ！」
　神谷ははっとして息をのんだ。総攻撃の目的を、彼は、戦争を終わらせるため、と言っていた。が、これこそが本心なのだ。それが分かると、だんだんと怒りがこみ上げてきて、彼は拳を握りしめて声を荒げた。
「それはあまりにも傲慢で身勝手です。そんな考えは許されない！」
「貴様の許しなど得る必要はない！　立場をわきまえろ！」
　ヨウは拳で机を叩きつけた。ものすごい音が響き渡る。その衝撃はすさまじく、空手家が瓦を割るみたいに机が真っ二つになってしまうのではないかとさえ思えた。ヨウは獰猛な番犬が歯を剥き出しにして吠え盛る姿そのもののように、体中のあらゆる部位を怒らせて神谷を睨み付けた。
　神谷はもうなにを言っても無駄なのだと悟った。ヨウの心の中には、地球人を滅ぼすこと以外になにもないのだ。神谷は落胆のため息を吐き出した。
　すると、その様子を見てか、ホセが助け船を出した。
「彼の言う通りだ」
　ヨウがぎくりと首を回す。まるで壊れかけのゼンマイ仕掛けの人形のようだ。ホセは続ける。
「地球人は我々と同じ人間だ。その彼らを……同じ仲間を殺すなど許されない」
「仲間だと？　我々を月人と呼んで蔑み、認めようともしない連中を、仲間と呼べるのか？」
「彼らにも言い分はあるだろう」
　ヨウが盛大に鼻を鳴らした。ホセはちらりと見遣り続ける。
「我々は彼らを地球に残して月へ逃げてきた。そんな我々が再び地球へ戻ろうとしている。おもしろく思っていないことは確かだ。彼らからしてみれば、到底受け入れがたいことだろう」
「なら、地球へ戻るのは諦めるか？」
「そうは言っていない」
「受け入れられないなら奪うほかない。邪魔な地球人を、駆逐するよりほかないのだ」

「そんなことはもってのほかだ！　そんなことをしなくても、話し合いで解決できるはずだ！」
「それができれば苦労はない。できないからこその、総攻撃だろうが！」
「共存こそが唯一の道だ。我々はそう考えているし、あなたにも考えを改めてもらいたい」
「ありえん！」ヨウは強く鋭く言い放つ。そして立ち上がり「貴様らには付き合えん！」と吐き捨てて、どかりどかりと部屋を出て行った。
　ドアが閉まると部屋には静けさだけが残った。
　ホセは深く息を吸い込んで、鼻から息を吐き出すと、椅子に寄りかかって腕を組み、やれやれと頭を振って目を閉じた。そうやって暫く沈黙に身を置いて、のち、彼は目を開けると言った。
「あちらでなにがあったのだね？」
　神谷は北部で見たこと、経験したことを、事細かく話した。ホセは時折うんうんと頷きつつ、興味深げに耳を傾けて、すべてを聞き終えると言った。
「なるほど、それで、話に出てきたその女性に触発されたと、そう言う訳かね？」
「影響があったか、と問われれば、正直なところはわかりません。あったかもしれないし、なかったかもしれません。……ただ、私は、妹の病をなんとか治してやりたいのです」
　同じような境遇にある者なら、誰しもがそう思うだろう。この病は、地球にいれば起こることはなかったはずの病気だ。もちろん、地球に戻ったからといって完治する保証はない。しかし、なんらかの改善は見られるはずで、多少なりとも、苦痛から逃れることはできるだろう。
「そうか」ホセは何度も頷き、神妙そうな表情を浮かべた。「たしかに、地球に戻ることで、病は治るかもしれん。それに、地球への帰還は我々の望みでもある」
「ですが、あのやり方ではむしろ遠回りです。私には、和平こそが、近道に思えます」
「うむ」ホセは同意した。が、すぐに顔を曇らせて「だが、彼らにそのつもりはないようだ」
「私はその考えを変えさせたいのです」
　ホセは悩ましげな表情を浮かべる。
「彼の様子を見て分かっただろうが、容易にはいかないだろう」
「やはり、無理でしょうか」
「わからん」ホセは顔をしかめて首を左右に振る。のち、肘掛けを撫でながら言った。「が、今回のことは良い契機になるかもしれん」
「だといいんですが……」
　神谷の言葉は尻つぼみになって、徐々に力を失っていった。
　ホセは口を真一文字に結んだ。神谷の懸念が充分に理解できたからだ。事実、彼自身、これが良い方向に転ぶとは思っていなかった。
「ところで、その、アンナという女性のことだが、信用に足る人物かな？」
「ええ、信頼して良いと思いますよ。任務のために、私を撃つくらいですから」
「なるほど。そのようだな」
　ホセは愉快そうに軽く笑い声を上げ、次に笑みを消して続けた。
「彼女の方も簡単にはいかないだろう。が、なんとかうまく事が運んでくれると良いのだが」
「ええ、そうですね……」

　望みがまったくない、と言うわけではないが、ヨウの様子からして、それは地球でも同じであろうことは想像に難い。
「ともかく、他になにかやれることがないか、考えてみよう」
　ホセは立ち上がる。そのホセに向かって、神谷は、よろしくお願いします、と頭を下げた。
　彼に、世界を動かすだけの力はない。それができるのは、いつの時代も、権力を持った一部の人間だけだ。だから、ただ、為政者たる彼らが、敷設するレールを修正して、正しい方へと向かうのを、ひたすら願うしかなかった。

　アンナは戦闘服に身を固め、ベッドの上に投げ出されたバッグに荷物を詰め込んでいた。営倉で数日を過ごしたのち、監禁が解かれると、彼女は前線への異動を命じられた。これまでも前線に近い場所での任務は経験してきたが、それは地下街などでの医療行為がほとんどで、今回のように、地上部隊の一員として、戦闘行為に参加することはない。一通り訓練を受けてはいるが、実戦への参加は初めてで、まさに新兵であり、運良く生き延びることはできるかもしれないが、怪我をして後方に送られれば良い方で、大概は死体袋に収まって戻ってくるのがほとんどだろう。それ故に、前線への赴任は死刑を言い渡されたようなものだった。本来なら逃げ出したいところだが、軍人ともなればそのようなことは許されない。覚悟を決めるよりほかなかった。
　荷物の整理もほぼ終わり、あとは戦地に赴くばかりとなったとき、ドアが開いて、イブラヒムが姿を現した。彼は一言、二言、外の警備兵に何事かを言うと、中へと入ってドアを閉めた。少し進んで立ち止まり、アンナと目が合うと苦悶の表情を浮かべた。
「私の責任だ。許してくれ」
「いいえ、お気になさらないでください。むしろこの程度で済んだことを感謝いたします。局長が手を尽くしてくださったのですよね？」
「彼らはどうしても君を排除したかったようだ。前線送りに留めるのが限界だった」
　苦虫をかみ潰して吐き出そうとしたものの、どうしてもそれをうまく処理できなくて、口の中がのっぴきならない状況となっているというような、そんな表情をイブラヒムは浮かべた。
「彼らにとって、私は煙たい存在だということなのでしょう。仕方のないことです。次のチャンスに期待します」アンナはドアの方に目を向けて「それにしても、良く入れてくれましたね」
　イブラヒムは小さく笑った。
「紙切れをいくらか握らせたら、喜んで通してくれたよ」
　アンナはわざとらしく、呆れた表情を浮かべて「あなたがそんなことをするなんて」
「軽蔑するかな？」
「いえ。紙切れですから、問題ないでしょう」
　二人は軽やかに声を上げて笑った。
　イブラヒムはまじめな顔になって「必ず君を中央に戻す。だからそれまで生き延びるのだぞ」
「自信はありませんが、尽力します」
　イブラヒムは口を引き絞って、健闘を祈る、と視線に込めてアンナを見つめた。
　アンナは頷いてそれに返答した。そして続けて尋ねる。
「先の任務では私を推薦いただいたとのことですが、どうして私を選んで頂いたのでしょうか」
　イブラヒムは僅かにためらいを見せたのち、ゆっくりと話し始めた。
「我々は、君が任務に失敗してくれることを望んでいた。なぜなら、我々は月と争うことを望んではいないし、関係を悪化させたいとも思ってもいない。しかし、この任務が成功のうちに終われば、戦争は更に悪化し、月との関係もなお冷え込むだろう。それはなんとしても避けたかった。だから君を選んだ。君は、訓練を受けているとはいえ、医師が本分だ。このような任務には向

いていない。そんな君が任務に就けば、失敗してくれるのではないかと踏んだのだ」彼はそこで言葉を切り、アンナの様子を確かめた。彼女は特段、怒った様子もなく、落ち着いた表情で耳を傾けている。イブラヒムは少し安堵した顔で続けた。「このような方法をとったことを、君には大変申し訳なく思っている。だが、我々は是が非でも、この任務を不成功に終わらせたかった」彼はそこで一旦、口を閉じてきゅっと引き絞る。そしてややのち「怒っただろうか」

アンナは大きくはっきりと、首を左右に振った。

「いえ、怒ってなどいません。むしろ、失敗してよかったと思っています。私も、月と争うべきではないと思っていますから。……ただ、それが叶いそうにないのが、残念でなりません」

イブラヒムは頷いた。

「私も同感だ。彼らはどうしても、月との戦争をやめたくないのだ」

「どうしてそこまで、こだわるのでしょうか」

イブラヒムは小さく唸って「こだわる、というより、意固地になっている、と言った方が良いかも知れん」

「意固地、ですか」アンナは怪訝そうに首を傾げる。

「始めたはいいが、引くに引けなくなっているのだろう。潮時というものを見失っているのだ」

「地球が先に仕掛けたというのは本当でしょうか」

イブラヒムはうなだれるように頷く。「市民には知らされていないがね」

「一部だけが知っていた真実、というわけですか」

「それが原因で戦争が始まったわけだからな。公にはできないだろう」

ドアが開いて兵士が顔を覗かせた。戦地へと赴く時間がやってきたのだ。アンナはバッグを肩に担ぐと出口へと向かった。外へ出て、イブラヒムに別れを述べると兵士に付き従って歩いて行く。イブラヒムはその背中を、憐憫の表情と眼差しで見送った。

「俺は女だからと言って、甘やかすようなことはしないぞ」臆病者が精一杯の虚勢を張って脅しつけるように隊長は言った。「貴様は俺の駒でしかないんだ」

アンナは口を真一文字に閉じて、直立不動で立っていた。別に恐ろしいとか、そんな風に思ったわけではない。こういうとき、あまり口答えをしない方が無難だと、そのくらいには、世渡りの術を心得ていた。

隊長は机に手をついて立ち上がった。座っていたために気がつかなかったが、背はアンナよりもずっと小さい。これなら勝てるかもしれない、とアンナは思ったが、相手は男で、長く前線で生き延びてきた兵士だ。甘く見るのは危険だ。彼女はその考えを頭から捨てた。

彼はゆっくりと歩いてきて、アンナのすぐそばに立った。そして彼女の顔をじっくりと検分してから、犬がそうするように体を摺り寄せてきた。なにかが当たるのを感じて、アンナは身震いした。

隊長は言った。

「しかし、俺も鬼じゃない。お前の態度次第では、考えてやらないでもないぞ」

　吐息が胸元を駆け上り、首筋をぺろりと舐めて、身震いは悪寒へと変化した。それは大変に耐えがたく、怒りの防波堤は危うく決壊しそうになったが、彼女はなんとかそれを凌いだ。
「これでも私は兵士です。ご心配には及びません」
　隊長の顔がくっつきそうなくらいに近づいた。
「お前だって死にたくはないだろう？　だから助けてやろうと言ってるんだ。悪い話じゃないぞ」
　男はそう言いながら、アンナの腰に手を回した。
　もはや限界だった。
「そんなに欲しいなら、その大事なものをちょん切って、ご自分で楽しむといいでしょう。ちょん切る時は、お手伝いしますよ。私は医師ですから、その辺はお任せください」
　隊長はくわっと目を見開いた。彼の脳みそはすぐに沸騰して湯気を出し始めた。
「貴様！　上官に対するその態度はなんだ！」
　ぎりりと男の歯ぎしりの音が聞こえた。
「隊長こそ、それが部下に対する態度ですか？」
　持ち前の負けん気は留まるところを知らない。
　男の顔が真っ赤になった。これがやかんなら、蒸気で蓋がカタカタと音を立てているところだが、彼の頭はやかんではないのでさすがにそれはない。しかし、怒りのあまり頭蓋がギシギシと軋む音は聞こえてきそうで、爆発して吹き飛ぶのは時間の問題だった。
　そこに、差し水があった。
「失礼します」と声が聞こえた。
　アンナを睨みつけていた目がそちらへと向けられて「なんのようだ」と隊長の怒りを露わにした声が飛んだ。
　アンナは声の方へと首を傾けた。彼女と同じくらいの年齢の、男の兵士が立っていた。隊長とは異なり、きっちりと武装をしている。
「仲間が痺れを切らしてまして……。新人はまだ来ないのかと」
　兵士は手にライフルを構えていた。いっそのこと、それで撃ってしまえ、と彼女は考えていたが、その思いに感づいたのか、彼は微かに笑みを浮かべた。
　隊長はアンナの耳元で舌打ちをした。そして背を向けて歩いていき、どかりと椅子に座った。
「さっさと連れて行け」
　隊長はそれ以上はなにも言わなかった。きっと、小生意気な女など、戦場で犬死するに違いない、と、そんな風にでも思っているのだろう。そう想像すると、アンナはいっそう腹が立ってしかたがなかったが、今はともかく我慢して、さっさとこの場を離れるのが得策だ。
「失礼します！」
　彼女は張り切ってそう言うと、くるっと振り向いて、急ぎ足で部屋をあとにした。
　通路を暫く歩いてから「ねえ」とアンナは兵士の背中に呼びかけた。
「なに？」男は振り返ることなくまっすぐ前を見て応じた。
「あなたは、私に背中から撃たれても仕方のないようなこと、言わないわよね」

　男はくすくすと笑って「一緒にするなよ。あんなやつと」
「嫌いなの？」
　男は僅かに振り向いて「好かれてると思うか？　あれが。こっち来て一度だって前線に立ったことはないし、地上にすら出たことはない。で、やってることといえば、あんたにしたようなことくらいだ」
　アンナは目を丸くした。「私が初めてじゃないの？」
「まあ、そうだね」
「その銃、貸して！」アンナは男の隣に並んで手を伸ばした。
「おいおい、待てよ。早まるなよ」
　兵士は素早い動作でアンナの腕を掴み取る。おかげで銃が奪われることはなかった。
「放して！　許せないわ！」
「落ち着けって。……うまくいったことなんかないんだからさ。言ったろう？　好かれてないって」
「あなたたちが邪魔したってこと？　今日みたいに？」
「これでも一応、良心は持ってるつもりだけどね、俺は。他の連中はどうか知らないけど」
「ごめんなさい」アンナは素直に謝った。
「いいさ」男は肩をすくめた。
「あなた、名前は？」
「加藤」
「私はアンナ。宜しくね」
「ああ、宜しく。とはいえ、ここじゃ人の名前なんか覚えたってたいして意味がない。……さて、着いたぞ」
　その小さな部屋は武器庫で、加藤は机の上に並んだ装備の品々を指差した。
「これが君のだ。手入れは自分でやるように。それから、銃弾にも限りがあるから、無駄遣いしないこと。いいね？」
　アンナは頷いて、装備を身につけ始めた。その作業を行いながら、彼女は尋ねた。
「どうして、彼のこと上に報告しないの？」
「あれは口がうまいからね。上層部の覚えもいいんだよ。ま、それが彼の処世術ってやつだろうね」
　アンナはむっとした顔で「中央に戻ったら、私が話すわ」
「戻るつもりなのか？」
　加藤はびっくりした顔をした。
「もちろんよ。諦めつもりはないの」
「諦めるって、なにを？」
「戦争を終わらせて、月と共存することよ」
　加藤は更に目を丸くする。
「月と共存するって？　戦争が終わるならそれは俺も大歓迎だけど」彼は表情を歪めて「共存は

無理だね」
「どうして？　私は実際に、地球人と月人が共存しているのを見てきたのよ」
「見てきたって、どこで？」
「北部よ。地球人と月人が結婚して、子供までいるのよ」
　驚きを通り越して、呆れた表情を加藤は浮かべた。
「それが本当ならすごいことだ」彼は頭を振った。「でも、無理だね。いずれわかるよ。さて、準備はできたね」加藤は銃を構えた。「地獄へようこそ」
　月との戦力差は月とすっぽん程ではないにしても、大人と子供くらいには離れていて、失われる地球側の兵士の数は、常に月側の倍はあった。だからいつでも”駒”の補充は欠かせなく、アンナもその一駒となるべく、こうして呼ばれたわけだが、そうした環境の中にあって、無事に生き残る歴戦の兵士もいれば、任務に就いて挨拶を交わしたその舌の根も乾かぬうちに、袋に入れられて後方へ送られる者も大勢いた。だから加藤が言ったように、名前を覚える意味などないというのも、合点がいくという次第だ。当然、この状況が天国などであるはずもなく、これを”地獄”と表現するのもあながち間違いではなく、この数日の戦闘の経験を経て、彼女はそれを痛切に実感していた。
　そんなある日のこと、小さな食堂のテーブルに腰掛けて、加藤と共に、ささやかな昼食に頬を膨らませていたときのことだった。
「おい、お前」と兵士が声をかけてきた。
　男の肌は浅黒く、いかにも軍人といった厳つい顔立ちで、そこにしっかりとした目鼻が並び、腕まくりした前腕に浮かぶ無数の傷跡は、彼が歴戦の兵であることをうかがわせた。
　兵士は続けた。「なんで撃たない？」
「なんのこと？」食事の手を止めて、アンナは男を見上げた。
「なぜ敵を撃たないのかと、聞いてるんだ」
　兵士は苛立ちをその目に現した。
「撃ってるわ。言いがかりはよして」
　彼は鼻を膨らませた。「聞き方を変えよう。なぜ殺さない」
「殺す理由がないわ」
「理由がない？　敵を殺すのに、理由がないだと？」兵士は憤怒の表情でテーブルに片手をつくと、前屈みになって、アンナを睨み据えて「ふざけたこと抜かすんじゃねえ」とだみ声で凄んだ。
　加藤が忠告の視線を送ってきているのをアンナは視界の端に捉えたが、彼女はそれを無視した。
「敵だからといって、殺して良いという理由がない、と言っているのよ」アンナはフォークを置くと、わざと大きなリアクションで座り直し、兵士の方に体を傾けると、いやに丁寧な口調で「ねえ、教えて。敵ならどうして殺していいの？」
　兵士は体を起こして腕組みをし、自信たっぷりに「敵は敵だ。殺していいに決まってる」
　アンナは失笑を漏らす。

兵士は眉と眉の間に、深々とした谷と、天をも貫くような山を幾重にも刻んで「なにがおかしい」と肩を怒らせた。
「そんなの、理由になってないわ。頭、悪すぎるわね」
「なんだと！」兵士は怒声を上げて、詰め寄ろうと一歩を踏み出した。
それを「まあ、まあ」と加藤が立ち上がって制止した。「あれを見せたらどうかな、ムアンバ。そうすれば、彼女も考えを変えると思うよ」
アンナは怪訝な顔で加藤を見つめた。その問い掛けを、今度は彼が無視した。
ムアンバと呼ばれた男は少し考え込んでから「そうだな。よし、つれて来い」とさっさと歩き出した。
「こっちだ」加藤はアンナの腕を掴んだ。
「なによ！」不機嫌そうにアンナは言って、腕を振り払おうとした。しかし、加藤の方が力が強くて、それは叶わなかった。
アンナが連れて行かれたのは、学校にある視聴覚教室みたいな部屋で、パイプ椅子が整然と列を成して並び、その正面に、液晶テレビとＤＶＤプレーヤーが置かれていた。ムアンバは、ディスクをセットするとリモコンでテレビの電源を入れ振り向いた。
「これは、月の連中が持ってたものだ」
彼はそう言って、再生ボタンを押した。
しばらくすると、薄暗い小部屋が映し出された。そこには両手を後ろ手に縛られ、うなだれて椅子に座る男の姿があった。生きているのか死んでいるのか、彼はぴくりとも動かない。間もなく、数人の兵士が現れて、男を囲むように立ち並んだ。彼らはいずれもが恐ろしげな表情を浮かべていて、凍り付いてしまいそうなほどの冷たい眼差しで男を見下ろしていた。その中の一人が、腕を伸ばして男の頭髪をがしっと掴み、後方へとむんずと引っ張った。男の顔が照明に照らし出されて、青あざや赤あざが露わになる。男は痛みと苦しみにうめき声を上げた。それはか細くて弱々しく、いまにも消え入りそうなほどだった。
兵士たちは尋問を始めた。いずれも、地球の軍備に関する内容だ。彼らはあれこれと質問を繰り返すが、もちろん、男がそんな質問に答えるはずもない。彼は半開きの目で兵士たちをじろりと睨み、馬鹿にしたように薄ら笑いを浮かべた。すると、兵士たちは男の顔を殴ったり、腹にパンチを入れたりと、積もり積もった苛立ちを吐き出すように、暴力を振るい始めた。そうすると次第に、尋問などどうでも良くなってきて、言葉は罵声となって、暴力は虐待へと変化した。それは時を経るごとに激しさを増していき、終いには、男は崩れる積み木みたいに椅子から転がり落ちた。その力なく横たわる男を、兵士たちの暴力はなおも襲い続けた。彼らの暴虐はとどまるところを知らず、また、それをとめる者も誰一人とていなかった。
やがて、男は本当に動かなくなった。
「なんだ？　死んだのか？」
兵士の一人が言った。
仲間がしゃがみ込んで様子を窺う。
「ああ、死んだな」

　なんの感情もない声が言う。
　舌打ちが聞こえて、もう一人が男を蹴飛ばした。
　兵士たちは死体を取り囲み、まるで石ころでも見るように見下ろした。やがて、彼らはその顔に一切の表情を浮かべることもなく、冷めた様子でその場を去っていく。あとにはただ、男の亡骸だけが残った。
　映像はそこで終わった。
「これ見てなんも感じねえとしたら、あんたの頭はどうかしちまったってことだな」
　ムアンバが言った。
　確かに、この映像を見てなにも思わない者がいるとしたら、それは冷徹極まりない人間といえるだろう。感情というものを有する人間なら、誰しもがなにかを感じるはずだ。心に去来する思いは人それぞれであろうが、この最前線で命の境界線上に身を置く兵士たる彼らならば、そこに憎しみが生まれても不思議はない。かくいうアンナ自身でさえ、親友を失ったあのとき、憎しみが増殖していったのを覚えている。しかし、今、彼女の中にあるのは憎しみではなく、むしろ哀れみの心だ。地球人と月人が、このように憎しみあうことしかできないとするなら、それはとても不幸で悲しいことだ。事実、彼らは悲しみに満ち満ちている。そこから抜け出したいなら共存の道しかない。相手を理解し、尊重する。その先にこそ、本当の幸せというものは存在するはずだ。
　アンナが口を開こうとしたが、それをムアンバが遮った。
「あんたにもう一つ見せてやる。こっちだ」
　アンナは別室へと連れて行かれた。そこにはあのビデオの再現かと思えるような光景があった。
　三人が現れると、男はゆっくりと顔を上げた。疲労困憊ではあったが、その目は怒りと憎しみに満ち満ちていて、それによってのみ生き永らえているといった顔をしていた。
「こいつの顔、見覚えあるだろう？」
　アンナはその顔を良く観察した。そして、あのビデオに映っていた、最後に男を蹴った兵士であることに気がついた。
　ムアンバが言った。
「おい、お前。どうしてここに来たのか、彼女に教えてやれ」
　男はじろりとアンナを見つめた。その視線は舐めるようで、怒りと粘着性のなにかが混じり合って纏わりつくようであった。
「あんたらを殺してやるためさ。殺して殺して、殺しまくるのさ！」
　男はそこでいやらしい顔になった。
「なあ、ねえちゃん。ちょっとこっちこいよ。いいことしてやるからさ。なあ？」
「だまれ！」
　ムアンバが男を殴った。ものすごい音がして、男の口から鮮血が一筋、流れ出た。
　男はムアンバをキッと睨み付け、血の混じったつばを飛ばした。
「必ずお前ら全員、殺してやる。八つ裂きにして、肥だめに捨ててやる！」

　彼はけらけらと、そして高らかに笑った。死を覚悟したときの笑いだ。
　ムアンバはブルブルと憤怒に震えて、頬についた血液の混じったつばを拭うと、怒りに任せるがままに男を殴り、蹴った。男の顔が見る見るうちに腫れ、青黒く変色し、血が飛び散って、床にぽつぽつとしみを作った。
「やめて！」アンナが鋭く声を発した。「死んでしまうわ！」
　ムアンバは手をとめて振り向いた。
「ビデオを見ただろう？　こいつはやめたか？」ムアンバは男に視線を戻した。「最後の一蹴りを俺は忘れない」
　男はにやりと笑った。顔が崩れているので、本当に笑っていたのかはわからない。しかし、少なくとも、ムアンバにはそう見えた。
　再びリンチは始まった。騒ぎを聞きつけた彼の仲間が輪に加わって、暴虐は激しさを増していく。中には笑いながらカメラを回している者もいた。
　アンナはなんとかこの残虐非道な行為をやめさせようとした。しかし加藤に阻止された。彼はアンナの腕を取って部屋の外へと引っ張っていき、充分離れたところへとやってくると言った。
「見ただろう？　これが現実なんだ。たしか共存は可能だって言ってたね。だけどそれが無理だってことは、充分にわかったはずだ。それがわかったら、もう無意味なことは考えないほうがいい。それから、これは俺からの助言、というかお願いになるね。君が死ぬのは勝手だけど、俺は仲間が死ぬのはごめんだ。だから、敵の誰かが仲間を殺す前に、君は敵を殺すべきだ」
　互いの憎しみの深さは、互いの存在を否定し、互いへの暴力へと向かわせる。それはこの一連の出来事を見れば明らかで、共存など無理だという、加藤の言葉を裏付けていた。確かに、それが現実なのかもしれない。しかしアンナは、北の地で見たことが、決して不可能なことなどではなく、この現実が、変えることのできるものなのだと、そう信じている。だから自分のしようとしていることが、無意味なことだとは思っていなかった。
　その後、アンナは後方に下げられて、戦闘に参加することを禁じられた。仲間がそれを拒否したからだ。敵を殺す覚悟のない者に、背中を任せてはおけない、というわけだ。ともかく、敵を撃つことに積極的にはなれない彼女にとっては、直接、敵と相対することのない場所に移されたのは幸いだ。とはいえ、第一線から外されて窓際へと追いやられたサラリーマンのようなこの状況は、決して良いものではなかった。
　そうして無為に日々を過ごしていたある日のこと、アンナは突然、隊長から呼び出しを受けた。また嫌らしい目で見てきたら、今度は遠慮なくひっぱたいてやろうと決意して部屋に入ると、予想に反して、彼は晴れ晴れとしたうれしそうな表情を浮かべていた。
「中央からの帰還命令が出ている」
「私にですか？」
「お前以外にあるか？　喜んでいいぞ」
　真に喜んでいるのはあなただろう、とアンナは思ったが、それは口にはしなかった。
「すぐにですか？」
「そうだ。わかったらさっさと行け」

　アンナは敬礼をして、くるっと向き直って部屋の外へと向かった。
　その背中に、部隊長のだみ声が言う。
「二度と来るなよ」
　頼まれたって来るもんですか、とアンナは敢えてその耳に届くように呟いて、ドアをバタンと閉めた。そして漏れ聞こえてくる隊長の罵声を無視しつつ、足早に廊下を歩いていった。

「良くぞ無事でいてくれた」
　アンナの姿を見るなり、ホセは満面の笑みを浮かべて言った。本当に心配していたといった様子で、安堵の色もその表情には浮かんでいた。
「おかげさまでなんとか」
　アンナは机を挟んだホセの正面に、軍人らしく直立して立った。
「楽にしてくれ」アンナは両足を肩幅に開き、両手を後ろに回す。「前線はどんな様子だった？」
　アンナは自身の体験したこと、感じたことの全てを話して聞かせた。無論、隊長の不敬な態度についてもだ。
　ホセはその報告を、苦渋や怒りの色を、交互に、或いは同時に表しながら聞いていた。最後に彼はため息をついた。
「そうか。大変な目にあったな……。隊長のことについては、私から話しておこう」
　これで少しは溜飲が下がるというものだ。アンナは早速、本題に入った。
「それで、私をお戻しいただいたのは、なにか用件があってのことと思いますが」
「ふむ」ホセは頷いた。彼は明るい表情になって「月から和平交渉についての打診が来た」
「本当ですか？」格納式のヘッドライトが明かりを点灯させる時みたいに、アンナの目が見開かれて、その顔もぱっと明るくなった。
「本当だ。月面基地に地球側の代表を迎えたいそうだ」
「中立地帯ではないのですね」
　アンナはわずかに懸念を覗かせた。
　和平交渉が行われるとはいえ、まだ戦争中であるし、決裂すればなにが起こるかわからない。そのような状況で、敵地に乗り込むのはリスクが伴う。とはいえ、このチャンスを逃せば、もう二度とないかもしれない。
「地球の交渉団を招き入れる。というのは、それだけ本気なのだという意思表示なのだろう。ただ、あちらからの突然の歩み寄りは、彼らを疑心暗鬼に陥らせている」
「ヨウ司令官、ですか？」
　ホセは頭をコクリとさせた。「なにか裏があるのではと疑っている。戦争が長く続きすぎたせいで、疑い深くなっているのだろうな」
「では、和平交渉は……」
　アンナは不安顔になった。これがなによりも最大の懸念材料だ。双方がスタートラインに立たなければ、そもそもなにも始まらない。
「無論、交渉は行われる。そうでなければならない」アンナは安堵に胸を撫で下ろし、硬化した表情は緩やかに軟化した。ホセは続けた。「そこで君には、交渉団に付き従って、その警護の任について欲しい。もし、万が一、危急な事態となったときには、速やかに交渉団を引き上げさせてもらいたい」

「私でよろしいのですか？」アンナは眉尻を下げた。地球での任務の経験から、また同じように失敗するのではないかと不安なのだ。「適任者が他にもいると思いますが……」
「確かに、そうした任務に適した者が他にもいるだろう。しかし、この交渉が実現可能となったのも、もともと君たちがきっかけだ。だから、君こそが適任だと私は思っている。引き受けてくれるかな？」
　月との交渉の実現は、彼女の願っていたことでもあり、それがこうして現実のものとなって、その場に居合わせることができるのだから、むしろ願ってもないことだろう。アンナは瞬時に答えた。
「わかりました。命に代えても、使命を全うしますことを、お約束いたします」
　ホセは深く頷き返す。
「無理はするな。命あってのものだねだからな。さて、出発は一週間後だ。それまで、充分に鋭気を養っておいてくれ」
　月へはシャトルで向かうことになるが、地球には適当なものがないので、月が用意したシャトルで向かうことになった。その日、シャトルが地表に降り立ち、月の案内人が降りてきて手を差し出すと、大使や随行員は誰もが困惑の表情を浮かべた。これまで、長く戦争を続けてきた敵同士なわけで、そうそう簡単に握手を交わすことなどできないのだ。とはいえ、ここで挨拶を無視するのは儀礼を失する行為であり、そんなことをすれば、月の人間から、どんなそしりを受けるかわからない。そこで、彼らはしぶしぶといった様子で、握手を交わした。それを、案内人は変わらぬ表情でこなしていたが、最後になって、アンナが笑みを浮かべて手を差し出すので、彼は驚いた顔で握り返した。
　数日をかけてシャトルは月面基地に到着し、一行はシャトルを降りて小さな車へと乗り込んだ。車は軽トラックに似た形をしていて、フロントガラスはプラスチック製で、屋根はなく、後部の荷台部分に三人がけの長椅子が二つ横に並んでいた。運転手が赤いボタンを押すと、車はわずかに身震いをして、モーター音を静かに響かせながら動き始めた。
　車はのろのろと、歩いた方が早いのではないかと思えるほどの速度で進んだ。月は地球の六分の一しか重力がないから、スピードを出して走っていると、ひょっとした弾みでどこかに飛んでいってしまう可能性がある。それはとても危険なことだから、一定の速度以上は出せないよう、リミッターがついている。そうすることで、不要な事故などが起きないように安全が図られているのだ。一方で、人間の場合はそこまでの心配は必要ないので、行き交う人々はふわりふわりと、スキップでもするように、歩くというよりは飛び跳ねて移動をする。一見すると楽しそうにも見えるため、大使や随行員、アンナまでもがそんな目で彼らを見ていたが、実はそこにこそ、問題があることを彼らは知らなかった。
　通路の左右には店舗や施設が様々に軒を並べているが、際だってトレーニング施設が多いことに気がつく。そこでアンナは案内人に尋ねた。
「あの、どうしてこんなに、トレーニング施設が多いんですか？」
「ああ、あれですか」案内人は振り向いて、アンナの視線を追ってから、前方へ目を戻して答えた。「月は地球に比べて重力が小さいんですよ。そのせいで、筋肉や骨が弱ってしまうんです

。地球と比べてそんなに力は必要ないですからね。だから定期的にトレーニングをして、維持するようにしているんです。知らなかったんですか？」
　医師として知ってはいたものの、通りすがる人々を見て楽しそうなどと、のんきに思ってしまった自分が恥ずかしい。バックミラー越しに案内人の視線が見つめているのに気がついて、アンナは思わず視線を逸らした。大使たちはひそひそと話していて、それを案内人は冷ややかに見ていた。
　更に進んでいくと、今度はプラカードを持った群集が、病院と思しき施設の前で、シュプレヒコールを上げているのが見えた。群集の圧力はハリケーンのようで、警官隊はそれを抑えるのに四苦八苦していた。
「薬やベッドの数が少なくてね」
　アンナが尋ねるより先に、案内人が群集を眺めつつ説明した。バックミラーの中の彼の表情には、憂鬱な色がありありと浮かんでいた。
「さっき、筋力が弱くなるって言ったでしょう？　それはなにも、目に見える部分だけに限った話じゃありません。心臓の筋肉、つまり、心筋にも当てはまります。月は重力の影響が少ないですから、血液を送り出す力が小さくて済みます。ですから、自然と心筋が弱くなって、心臓の病にかかりやすくなります。それを防ぐためには、定期的な運動が欠かせないのですが、同時に、薬を投与して、進行を遅らせる必要も出てきます。ところが、その薬が少ないんですよ。簡単には作れませんからね、この月面では。それと、症状の重い人は入院する必要がありますが、病院の数が少ないので、どうしても、入院できない人がでてきます」案内人は前方へ視線を戻した。
「実のところ、みんな、どうにもならないことはわかってます。でも、ああでもしないと気持ちが収まらないんですよ」
「なんとかできないんでしょうか……」
　案内人は振り向いて「あなたたちが、私たちが地球に帰るのを認めてくれれば、こんなことにはなっていなかったんですよ。なにを言ってるんですか」とやにわに怒りの視線を地球人たちに向けた。
　アンナは首を絞められでもしたかのような息苦しさを感じた。彼の言うとおり、彼らが地球に帰ることを認めてさえいれば、こうして月で起きる弊害の数々に悩まされることもなかっただろう。そうならなかったのは、地球が意固地になって、彼らの帰還を拒否していたためだ。今回、地球と月の間に交渉がもたれて、良い方向に結論が出れば、彼等も地球に降りることができ、この病からも解放されるだろう。その点は喜ばしいことと言える。ただ、その変なプライドのようなものをさっさと捨て去って、もっと早くに和平へと進むことができていればと、そう思うと、悔しさに彼女の心は張り裂けそうだった。
　カートは小さな広場を通り抜けて通路へと入った。そして少し奥へと進んだところで、その広場の方が急に騒がしくなって、何事かとアンナは振り向いた。すると、数名の警官が飛んでいくのが通路の先に見えた。
「今回の和平交渉を良く思っていない連中がいるんですよ」
　苦々しげな口調で案内人が言った。

「つまり、強硬的な考えを持っている人たちがいる、ということですか？」
「そうです。地球を許すな、徹底抗戦するべきだ、とね。レジスタンスの連中は、基地の方々でこんな風に騒動を起こしているんです。まったく、迷惑な話ですよ」
　やれやれと言った様子で案内人は首を振る。
　アンナはもう一度、広場の方を見やった。騒動は収まったのか、ざわざわとした声はもう聞こえない。和平こそが、双方が抱える諸問題を解消するための最善策だというのに、それがわからない人たちがいるなんて……。アンナは心の中でそう独りごちると、そこにレジスタンスがいるかのように、空間を睨みつけた。

　交渉が行われる日の前夜、ノックの音が聞こえて、アンナはドアを開いた。そこに現れた顔に、彼女は驚きつつ、笑みを浮かべた。
「久しぶりね」
「ああ、久しぶりだね」
　どことなく恥ずかしそうに神谷は答えた。
「入って」
　神谷は中へと進み、室内をぐるりと見回した。
「不自由はない？」
「ちっとも」アンナは椅子を二つ引き出して「掛けて」と着席を促し、自身も腰を下ろした。
「君が交渉団にいると聞いてね」椅子に腰を下ろしながら神谷は言った。
「護衛の任務を命じられているの。初めは断ったのだけれど、今度の件では、そのきっかけは私にあるからって。もっとも、私は失敗しちゃったけど」
　アンナは自嘲気味に笑う。
「俺も同じだよ」
　神谷ははにかんだ。
　アンナは怪訝そうに神谷を見つめたのち、驚いた顔つきになって「それじゃ、あなたも説得を？」
　神谷は恥ずかしそうに笑って頷く。
「そんなこと、一言も言ってなかったじゃない」アンナはすねたように言う。
「あのときはまだ考えがまとまっていなかったんだ。地球から戻るシャトルの中で、いろいろ考えて、それで決意を固めた」
　アンナは微笑んで、うん、と頷き「うれしいわ。あなたが味方になってくれて」
「どこまで力になれるかわからないよ。俺は交渉団には選ばれてないんだ」
「そうなの？」アンナはびっくりした顔で「あなたを交渉団に加えないなんて、どうかしてるわ」
「嫌われてるんだろう」神谷は苦笑を浮かべて、冗談交じりに言った。「でも、できうる限りの協力はするつもりだよ」

「ええ、充分に期待しているわ」
　アンナは皮肉混じりにそう言って、軽く笑った。
　神谷もふっと息を吐いて笑う。
　アンナはため息をつき「それにしても、信じられないわね」とやるせない表情を見せた。
「どうかしたのか？」
「納得していない人たちがいるみたい。レジスタンスが騒いでいるのを見たわ。和平交渉に反対してるって」
「確かに、反対を唱える人はいるね。けど、レジスタンスがってのは、初めて聞いたな」
「案内をしてくれた人が、そう言っていたわ」
　神谷は、合点がいかないという顔をしていたが、やがて「ともかく、交渉は実際に始まるわけだから、気にする必要はないさ」
「それもそうね」アンナは頷いて納得の笑みを見せた。そして、山の天気みたいに急に不安げな表情になって尋ねる。「家族は？」
「妹がいるよ。どうして？」
「来る途中で見てきたの」とシャトルを降りてから道々見てきたことを話した。
　神谷は全てを聞き終えると「それで心配してくれたわけか。でも大丈夫だよ。元気にしてるから。ありがとう」と感謝を述べた。
「うん」アンナは安堵すると共に恥ずかしそうに笑った。
　神谷は優しく微笑んで「君の方は？」
「母は元気よ。父は……空爆で亡くなったわ」
　神谷ははっとして「ごめん。そんなこととは知らなくて……」
「いいの、気にしないで。もう、ずっと昔のことだから……。今度のことは、父も喜んでくれていると思うわ。戦争の終結は、父も望んでいたことだから」
　うん、と神谷は頷き、ややのち思い出したように「それじゃ、そろそろ戻らないと……。仕事の途中で抜け出してきたんだ」
　彼は立ち上がった。
「わざわざありがとう」
　アンナも腰を上げた。
「それじゃ、また明日」
「うん。また明日」
　会議は三日間に渡って行われるが、その一日目の会議は午前中から始まって、間もなく夕刻を迎えようという頃になっても終わる気配はなかった。当然、簡単にはいくはずもないから、それなりに時間はかかるだろう。アンナは交渉団の警護で来ているだけなので、無論、会議への参加は認められず、故に状況が一切わからないために不安で仕方がなく、そうやって待つ間、アンナは室内を歩き回ったり、椅子から立ったり座ったりを何度も繰り返してた。そうして宵の口もだいぶ過ぎ、夜の静寂もとっぷりと深まってきた頃、突然、外がざわざわと騒がしくなった。アンナは、交渉団が帰ってきたのかと、はやる気持ちを足に乗せてドアへと向かおうとした。と、そ

のとき、ばたんと扉が勢い良く開いて、数人の男がなだれ込んできた。彼らは迷彩服を身に纏い、手に手にレーザー銃を握っている。
「なんです？」
　アンナは驚きと共に男たちを見回した。
「君にはスパイ容疑がかけられている」
　抑揚のない静かな声で、リーダーと思しき男が告げた。
「スパイ？　私が？」アンナは目を剥いた。「なにを言ってるんです？」
「言い訳はあとで聞こう。ともかく来てもらうぞ」
　男が二人、近づいてきて、そのうちの一人がアンナの腕を掴んだ。
「なにをするの！　やめて！」
　アンナは男の手を振りほどいた。
　するともう一人の男が、アンナの首根っこを背中の方から掴んで、部屋の隅の方へと押しやり体ごと壁にドンと叩きつけた。アンナはなんとか逃れようとしてもがいたが、男の膂力は強くそれも叶わない。そこに先ほどの男が駆け寄ってきて、アンナの両腕を背中の方に捻り上げ、棒きれでも扱うような粗雑さでガチャリと手錠をかけた。
「よし。連れて行け」リーダーが命じた。
　部屋に出たところで神谷の声がした。
「おい！　これはどういうことだ？」
　アンナは振り向いた。神谷は彼女のもとに歩み寄ろうとしたが、男たちに阻まれた。
「ご苦労だった。お前はもう、下がっていいぞ」
　リーダーが神谷に向かって言った。
「なに？」神谷の表情が、降り始めた雨がアスファルトを濡らすみたいにみるみると変わっていく。「なにを言ってる？」
　男は口の端に微かに笑みを浮かべた。そして振り返ると、あごで合図を送った。
　アンナは乱暴に引っ立てられ、どこかへと連れられていく。その途中で彼女は振り向いた。その目には、怒りと失望がありありと浮かんでいた。

「なぜです？　どうして彼女が逮捕されるんですか」
　神谷は机をこぶしで叩いて抗議した。彼の上官は、椅子にもたれてゆさゆさと体を揺らしながら冷めた眼差しで神谷を見上げていた。やがて、充分にリクライニングの心地よさを堪能すると、彼は口を開いた。
「彼らにはスパイの嫌疑がかけられている。逮捕したのはそのためだ」
「スパイ？　彼女が？　そんなはずはありません。なにかの間違いです」
「交渉団の面々が、不審な行動をとっているとの報告が、市民から複数、寄せられている」
「そんなこと、信じられません」
　上官は軽蔑的な目で神谷を見つめた。

「お前は、月人より地球人の言うことを信じるのか？」
「地球人とか月人とか、そんなものは関係ありません。彼らが信用に足るかどうかの話しです」
「では、市民は信用ならないと？」
「そんなことは……」
　上官は机に両肘を突き、顔の前で手を組んで、よく考えろという顔つきで「それ以上、仲間を侮辱するなら営倉へ入ってもらうぞ」
　神谷はぐっと奥歯を噛み締めた。アンナは不実の罪により捕らえられてしまった。そのような時に、自分までもが営倉になど入るわけにはいかない。
「失礼します！」
　彼は上官とは目を合わせずまっすぐ前を見据えたまま敬礼した。そしてくるっと向き直り退室した。

　牢番は投げ飛ばすようにして罪人を中に入れると、荒っぽい手つきで扉を閉め鍵を掛けた。罪人はドサリと力なく倒れ、浜に打ち上げられた鯨のように横たわってうずくまった。
「乱暴にしないで！　仮にも地球の代表なのよ！」
　アンナは駆け寄って屈み込み、牢番を見上げて叫んだ。
「代表だと？」牢番は目を怒らせる。「どの口が物を言う。この、スパイめが！」
「私たちはスパイなんかじゃないわ！　なにかの間違いよ！」
「なら、身の潔白を証明してみろ」
「私たちを解放して！　そうすれば潔白を証明できるわ」
「はっ！　できるわけないだろう」牢番は睨まえる。「お前たちは罪人で、法の下に処罰されるべき人間だ。いかなる理由があっても、罪は許されない」
「冤罪も許されるべきではないわ」アンナは威嚇するように睨み返す。「あなたたちにはそれが許されるというの？」
「冤罪ね」男は呆れ顔で鼻を鳴らす。「それはお前たちがスパイではなかった場合の話だろう。だが、お前たちの罪は確定している。いずれ処罰は下るだろう。それまでせいぜい、わめき続けているがいい」
　男はそう吐き捨てて牢屋に背を向けた。
「話はまだ終わってないわ！」アンナは去って行く牢番の背中に言葉を叩きつけた。だが、彼が振り向くことはなかった。「待ちなさい！　責任者に会わせなさい！」
　あらんかぎりにアンナは声を張り上げたが、その叫びは彼には届かなかった。ほどなく、遠くから、金属の擦れ合う音に続いて、どしゃん、と扉の閉まる音が聞こえた。やがて静寂が訪れて、罪人たちの息づかいだけが広がった。
　ううっと男が呻いて体を揺すった。アンナはそっと手を添えて、ゆっくりと体を回転させて仰向けにさせる。彼の片方の目は腫れ上がり、口元からは血が一筋流れ出ていた。どれほどひどい拷問を受けたのか、身動きもままならないほどに彼は疲弊していた。その彼の苦痛を思うと、ア

ンナは悔しくて、かみ切ってしまいそうなほどに、唇を強くかみ締めた。
　交渉団一行が逮捕されてから五日後、湖面を漂うクラゲのような人だかりが、広場の端から端をぎゅうぎゅうと埋め尽くしていた。その一角にはステージがあり、中央にギロチン台が設置してある。今はまだ演者の姿はないが、人々はその主役の登場を今や遅しと待っていた。
　まもなく、広場の後方より出演者が現れた。主役の登場に気付いた観客たちは、いちどきに好奇の目を向けて、これから始まる演劇に胸をはやらせた。その星の数ほどもある視線の中を、俳優たちは歩いていく。とぼとぼと舞台へと向かう囚人役の殆どは、憔悴した顔でうなだれていて、一方で、執行人役は胸を張り意気揚々とした様子だ。彼らは階段を上ってステージに上がり、囚人は断頭台の左に並び、執行人は舞台の端へと寄って、もう一人の役者の登場を待った。
　ほどなく、男が一人現れて、ステージへと登り、ギロチンを背にして立った。耳目が注がれる中、彼は仰々しく口を開いた。
「皆さん、今日は重大な事実を告げなければなりません」執行官役の男は、観衆を睥睨するように眺め、彼らが一心に耳を傾けているのを確かめて、それに満足を得ると続けた。「我々は、地球との戦争に終止符を打つべく、和平の提案を行い、昨日、地球との間に交渉が持たれました。我々はなんとかこの戦争を終わらせようと、必死の交渉を試みていました。しかしその最中に、地球側が、ある重大な裏切り行為を行っていたことが判明したのです。……それは……」男はここで、言い淀む様子を見せる。そして苦しげな顔で「彼らは我々の目を欺き、スパイ活動を行っていたのです」
　群集の反応は静かなもので、特段、変わった様子は見せていない。というのも、交渉団が逮捕されてのち、そのニュースが連日報道されていたから、取りたてて衝撃を生むようなことではなかったからだ。報道官役の男もそのことは重々承知していて、落ち着いた様子で観客を見渡していた。むしろ、彼の狙いは次から始まる口上にこそあった。
「我々は彼らを逮捕し、人権を尊重しつつ、人道的に尋問を行いました。彼らは自分たちのしたことをなかなか認めようとはしませんでしたが、我々の誠意ある説得の結果、彼らは自らの罪を認めました。そしてその中で、驚愕の事実が明らかになったのです」男は言葉を切り、恐怖に戦くように体を震わせて見せた。そして、いよいよとばかりに抑揚をあげて声を震わせながら「彼らは……彼らはこの月に、我々を、我々人類に対して、大量破壊兵器によって、攻撃をしようと計画していたのです」
　女性の引きつったような悲鳴が上がった。次いでどよめきが沸き起こり、それは瞬く間に津波となって広まった。男は引きつったようににやりと笑う。
　そのうねりを切り裂くように、囚人役の中から、女性の甲高い声が放たれた。
「そんなの嘘よ！　全部でっちあげだわ！」
　ざわめきが止んだ。観衆の全ての視線が女性に向けられる。
　執行官は振り向いた。
「アンナ・ローゼンベルグ。……知っているぞ。君が月へのスパイを命じられていたことを」
　スパイしようとしていたことは事実ではあったから、それを敢えて否定するするつもりはない。が、そんなことより、大量破壊兵器の使用など荒唐無稽だし、そもそもそんなものは持ってい

ない。だからそれを認めるわけにはいかなかった。
「大量破壊兵器の使用なんてあるわけがないわ。そんなもの、持ってすらいないのよ」
　男は笑った。
「そんな重要な秘密を、末端の兵士が知らされるわけがないだろう」あごで囚人の列の一角を指し示し、したり顔になって「いいか、全てそこの男が教えてくれたことなのだよ」
　アンナは振り向いた。大使の顔は腫れあがり、執行人に支えられなければ立っていられないほどにひどく衰弱していた。その様子から、拷問の末に耐え切れなくなって、ありもしないことを、さも本当のことであるかのように、証言させられたに違いない。彼女は前線で見たビデオの映像を思い出した。これのいったいどこが人道的と言えるのか……。アンナは振り返り、激しい怒りの目つきで男を睨みつけた。
　男は平然と、なに食わぬ顔で立っている。笑みさえ浮かべていた。それがアンナの怒りに火をつけた。彼女は男に飛びかかろうと足を踏み出そうとした。すると、どこからか、ゴルフボールほどの塊が放たれて、月面の低重力の中にありながらも、相当の勢いを持って、アンナの額にゴツンと当たった。彼女は痛みに顔をしかめつつ、礫の飛んできた方を睨めつけた。群集は怒りと、憎悪と、軽蔑の眼差しを向けていて、それは剣山の針の如くアンナに突き刺さった。彼女の中に沸き起こっていた怒りは風船がしぼむようにどんどんと萎縮していき、やがては人々の憤激が完全にそれを押しつぶした。アンナは力なく肩を下ろした。額の傷から、鮮血が一筋、流れ落ちた。
「殺せ！」観衆から声が上がった。
「首をはねろ！」別の声が怒鳴った。
　それらは方々から上がり、罵声は最大級のトルネードとなって広場を取り巻いた。風は吹き荒び、轟々と音を鳴らした。
　執行官はその喧々諤々たる嵐が人々の心をたっぷりと満たしたのを見て取ると、得意げな顔で高々と両腕を掲げた。瞬時に群集は鳴り止んだ。
「みなさん！　みなさんの要望に答えましょう。我々は、彼らをギロチンにかけることに決定しました。つまり、死刑です。今日は皆さんにその様子をごらんいただき、少しでも、溜飲を下げていただきたいと思います」
　歓声と拍手が沸き起こる。男はそれを全身に浴びて恍惚の表情を浮かべた。彼はしばらくそれを堪能し、満ち足りたところで執行人に合図を送った。
　執行人は待ってましたというように頷いて、囚人の一人を断頭台へと引っ張っていく。囚人は恐れ戦き悲鳴を上げて身をよじるが、両脇を抱えられては逃げることなどできようもない。あえなく頭を断頭台に固定され、彼はおいおいと嗚咽を漏らした。
「やーれっ！　やーれっ！　やーれっ！」観衆から掛け声が上がる。
　執行官は右手を上げた。歓声が止み、観衆は固唾をのんで執行官の右手に注目する。彼は観客たちを舐めるように眺め、待ち焦がれるようなその表情を確かめて、充分にためを作ってから、一気に右腕を振り落とした。シャアッという音を上げながら刃物が滑り落ち、ガコンと鳴って、切り離された頭部がぽとん、ごろごろと転がっていった。一瞬の静寂ののち、爆発するように観

衆の歓呼の声が木霊する。断頭台は血で真っ赤に染まり、首を失った胴体はだらりと横たわっていた。執行人は次の処刑のために刃を引き上げて、骸を引っ張っていきステージの外に放り投げてはまた別の囚人を引き連れて行く。そうやって、次から次へと刑は執行されていった。

　そしてとうとうアンナの番になった。もはやこれまでと覚悟を決めていたから、無駄に暴れるようなことはしなかった。が、その目に焼き付けろとでもいうように、彼女は斬首台の上から首を回して、眼光に目一杯の力をこめて執行官を睨みつけた。ところが彼は、そのことには気付いてなどいないかのように、無造作に右腕をさっと振り上げた。執行人は準備オーライとばかりにボタンに手を置いて、観衆は生唾を飲み込んでその瞬間を待ち構えた。重々しい空気はどっしりとアンナにのし掛かり、痛々しいくらいの静寂はちくりちくりと彼女を刺した。高々と掲げた指先は昇天しろとばかりにまっすぐ天を指差しているが、それが振り下ろされて地を向けば、彼女の行き先はそこではないのだと示される。男は薄笑いを浮かべた。執行のときは近い。

　執行官は腕の力を抜いた。あとは重力に任せて腕が自然と落ちるのを待つだけだ。上腕がゆっくりと下降を始め、指先が線を描くように落ちていく。

　その時だ。激しい振動と共に、広場の一角で大きな爆発音が轟いた。もうもうと煙が沸き上がり、天井を這うようにして広がっていく。観衆は時が止まったように身動き一つせず、その光景を唖然とした様子で眺めていた。やがて、彼らは状況が飲み込めてくると、悲鳴と怒号を上げて蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い始めた。執行人は舞台を降りて爆音のした方へと飛び跳ねていき、執行官はステージ上でその光景を呆然と眺めていた。そこへ、人の荒波を掻き分けて、男がやってきて舞台へと上がった。

「中尉！」執行官は驚きを見せ、目を見開いた。「こんなところでなにをしてる？　ここへ来ることは禁じられていたはずだぞ！」

「私は私の信念の赴くままに、行動するだけです」神谷はただそう答えて銃を向けた。

「貴様……」悔しさを滲ませながら、執行官は銃口を見据えた。

　銃が火を噴いた。レーザー光は的確に男を捕らえ、彼は体をひねるように回転させながらステージから転げ落ちた。

　神谷は斬首台に駆け寄ってアンナを助け出すと、手錠の鎖を銃で撃ってそれを断ち切った。アンナは様々な感情の入り交じる視線で神谷を見つめ、次に背後を振り向いて、突っ伏すようにして横たわる大使に目を向けた。彼女は立ち上がって彼に駆け寄り、抱え起こして呼びかけた。しかし、彼は既に事切れていて、返事を返すことも目を開けることもなかった。

「行こう。すぐに警察がやってくる。ここから逃げるんだ」

　神谷はアンナの腕を取って引っ張り起こし、混乱の中、右往左往する人々を押し退けながら、その合間を縫うようにして広場を立ち去った。

　二人は抱き合うようにして避難する人波に紛れ、通路をふわりふわりと跳ねていく。道々行き交う人とすれ違うが、誰もが逃避行するカップルには目もくれない。そうして二人は奥へ奥へと進み、とある部屋の前へとやってきた。神谷は通路を見渡して人のないことを確かめるとチャイムを鳴らした。暫くしてドアが開き、男が顔を出す。神谷はアンナを連れて中へと入り、男は周囲の様子を確かめてから首を引っ込めてドアを閉めた。

　部屋に入るなり、アンナはくるりと振り向き、怒りをその顔に浮かべて神谷をビンタした。右へ左へとそれは繰り返されて、大きな音が室内に響いた。
「お、おい！　なにやってるんだ！」
　男はジャンプするほどにもびっくりして、急ぎ駆け寄ると、アンナを背後から抱きかかえるようにして神谷から引き離した。
「放せ！」
　アンナはかな切り声を上げた。彼女は男の腕を振りほどこうとして身をよじらせた。
「いいんだ。放してやってくれ」
　神谷は腹をくくった顔で、そして、そうされることが当然だという表情で言った。彼の両頬は鬱血したみたいに、真っ赤に腫れ上がっていた。
　神谷の覚悟の込められた顔を見て、男はこくりと頷いてから、腕をほどいて後ろに数歩下がった。
　ビンタの嵐はすぐに再開されるだろうと思われた。しかし、そうはならなかった。アンナはかみ切ってしまいそうなほどに下唇を強く噛みしめ、涙をため込んだ瞳で神谷を叩くほどに見つめて、やがて近くのベッドにわあっと泣き崩れた。神谷はじんじんと脈打つ頬の痛みを感じながら、そこに立ち尽くした。

　報道によると、月政府は昨日の爆破事件を地球によるテロと断定し、現場から逃走した犯人一味の行方を追っているという。一味とはもちろん、アンナを差しているわけだが、彼女からしてみれば、身に覚えのないことで追われているわけで、ほとほと迷惑と言っていいだろう。ともかくも、テロリストが未だに逃走を続けているという事実は月の人々に恐怖を与え、テロを起こしたという現実は彼等の中に怒りと憎しみを呼び起こした。それは吹き荒ぶ嵐のように人々を揺り動かして、次第に、地球に対する怨嗟の言葉となって充ち満ちていき、やがて、鉄槌を下すべきとの声が月全体を覆い尽くした。そうした声の高まりを受け、月政府は、報復として、地球への総攻撃を決め、即日開始すると発表した。ニュースでは、総攻撃にかける意気込みなどを述べる兵士の姿や、シュプレヒコールを上げる市民の様子を伝えていた。
「なによ、それ！」
　きんきんと金属が鳴るような声を張り上げて、アンナは勢いよく立ち上がった。事件のあと二日ほどはふさぎごんでいたが、持ち前の勝気の強さでそれを乗り越えて、今では以前の彼女に戻っていた。
　部屋の主がテーブルに腰掛けて応じる。
「識者の中にはあのテロが本当に地球がやったことなのかどうかって、疑っているのがいるよ。総攻撃はやめるべきだと訴えるのもいるね。だけど、世の中はもう戦争ムードだ。つもりに積もったもんが爆発しちまったんだろうね。兵役に志願する輩も大勢いるよ」
　彼は少し硬くなったパンを口に放り込んだ。
　男がもぐもぐとやるのを眺めながら神谷が聞いた。「お前は行かないのか？」
「俺？」男はきょとんとして、次に鼻を鳴らした。「冗談じゃない。戦争なんか真っ平ごめんだね。頼まれたって断るよ」
「地球がテロを起こしたなんて、でっちあげよ」アンナはむっとする。「作り話もいいところだわ。いったい、誰があんなことをしたの？」
　説明を求める彼女の視線が男に向けられて、彼は視線をキョロキョロと彷徨わせた。その視線が、時折、神谷に向けられるのをアンナは鋭く見て取って「あなたがやったの？」と信じられないという顔で聞いた。
　神谷は叱られた子供がそうするように、うなだれて視線を逸らした。
　彼に代わって男が弁明する。
「あんたを助けたいって相談されてね。で、どうすればいいか考えて、今回の方法を思いついたんだ」
「被害が出てしまったのは予想外だった」神谷は唇をかみ締めた。
　言い訳がましく聞こえて「こうなることも予想外だったんでしょうね」とアンナは皮肉たっぷりに言った。そして、すとん、と腰を下ろすと、ニュース映像を視界の端に捕らえつつ、神谷に冷たい視線を向けながらパンを手に取った。
　男が助け船を出す。

「仕方なかったんだよ。あんたを助けるためには、ああするしかなかったんだ」
「だれかを犠牲にしてまで助かりたいとは思わないわ」アンナはパンの端と端を手でぎゅっと掴んで「おかげで、地球は報復を受けることになったのよ。全部、あなたたちのせいよ」と引きちぎり、怒らせた目で神谷と男を交互に見つめた。
　神谷は、返す言葉もないという様子で口を噤んだが、男の方は、なんともないという目でアンナを見遣り、そして訳知り顔で言った。
「テロがあろうとなかろうと、関係なかったと思うね」
「どうして？」アンナはパンを口で噛みちぎる。
「連中は総攻撃をする口実を探してた。穏健派を納得させられるだけの理由をね。で、地球が大量破壊兵器を持っていて、それで月を攻撃しようとしていると、いかにも本当のことのように聞こえるような話をでっちあげた。そうすれば、穏健派も首を横には振らないだろうと考えたんだ」
「そんなこと、簡単に信じるとは思えないわ」
「そう」男は頷いて「だからそこで、君たちの出番てわけさ」と楽しそうに顔をほころばせる。「攻撃の下準備として、スパイ活動をしていたと、ありもしない話を作り上げる。そしてそれを裏付けるために、大使が、大量破壊兵器の所持と使用を認めたとする。これだけ揃えば、穏健派も反対は言えないさ」
「そんなの、全部でっちあげよ！」
　男はにやりと笑った。「そうさ、でっちあげさ。けど、そんなことはどうでもいいんだ。事実と認めたという、事実があればね」
　アンナは口を噤んだ。唖然としているといった方が良い。男は続ける。
「さて、これで目論見どおり、月は地球への総攻撃の口実を得た。それは、さっきのニュースで見たとおりだ。まあ、テロが起きたのは想定外だったね。けど、市民の向いてる方向を合わせるには、都合が良かった。彼らの支持をどれだけ得られるか、それが重要だったわけだからね」男はパンにかじりついて引きちぎる。そしてもぐもぐとやりながら「おかげで、市民の賛同を得ることができた。これで気兼ねなく、総攻撃に突き進めるってわけだ」
　神谷は、突然沸き上がってきた胃痛に耐えようとするように、目をぎゅっとつむって顔をしかめた。よかれと思ってしたことが、結果的には裏目に出てしまったわけで、そのことが、強いストレスとなって彼を襲ったのだ。
　アンナはなおも抵抗を試みる。
「いくらそんな話を作り上げたって、地球が大量破壊兵器を持っていないのは真実よ」
「そんなことは関係ないんだよ」
「どうして！」いらいらとした様子でアンナは声を張り上げた。
　男は神谷を見遣った。彼は目をつむったまま顔をしかめている。が、その表情が一気に緩んで、彼は素早く目を開け、はっとした顔をした。
「まさか……地球に持ち込むつもりか？」
「そのとおり！」男は朗々と答え、人差し指を立てた。その様は、思惑通りに事が運んだことが

、うれしくてたまらないといった様子だ。「地球に元々あったことにしちまえば、総攻撃を正当化できるってわけだ」
　アンナは眉をひそめた。「そんなこと、どうやってできるというの？　そんなものを持ち込めば、地球だって気付かないはずないわ」
「月が総攻撃をするって言うんで、地球も今はてんやわんやだ。だからその混乱に乗じて、運び入れちまえば気付かれない。その上で、あとはそのことを明るみにしちまえばいいのさ」
「そんなこと！」アンナは怒りではち切れそうなほどに鼻を膨らませた。
　男は検分するようにアンナを見て、次に神谷を覗き込んだ。「で、どうする？」
「どうする？　……って、なにが？」アンナは首を傾げてきょとんと目を丸くした。神谷も同様だ。
　男は顔を近づけて、秘め事でも囁くように「それをとめたいとは思わないか？」
　神谷とアンナは互いに見合ってから、その意図を求める視線を男に向けた。男は続けた。
「地球へ行って、運び込もうとしているところを奪うんだ。そしてそれを地球の外に運び出せばいい。そうすれば、月も口実がなくなる」
　アンナははっとして目を見開いたが、すぐにそれが困難なものである事に気がついて「口で言うほど簡単にはいかないわ」と首を振る。
「なら、諦めるかい？」男は顔を上げ、背もたれに寄りかかる。
　アンナは頬の裏をぐっと噛みしめた。地球の未来がかかっているのだ。諦められるはずもない。
　神谷が疑問をぶつける。
「だが、奪おうにも、搬入ルートがわからなければどうしようもない」
　男はにこりと微笑んだ。「それは俺がなんとかしよう」
「なんとかしようって……できるのか？」神谷は訝しむ。
「できるさ。任せてくれ」男は胸を張った。「で、どうする？　やるかい？」
　アンナは横目に神谷を見遣り「彼と一緒にってこと？」
　男は首を傾げて「あんた一人でできるのかい？」
「それは……」アンナは返す言葉に窮し、目を伏せた。
「確かに、今回のことは月がやったことだけど、だからって彼に責任があるわけじゃない。それはあんたにもわかってるはずだ。それに、処刑されそうになってるところを助けたのは彼だ。彼がいなけりゃ、今頃あんたの首は胴体から転げ落ちてたぜ。だから感謝はしても、咎めることはできないはずだ」
　彼の言うとおりだ。アンナは目を上げた。
「決まりだな」男は満足げに微笑んだ。「それじゃ、手はずは俺に任せてくれ。あんたたちは、向こうに行ったあとのことでも考えておいてくれ」

　神谷とアンナは素性がばれないよう変装をして、男の案内で港へとやってきた。港といっても

海へ出るものではなく、宇宙空間へと漕ぎ出すためのものだ。だから宇宙港と呼ぶ方が正しいが、そもそも海のない月では区別する必要もないので、たんに港と呼んでいた。
　港では、テロリスト、つまりアンナの月外逃亡を阻止すべく、多数の兵士が警戒の目を向けていて、少しでも怪しい者がいればすぐさま駆けつけて、事細かく尋問を繰り返していた。このような状況の中、素顔をさらして進むのは捕まえてくれと言っているようなものだ。だから変装をしたわけだが、オーラのようなものが出ていたのか、残念ながら兵士は見逃してくれなかった。
「待て。どこに行く？」
　二名の兵士が行く手を遮った。彼らは銃を手に持ち、いつでも引き金を引けるよう準備していた。
「あそこのシャトルですよ。地球に行くんです」
　男は平然と答えた。
　兵士が男の肩口から神谷とアンナを覗き見る。二人は瞬時に反応し、あごを引いて、目深にかぶった帽子の中に隠れた。兵士はそこから覗く眼鏡や付け髭を、探るようにじっと見つめて、やがて視線を男に戻した。
「現在、地球への一般人の渡航は禁止されている」
「わかってますよ。こいつらは、兵隊の皆さんの慰安のために地球に行くんです」
「総攻撃が始まろうっていう、このタイミングでか？」
　兵士は疑いの眼差しを向けた。
　男はすまし顔で問い掛ける。
「地球に降りたことは？」
「俺か？　ないな」
「総攻撃なんて関係なく、今もあちらでは、皆さんのお仲間が戦ってます。その人たちにとっては、毎日が地獄なんですよ。こっちにいる人たちと違ってね」
「俺に喧嘩を売っているのか？」兵士は眉間に怒りを覗かせる。
「いえいえ、喧嘩を売るなんてとんでもない」男は大げさに手を振って否定した。「ただ、彼らは今でも戦っていますからね。この月のために……。そんな皆さんのことを思えば、慰安のためになにかをするのは当然の事ですよ。市民の義務としてね。ですから、総攻撃の最中だろうとなんだろうと、私たちは行かせていただきますよ。兵隊さんはどう思います？」
　兵士は思案を巡らせているのか、暫く黙りこくって、やがて言った。
「許可証は持ってるな？」
「ええ、もちろん」男は紙切れを一枚差し出す。
　兵士は紙面を舐めるように目を這わせてのち「芸人か」と許可証を差し返す。
「はい」
「なら、なにかやって見せろ」
　アンナの体がびくりと反応した。あまりにビックリしたために、兵士に気付かれていないかとハラハラしたが、それ以上に、本当にやることになったらどうしようかというのでビクビクとしていた。

「それは困ります」本当に困り顔で男は言った。
「どうしてだ？」
「こっちも商売ですからね。やって見せるにしても、ただってわけにはいきません。お金を払って頂けるのでしたら喜んでやらせていただきます。なお、うちのタレントになにかあったときは責任を取って……」
「ああ、もういい。さっさと行け！」兵士はめんどくさそうにそう言って、しっしと手を振った。
「それじゃ、どうも」男は愛想笑いを浮かべると、お辞儀をして兵士の横を通っていった。神谷とアンナはうつむき加減にあとを追う。
　兵士から充分に離れたところで、アンナがほっとした顔で言った。
「やって見せろなんていわれたときは、どうなるかと思ったわ」
「なんか一つくらいできるだろう？　猫の鳴き真似とか」男は意地悪く笑った。
「それ、芸と言えるの？」
「リアルに真似すりゃ、立派な芸さ」
　アンナはため息をついた。そして神谷に目を向けて「あなたはどうするつもりだったの？」
　神谷はなにも答えず、ただ、なんとも言えない顔でアンナを見返した。彼も芸と呼べるようなものを持っていないのは間違いないようだ。
　アンナは男に尋ねた。
「ところで、あなたはどうして、私たちに協力してくれるの？」
「金をもらえりゃなんでもやるよ。それが俺の仕事だからね」
「仕事って？」
「便利屋さ。あんたも、なにかあったら是非とも頼むよ。人殺し以外でね。ああ、さて、ついたぞ。これだ」
　シャトルには数日分の食料や銃器の類など、必要なものは全て積載されていた。あらかじめ男が用意していたもので、この厳重な警戒の中、どうやって運び入れたのか聞いてみたが、企業秘密だからと答えてはくれなかった。便利屋として、その辺りがセールスポイントの一つでもあるのだろうから、教えてくれないのも当然だろう。兎にも角にも、準備は万端というわけだ。
「それじゃ、俺が協力できるのはここまでだ。あとはあんたらでうまくやれよ」
　腰に手をやって、男が言った。
「ああ、ありがとう。世話になった」
　神谷が礼を述べる。
「ありがとう。いろいろと助かったわ」
　アンナが感謝を伝えた。
　男は笑みを浮かべると、グッドラックというように親指を立て、そして去っていった。
　ハッチが閉じて、二人は席に座ってシートベルトを締めた。神谷が飛行前の最終チェックを行う。
　その様子を眺めつつ、言いにくそうにアンナが言った。

「あの……ありがとう」
　神谷は作業に没頭していて気付いていないかのような振りをしていたが、やがて言った。
「どういたしまして」
　格納庫の扉が口を開け、それに合わせてシャトルはゆっくりと浮上を始めた。そして空間をすべるように動き出し、地球へと向けて飛んでいく。その様子を、男は待合室の窓からじっと見ていた。
　彼はシャトルの姿が豆粒ほどに小さくなると、携帯電話を取り出して電話をかけた。二回ほど呼び出し音が鳴って、相手が電話口に現れる。
「私だ」
「ああ、どうも」男は陽気な声を上げた。「予定通り、いま出発しましたよ」
「そうか」
「それで、報酬の件なんですがね」
　男は嫌らしい顔つきで言った。
「それは後ろの者に聞いてくれるかな？」
「へっ？」男は振り向いた。
　兵士が二人、立っていた。
「ああ、あんたはさっきの……。なかなかの演技でしたよ」男はにこりと微笑む。「あいつら、疑いすら持たなかったでしょう。あれでなかなか、鋭いところがありますからね」
　男はそう言って尚もにやついていたが、彼らの表情が役者のそれではなく、冷徹な兵士そのものの顔つきとなっていたために、彼は怪訝な表情で尋ねた。
「なんです？」
　兵士はレーザー銃を取り出した。
「いや、なにやってんですか」
　男の額に、演技ではない本物の汗が浮かんだ。
　兵士は銃口を向けた。
「ちょ、ちょっと待ってください。なんなんですか？　なんで俺が……。誰……」
　男が叫ぼうとしたそのとき、青白い閃光が発射され、眉間から頭蓋を貫いた。彼はどしゃんと倒れ、携帯電話が手から滑り落ちて床にゆっくりと着地した。
　兵士は携帯電話を拾って電話の向こうに言った。
「任務完了です」
「ご苦労。あとの処分は任せた」
「了解しました」
　電話は切れた。
　兵士は銃と携帯電話をポケットにねじ込んで、もう一人の兵士に指示した。その兵士が男の遺骸を肩に担ぎ、二人は歩いていく。周辺に民間人の姿はなく、迷彩服姿の兵士がちらほらと見える。誰もがこの三人の姿に異変を感じた様子はなく、皆いつものように任務をこなしていた。

　シャトルはフラダンスを踊るみたいに体を揺らしながら着陸した。エンジンが活動を停止し、巻き上がった土ぼこりが塵の雨となって降り注ぐ。数秒ほどの静寂ののち、ハッチが開いて神谷とアンナが現れた。二人とも迷彩服を着てバッグを背負い、小銃を手に握っている。

「それじゃ、行こうか」

　神谷がアンナの横顔に言った。彼女は頷いて、二人はシャトルを降りた。

　森には微風が漂い、その風が焦げたような匂いを微かに運び込んでいた。近くで戦闘があったのかもしれない。彼らは辺りを見回してから、アンナが警戒を続けている間に、神谷はバックから地図を取り出して行き先を確かめた。

「あっちだ」

　神谷は地図をしまってその方向を指差す。そして歩き出そうとした。

　そのときだ。木陰から男たちがぞろぞろと現れて、二人の行く手に立ちふさがった。汚れた軍服や酷使された銃器の様子から、先ほど感じた、風に混じった匂いの原因は彼らにあるのだと、二人は即座に理解した。

「お前ら月人だな」リーダーと見られる男が言った。「銃を捨てろ！」

「待って。私たちは地球人よ。見ればわかるでしょう？」アンナは言った。

　月人と地球人の違いは、人種としての相違と同じく差異はない。それを見分けようとするのは、空気の中から、漂う塵を見つけるよりも遙かに難しい。

「だったらなぜ、月のシャトルに乗ってる？」

「それは……逃げてきたのよ。知ってるでしょう？　月で起きた爆破事件のこと」

　兵士は目を細めてアンナを見つめ、そうやって暫く考え込み、合点を得ると言った。

「なるほど、どうりで見た顔だと思った」彼は銃を構えた。部下がそれに従う。「一緒に来てもらおう」

　アンナはしくじったと思ったが、そのことは顔には出さず、代わりに「どうする気？」と渋面を覗かせて尋ねた。

「上に引き渡す。あんたの話を聞きたがっているだろう」

「いまはそんな時間はないの。私にはやるべきことがあるのよ。それが終わったあとなら、いつでも出頭するわ。だから道を空けて」

「やるべきこととはなんだ」

「それは、言えないわ。だけど信じて。そうすることが、地球と月のためなのよ」

「地球と月のため？　なにを言ってる？」戦争中の彼等からすれば、当然の反応かもしれない。兵士は眉根を寄せ、暫く考えを巡らせてから、やがて険しい表情を浮かべて言った。「お前、またなにかやらかすつもりなのか？」彼は銃を構え直す。「なら、このまま行かせるわけにはいかない」

　これ以上はなにを言っても無駄だろう。神谷とアンナは互いの顔を見合って、どうしたものかと渋面を深くした。

　そうして、暫く沈黙のやりとりが続いて、互いに痺れを切らそうかというそのとき、どこからか、ひゅうっという口笛に似た甲高い音が聞こえてきた。怪訝な様子の神谷とは裏腹に、アンナと兵士たちは皆、ぎくりとしたように空を見上げた。音は幾重にも重なるように続いて、やがて、その音が途絶えると同時に爆音が直ぐそばで轟き、地面が揺れ、土片が飛び散って、ばらばらと降り注いだ。兵士たちは散り散りになって逃げ惑い、アンナはとっさに神谷の手を取ると、轟く爆音と降り注ぐ土塊の中、彼の手を引いて走り出した。そして爆撃のエリアから充分に離れたところで、二人は立ち止まって振り向いた。陥没した地面と、炎に包まれたシャトルが見える。周辺には兵士の姿も見当たらず、あとを追ってくる様子もない。
「行きましょう」
　燃え盛る炎をぼうっと見つめながら、アンナが言った。
　神谷は静かに頷いて、二人は歩き始めた。
　神谷とアンナは誰も住まなくなって久しい寂れた村落にいた。家々の壁はトムとジェリーに出てくるチーズみたいに穴ぼこだらけで、屋根は支えを失って崩れ落ち、あばた面の村道はあちこちに泥水の池を作っている。二人は家屋の影に身を隠し、隊列がやってくるのを待っていた。男の情報によれば、ここを大量破壊兵器を積んだトラックが通るらしい。その隊列を襲撃し、トラックを奪うというのがその計画だ。たった二人でそれをやるのはなんとも無謀な話だが、兎にも角にも、やるしかない。
　数分後、村の入り口の向こうに隊列が見えた。トラックの前後を、二台のジープがそれぞれ前衛、後衛と言った感じで連なってゆっくりと走ってくる。ジープにはそれぞれ四人、トラックには二名が乗っている。隊列は村落の手前で停止すると、先頭のジープから兵士が一人降りてきて、視線と銃口を注意深く巡らしながら、忍者のような足取りで村落に入ってきた。こういった場所で待ち伏せをするのは、敵を迎え撃つ際の常套手段だ。だからそれを警戒しての偵察なのだ。神谷とアンナは物陰から顔を覗かせて、兵士が通り過ぎるのを待った。彼の歩みは薄氷の上を歩く如きで、耳を澄ましていると、その足音さえ聞こえてきそうなほどに慎重だ。そうして兵士の動きを目で追っていると、不思議と彼の呼吸と神谷の息づかいがシンクロしてくる。そのことに不可思議ななにかを感じたのか、兵士の視線が吸い寄せられるように神谷に向けられた。彼はびっくりして、亀がそうする時と同じように首を引っ込めた。少しして、神谷は物陰かそっと目だけを覗かせて、そっと様子を確かめた。兵士は二人には気付いた様子もなく、銃を振り視線を這わせながら通り過ぎていく。神谷は静かに息を吐き出した。兵士はそのまま道を進み、村落の出口まで行くと、小型の無線機で仲間に連絡する。隊列はのろのろと動き出し、でこぼこ道に体を左右に揺らしながら二人の前を過ぎていく。神谷が振り向いて首肯する。アンナはコクリと首を折り、銃を手に構えた。
　隊列は偵察の兵士を乗せるため、村の出口の少し手前で停止した。それを合図に神谷は物陰を飛び出して、道を挟んだ向かいの建物へと走った。人影に気付いた兵士が慌てて銃を向けるが、援護射撃の銃弾がすぐ横を掠めて、彼ははっとして身構えると、瞬間的に翻ってトラックの車体の影に逃げ込んだ。異変を察知した彼の仲間が車を飛び降りてそれに続く。
　神谷は建物に潜り込み、壁に背を預けて、窓から外の様子を窺った。兵士たちはうまいこと隠

れているようで、その姿を見て取ることはできない。アンナの方に目を向けると、彼女は建物の影から兵士の様子を窺っていた。その彼女の視線が向けられて、神谷はもう一度、兵士たちの動きを探ってから、良しと頷いた。アンナは頷き返すと、手榴弾を前列のジープへ向かって投げた。それは座席にぽとりと落ちて、刹那、爆音と共に破裂して、ジープは火を上げ黒煙を立ち上らせた。彼女は続けざまに銃を乱射し、神谷がそれに呼応する。敵の攻撃に兵士たちも必死に応戦するが、挟み撃ちにあってはにべもない。彼等は銃撃の僅かな隙を見つけると、車の影から飛び出して建物へと逃げ込んだ。神谷はそれを確かめて、兵士たちが逃げこんだ建物へと向かって手榴弾を投げた。爆弾は建物の一メートルほど手前に落ちて数秒後に破裂し、青白い煙と共に土塊を吹き上げた。兵士たちは爆発から身を守ろうと、建物の中で頭を抱え背を丸めた。神谷とアンナは爆発と同時に飛び出して、降り注ぐ土砂の中を一直線にトラックへと走り乗り込んだ。ギヤをローに入れ、アクセルをめいっぱいに踏み込む。ぶるんと体を震わせて、エンジンはマフラーから黒い息を吐き出して、唸るようにピストンが回転を始めた。トラックは急発進し、燃え盛るジープの脇を抜けて更に加速を加え、猛然と道を走り去っていく。やがて辺りが静かになると、兵士たちはぞろぞろと建物から出てきた。彼らの眼前には惨状が広がっているが、いずれの顔にも悲壮の色は浮かんでいない。
「被害は？」隊長が聞いた。
「一人、やられました。ですが軽傷です」部下が答えた。
　隊長は頷いた。「無線は使えるか？　チェックしろ」
　兵士の一人が残されたジープの方へと走っていく。ややのち「無事です。使えます」
　隊長はジープに歩み寄り、マイクを手に取る。
「本部、こちらドンキー。応答願います」
　シャーという音ののち、声が答える。隊長は続けた。
「作戦は成功です。すべて予定通りです」相手の言葉に耳を傾け「了解しました。これより帰還します」
　隊長はマイクを置いて、トラックの去っていった方に目を向けた。既にその姿はなかった。彼はジープに乗り込んだ。「よし。帰るぞ」
　隊長と怪我人を乗せたジープは来た道を戻っていく。そのうしろを、残りの兵士が追いかけていった。
　トラックは猛スピードで道路を走り、十分に村落から離れたところで速度を落とした。静かな車内にエンジン音だけが聞こえている。
　アンナはドアミラーから後ろの様子を窺った。追っ手の姿はない。
「これからどうするの？」
「本当なら、シャトルで運び出す予定だったけど、あんなことになってしまったからね。なんとか方法を考えないと……」
　神谷は難しい顔つきで唇を噛んだ。
　アンナはそんな神谷の横顔を見て、そして後ろの小窓から荷台の中を覗き込んだ。重々しく異様な存在感を放つ丸々と太ったそれは、トドみたいにごろんと横たわっている。それを眺めつつ

、彼女は思案し、ほどなく言った。
「協力を求めてはどうかしら？」
「協力？　どこに？」
「地球にも、月との戦争を望まない人たちがいるわ。彼らに力を借りるのよ」
「信用できるのか？」
「私以上に」
　神谷は思わず吹き出した。
「わかった。信じよう。そこの無線は使える？」
「やってみるわ」
　アンナは手を伸ばしてマイクを取る。
　周波数を合わせて呼びかけること数回、野太い声がそれに答えた。彼女は電波の向こうの相手と長々と話し、用件が済むと無線を切った。
　アンナはマイクをおいて「オーケーよ」とバッグから地図を取り出して指差した。「今はここね」そして道路を指でなぞってある場所で停止した。「ここに来て欲しいって」
　神谷はその軌跡を目で追って「了解」とアクセルを吹かした。
　指定された場所は奥深い山の中にあった。道の左右には背の高い針葉樹が雲を突き破らんばかりに聳えていて、その隙間から僅かにしか陽光が差し込まないため、じめっとしていて湿度が高く薄暗い。好き好んで人が近づくような所には見えないから、このような場所なら、秘密の施設を隠すにはもってこいだろう。
　更に進んでいくと、その先の路肩に車が二台とまっていた。いずれも軍用車で、その一台から兵士が一人、降りてきて、道路の中ほどに立つと、とまれというように頭の上で両手を振った。
「なんだ？」神谷が警戒の声を上げる。
「まって！」アンナが鋭く言った。「仲間よ。大丈夫。車をとめて」
　神谷は兵士の数メートル手前でトラックをとめた。
　兵士は助手席の方へと歩いていき、アンナが窓を開けると「アンナ・ローゼンベルグ少尉ですね？」
「ええ」
「ここから先は我々が先導します」
「了解。よろしくたのむわ」
　隊列はカルガモの行進みたいに道路を進み、やがて巨人の如くそそり立つ岩壁の麓へとやってきた。その岩盤にはアーチ型のトンネルがあり、重厚そうな鉄製の扉ががっちりと口を噛みしめて行く手を阻んでいた。隊列はその扉の少し前で停止した。しばらくして、ガコンと音がして、キーキーと癇癪持ちの悲鳴のような音を鳴らしながら、扉が左右に開き始めた。
「入れ」
　トラックが通れるほどに扉が開くと、スピーカーから声がした。
　隊列はトンネルへと入っていく。背後で扉が重そうに口を閉じ、彼らはオレンジ色の照明灯の中を、ゆっくりと奥へと走っていった。

数分後、隊列はドーム型の屋根を持つ広場へとやってきた。奥へと通じる通路が八方向に伸びている。広場の中心付近に兵士がずらりと並んでいて、車列はその手前で停止した。先導車から兵士が降りて、トラックの方へと駆けてきて、助手席のドアを開けた。
「どうぞ。降りてください」
神谷とアンナは車を降りた。すると、数名の兵士が駆け足でやってきて、神谷をぐるりと取り囲み、身動きしたら撃つぞばかりに銃口を向けた。神谷は、意図を計りかねた顔で彼らを見回したのち、ゆっくりと両手を上げて恭順を示した。
「どういうこと？」
アンナが抗議した。そして駆け寄ろうとするのを兵士が腕を掴んで阻止する。アンナは振り向いて兵士を睨んだが、彼は顔色一つ変えず、まっすぐ前を見据えている。
指揮官とおぼしき男の声が言った。
「彼は月政府のスパイだ。よって身柄を拘束する」
アンナは声の方へと目を向けて「身柄を拘束？　誰の命令です」
「聞くまでもないだろう」
アンナは怒りが鎌首をもたげるのを感じたが、なんとかそれを押さえ込んで静かに言った。
「今はそんなことを言っている場合ではないんです」
「今は戦争中なんだよ。少尉」
「彼は、その戦争をとめるために来たんです。解放してください」
「そうだ。戦争を終わらせるために必要なのだ。それがな」
男はトラックの荷台をあごで指し示した。
アンナの目が、傷口が開くみたいにぱっくりと見開かれた。彼女の顔には愕然とした色が塗りたくったように広がっていく。
「正気か？」
怪異でも見たかのような目で神谷が言った。
男は軽やかに笑う。
「お前たちのシナリオにのってやろうというだけのことだ。なんの問題もないだろう」
「ばかな！　そんなことをすればどうなるか、わかっているのか！」
神谷は怒気を発しそれを言葉に乗せた。そして男に詰め寄ろうと足を踏み出した。が、兵士が銃口で彼の肩口を突いて押し留め、じっとしてろというように強く押しやった。彼は弾みでトラックのドアにぶつかり、ドンという音が響いた。
「仕掛けてきたのは貴君らだろう？　ありもしないことをでっち上げ、あろうことかそれを理由に総攻撃を始めようというのだ。罰を受けるのは自業自得というものだ」
「それを言うなら、そもそもは地球が始めた戦争でしょう？　人のことを言えるの？」
アンナの甲高い声が木霊する。
「少尉。どちらが始めたのかなど、もはやどうでもいいんだよ」男は鼻で笑う。「ただ、始まったものは終わらせなければならない。そうだろう？」
「だからってそんなやり方、許されるはずありません！」

「なら、月のやり方は許せるのか？」と男は凄みを利かせる。
「いいえ、でも、それは……」
　もちろん、月のやろうとしていることを許せるはずもない。わかっていたから、言い返す事ができなかった。
「さて、君には部屋を用意しよう。しばらくそこで大人しくしていてもらう。そっちのお前は、無論、言うまでもないな？」
　男は不敵に笑った。

　月のテレビ局のニュースによれば、テロリストの供述通り、大量破壊兵器が地球に存在することが発見され、その行使に向けて着々と準備が進められているという。その証拠として示されたのが、大量破壊兵器を載せたトラックが、秘密の地下施設に入っていく様子を撮影した映像だ。それはまさに、神谷とアンナが、トラックでこの施設へと入っていく瞬間を映したもので、近くの森の木陰から撮影されたものらしい。月のテレビ局が、どうやってここに大量破壊兵器が運び込まれることを知ったのかは不明だが、ともかく、この報道は月社会では衝撃を持って迎えられ、罵りや怒りの声の広がりと共に、制裁へと向けた気運が一気に高まっていくこととなった。月政府はそれを受け、地球への総攻撃が正当なものであることを改めて主張し、地球政府を打倒して、故郷を月人の手に取り戻すと宣言した。アンナたちが行った行為は、総攻撃を防ごうとして行ったことではあったが、大量破壊兵器を地球の施設に運び入れてしまったことによって、むしろ、月にその口実を与えてしまった。そのことは、もはや総攻撃が不可避であり、この戦争が更なる深みへと落ちていくことを如実に示していた。
　総攻撃の宣誓がなされたあとの月の動きは早かった。攻撃は即時開始され、無数の軍船が鯨のように空を浮遊して、膨らんだお腹から鉄の塊を次々と産み落とした。それは地表に深々と穴を開け、祭囃子の太鼓みたいな爆音を方々で響かせた。総攻撃というだけあって、まさしく雨あられの如しで、空からその様を眺めれば、豪雨の日の雨粒が水たまりに作る様子にも似て見えただろう。攻撃は見事というくらいに徹底していて、地上に生きるありとあらゆるものを、消してしまおうとしているかのようだった。
　総攻撃が始まって以降、アンナはテレビをつけもせず、社会との接触を拒否する引きこもりみたいに、部屋の隅で丸まっていた。テレビをつければ嫌でも戦況が耳に入ってきて、弱りきった心を侵略し、やがては食い破ってしまうだろう。それが怖かったから、彼女は世間から目を背け、耳を閉ざしていた。この事態を引き起こすそのきっかけを作ってしまったという自責の念が、彼女を引きちぎろうと、或いは押しつぶそうとして、辺獄を彷徨う魂の如く苦しめているのだ。
　そうして無為に日々が過ぎ去ったとある日のこと、外で言い争うような声が聞こえたかと思うと、突然、扉が開いて、男が三人ずかずかと入ってきた。みな地球の軍服を身に着けていて、うち二人は、外で警備をしていた兵士を引きずって中に入れ、外に出て行って扉の両側に並んでドアを閉めた。残りの一人はそのまま室内に留まって、アンナの姿を見つけると、笑みを浮かべて近づいてきた。彼女は不安感と不信感から怖くなり、立ち上がるとじりじりと後退した。
　男ははっとして歩みをとめ、片手を挙げて「待ってくれ。怪しい者じゃない、と言っても信じてくれないかもしれないが。……俺は、イブラヒム局長の使いで来た」
　アンナは立ち止まる。「どういうこと？」
「ゆっくり説明している時間はない。とりあえず、こいつに着替えてくれ」
　男は軍服をベッドの上に投げた。
　アンナはそれを手にとって、広げたところで男に目を向けた。
　男は怪訝な様子でアンナを見つめ返していたが、やがて見られている理由に気がついて「これ

は失礼」と後ろを向いた。
　ほどなく「終わったわ」とアンナは言った。
　男は振り返って「君をここから連れ出す。一緒に来てくれ」男はドアへと向かって歩きだす。
　その背に向かって「待って！　彼も助けて！」
　男は振り返り「わかってる。始めからそのつもりだ。さあ、急いで！」
　アンナは駆け出して男のあとを追う。そして二人は部屋を飛び出した。
　やがて、彼らはエレベーターの前へとやってきた。
「彼は地下の倉庫に閉じ込められてる」
　男はボタンを押しながら言った。
「ひどい扱いは受けていないの？」
　アンナは眉尻を下げた。
「そこまではわからない。ただ、そこにいるということだけはわかっている」
　エレベーターのドアが開いて、兵士が二人降りてきた。アンナは思わずびくりとしたが、男が平気な顔で敬礼をするので、それに習って少しうつむき加減で敬礼した。二人の兵士はそれぞれ敬礼を返す。その中の一人がアンナの様子に感心を寄せたようだが、それ以上は気になったところはないらしく、彼らはそのまま去っていった。
　二人はエレベータに乗り込み、行き先のボタンを押した。ドアがゆっくりと閉まり下降を始める。アンナはため息をついた。
　男は笑みを浮かべて「着替えておいて正解だったろう？」
「ええ、そうね。でも、私のこと見てたわ。気付いたかしら」
「女の兵士が珍しかったんだろう。いろんな意味で」
　アンナはかつて、前線で体験したことを思い出した。するとだんだんと腹が立ってきて、もし今度、同じようなことがあったら絶対に、一発殴ってやろうと決意した。
「あなた、局長の部下の人？」
「まあ、そんなところだな」
「どうして私を？」
「まだやれることがあるだろう、という判断のようだ」
「まだやれること……」アンナはその言葉を心の中で反芻して答えを探ってみた。しかし、結局、そのゴールに至ることはなかった。彼女は首を振って「そうは思えないわ。……あなたもニュースは見たでしょう？　あれを止めるのは無理よ」
「諦めるのか？」
　男は振り向いた。その目には軽蔑さえこもっているように彼女は感じた。アンナはきゅっと唇を噛み締めた。
　エレベーターが速度を落とし、やがて停止してドアが開いた。同時に、自動的に照明が点灯して通路を明るく照らして、数メートルほど前方に、黄緑色の重そうな扉が浮かびあがった。
「ここに？」扉の前までやってくると、怪訝そうにアンナが聞いた。
「ああ」男がポケットから鍵を取り出した。「ここはあくまで研究施設だからな。牢屋みたいな

のはないんだ」
　ロックを解除し、ドアを開けて照明のスイッチを入れた。二回ほど瞬いて、蛍光灯が室内を明るく映しだす。倉庫内にはスチール製の棚がずらりと並んでいて、嵐が過ぎ去った跡のように荷物が散乱していた。おそらくは、なんとかして脱出しようとして、その手助けになるようなものはないかと捜し回ったが、結局はなにも見つからず、その怒りをそれらの荷物にぶつけたのだろう。彼の失望の大きさが手に取るようにわかる。
　倉庫はそこそこに広く、ぐるりと辺りを見渡してみたが、どこにも神谷の姿は見当たらない。男はアンナにその場に留まるよう指示して足を踏み入れた。彼は左右に目を配りつつ、足元に転がる荷物に注意を向けながらゆっくりと進んだ。そして五メートルほども中に入ったところで、右手の方から人影が現れて、男に向かって棒を振り下ろした。彼は瞬時にその攻撃に気がついて、飛ぶように身を引いてそれをかわした。人影は攻撃が失敗すると、今度は横様に棒を振り払った。男はかがむようにしてそれを回避すると、そのまま人影に組み付いて、そこからは、のこったのこったと、相撲取りみたいに取組が繰り広げられた。
　ほどなく「待って！」とアンナの声が戦いに割って入った。「二人ともそこまでよ」
　人影が振り向いた。彼はその声の主をしばし眺めて「アンナ？　君か？」とびっくりした顔で言った。そして男に視線を戻して「……彼は？」
「まずはそれを下ろしたらどう？」
　神谷ははっとした顔で棒を投げ捨てて釈明した。「すまない。イライラがたまってたんだ」
「だろうな」男は顔を上げ苦笑いを浮かべて、呼吸を整えてから「古橋だ」と手を差し出した。神谷がその手を握り返す。古橋は続けた。「俺は君たちを助け出すよう命じられてる」
「命じられてる？　誰に？」
「イブラヒム局長。経済社会理事局の局長だ」
「アンナが連絡した相手か？」
「ええ、そう」アンナは頷いた。「まだできることがあるだろうって」
「それが、どうしてこんなことになった？」彼は表情を硬く、険しくした。「ここに運べと言ったのは彼なんだぞ」
「先手を打たれたんだ」古橋は悔しさを覗かせる。
「先手？」
「和平を望まない連中がいるってことさ」
「本当にごめんなさい」アンナは表情を曇らせた。「こんなことになるとわかってたら、ここにはこなかったのに……」
「君のせいじゃない」神谷は励ました。「物事には防ぎようのないこともある。だから気にする必要はないさ。……それで、状況は？　どうなってる？」
　アンナは渋い顔になり、ニュースで見たことを話した。
　神谷は話を聞き終えると、苦瓜を口いっぱいに頬張ったかのような顔で「まんまとはめられたってわけか」と、その苦さを吐き出した。
「それが目的だったんだろう。画があるのとないのとじゃ、説得力が違うからな」

　神谷は盛大に舌打ちをして「腹が立つな」
「でも、どうすればいいの？」アンナは憂慮を覗かせる「総攻撃はもう始まってしまったわ」
　神谷は視線をぐるりと彷徨わせて、やがて尋ねた。「大量破壊兵器が今どこにあるかわかるか？」
　古橋は難しい顔をして「奪い返すつもりか？」
「それが当初の目的だからな」
「保管場所は厳重に警備されてる。蟻の這い出る隙間もないくらいにな。そこから奪い返すのは困難だろう。不可能と言って良いかもしれない。……別の手段を考えた方が良さそうだな」
　神谷は眉尻を下げた。彼は暫く考えを巡らせたのち「となると、直接、月に乗り込むしかないな」
「乗り込む？」アンナがその意図を確かめる。
「総攻撃をやめさせる。そうすれば、地球も大量破壊兵器を使う理由を失うだろう。それしか方法はない」
「簡単にはいかないわ」
「なにをするにしたって、簡単にいくことなんてないさ」
「でも、もし間に合わなかったら……」
「その心配はこっちに任せてもらおうか」古橋が名乗り出た。「この事態を引き起こしてしまったのはこちらにも非がある。必ず阻止して見せよう」
　神谷は頷いた。「話は決まったな。それじゃ早速、といきたいが……どうやってここから出る？」
「出口までは俺が案内する」古橋が言った。彼はポケットからメモを取り出して差し出す。「月へ戻るにはシャトルが必要だろう。ここを出たらそのメモのところへ行ってくれ。話は通してある」
「手回しがいいな」
「こういうときは、必要と思われる手は先に打っておくことが、肝心さ」と古橋はどや顔になる。
「わかった」
　神谷は苦笑しつつ頷いて、メモをポケットに捻じ込んだ。
　古橋は腕時計に目をやって「さて、そろそろだな」
　その刹那、耳を塞ぎたくなるほどのけたたましい音が警報装置から鳴り響いた。神谷とアンナはびくりと驚いてきょろきょろと辺りを見回す。
「時間ぴったりだ」
　古橋が満足そうに呟いた。
「あんたがやったのか？」
　神谷が聞いた。
「ここの連中が、どうぞお通り下さいなんて、優しいことを言ってくれると思うかい？」古橋はニタリと笑う。「さて、行こうか。ぐずぐずしている暇はないぞ」

　通路は行き交う人々で溢れ返り、警報の音と、ざわざわと騒々しい声で満たされていた。三人はその中を急ぎ足で通り抜け、広場へとやってくると、そこに停めてあったジープに乗り込み出口へ車を走らせた。

　古橋は出口に着くとジープを降りて、扉の開閉パネルのボタンを押した。そして戻ってきて「あとはうまくやれよ」とエールを送った。

「ありがとう。恩に着るよ」神谷が言った。

「またあとで会いましょう」アンナが言った。

　古橋は笑みを返し、ボンネットをぽんぽんと叩いて後ろに下がる。

　神谷はアクセルを踏み込んだ。ジープはうなり声を上げて急発進し、トンネルを飛び出して猛然と走り去った。

　一時間ほど走ったところで、道路から少し離れたところに、トレーラーが一台とまっているのが見えた。四輪ともタイヤはなく、車体は根を張ったようにしっかりと腰を下ろしている。その様子は、走るのに疲れて、この地に骨を埋める覚悟だ、とでも言っているかのようだ。トレーラーから数メートル離れたところに、ビーチパラソルと丸いテーブルがあって、男が一人、腰掛けてなにかの雑誌を読んでいた。神谷は速度を落として、ビーチパラソルの少し手前でジープをとめた。
　車を降りて男の方へと歩いていき「ハンさん？」と神谷が確かめた。
「ああ」ハンは雑誌を閉じてテーブルに置いた。黒いレンズの向こうで目が探るように動いて「神谷ってのはあんた？」
「ええ、そうです」
　次いで視線は横に向けられる。「そっちがアンナ？」
「ええ」
「話は聞いてる。早かったな」
「のんびりしてる暇はありませんからね」
　神谷が答えた。
「違いねえ」ハンは愉快そうに笑った。「シャトルが入り用だったな」
「ええ」
　ハンは立ち上がり、歩いていってジープの荷台に飛び乗った。神谷とアンナが怪訝そうにしているのをよそに「さあ、ドライブしようじゃないか」と出かけるのが待ち遠しくて仕方がないといった表情で、馬に鞭を入れるように、ジープのボディを叩いた。
　神谷とアンナは苦笑いを浮かべてジープに乗り込み、再び走らせた。
　ハンの道案内を得て進み、途中で道路を逸れてでこぼこ道へと入り、更に奥へと走っていくと、突き当たりに、今にも朽ちて崩れてしまいそうな木造の建築物があった。あまりにもぼろぼろな外観であったため、元がなんの建物であったかは見当もつかない。神谷は車をとめた。
「こっちだ」ハンは飛び降りて言った。
　神谷とアンナはハンのあとについていき、歯抜けとなった板壁の隙間をくぐって中へと入った。屋根は完全に抜け落ちて、元の所有者の物と思われる品々が、綿雪のような埃を被って鎮座し、新たに住人となった蜘蛛たちが、大きな糸の住処で餌が罠に掛かるのを待っていた。そしてその建物の真ん中に、大きなグレーのシートで覆われた物体があった。
「手伝ってくれ」ハンが言った。
　シートを剥がすと埃がもうもうと煙となって舞い上がり、その中からシャトルがぬうっと姿を現した。シャトルは旧式で、老年のような見た目ではあったが、まだまだ現役だぞといわんばかりにでんと身構えていた。
「確認してくれ。しばらく火を入れてない」
　神谷がシャトルに乗り込んで点検を始めた。その間、アンナはハンと共にその様子を眺めて

いた。
　しばらくしてアンナが尋ねた。
「これ、どうやって手に入れたんです？」
「撃ち落されたのを修理したのさ。月に帰るつもりでね」
「月に？　それじゃ、あなたは月人なんですか？」
「そうだよ。驚いたかい？」
「ええ、まあ……。南部に月人がいるとは思いませんでしたから。でも、いいんですか？　私たちがシャトルを使ってしまって」
　アンナは申し訳なさそうに言った。
「ああ、かまわないよ。もう、月に戻るつもりはないから」
「どうしてです？」
「こっちの方が生活しやすいからね。水の心配はいらないし、適度にお日様も照ってるから、野菜もいい感じで育つ。重力とか、月に比べて不便なことが少ない。それに、怪我してるところを助けてもらった恩義もある」
　シャトルがエンジン音を響かせた。一見すると咳をしているようにも聞こえるが、体を盛んに震わせていて、飛ぶ気は満々のようだ。
「問題なく飛べそうだ」
　神谷がシャトルから出てきて言った。
「さて、早く行った方がいい。連中もあんたらの行方を捜してるだろう」
「本当にありがとう」
　アンナは手を差し出した。
　ハンは手を握り返し、次に神谷と握手を交わす。
「恩に着ます」神谷が言った。
「いや、なに。俺も恩を返せてよかったよ」
「それじゃ、元気で」
「ああ、あんたらもな」
「おいしい野菜が育つと良いですね」
　アンナはそう言って笑みを浮かべた。
「ああ、期待してるよ」
　ハンはからからと元気良く笑った。
　怪訝な顔の神谷に向かって「行きましょう」とアンナが促し、二人はシャトルに乗り込んだ。
　ハッチが閉まり、ほどなく、土煙を巻き上げながら、建物の側壁にぶつからないようそっと浮上した。そしてゆっくりと向きを変えると空へと駆け上っていく。ハンはその様子をじっと見上げて、シャトルの姿が空の彼方に消えるまでずっと見守っていた。

　シャトルは着地点を探して月の上空をゆっくりと移動していた。本来であれば港へ帰ればいいのだが、入港するためにはシャトルの識別番号が必要で、当然、このシャトルもそれを持ってはいたが、古い形式のものであるため、相手に不審を抱かれるかもしれない。それに、月が言うところのテロリストを乗せているわけで、のこのこと港に降りれば即逮捕となるだろう。だからどこか適当な場所に着陸して、そこからは、月面を歩いて基地に入るつもりだ。神谷は窓から外を覗いた。シャトルは太陽を背に受けて、地表にシルエットを落としている。その影の先に、着陸に適した平らな場所が見えた。神谷とアンナは宇宙服のバイザーを下ろした。シャトルは徐々に速度を落とし、船体の腹部から足が三本にょきりと突き出して、着陸体勢へと移行する。と、その時、けたたましい警告音が船内に響き渡り、計器の赤いランプが激しく点滅を繰り返して、ミサイルの接近を知らせてきた。神谷はすぐさまレーダーに目を遣り位置を確かめた。右上に点滅するものがあり、それが示す方向に目を向けると、砂塵を巻き上げながら、月面を這うようにミサイルが真っ直ぐ向かってくるのが見えた。神谷はそれを回避すべく、急ぎ操縦桿を操作して、シャトルを右へと旋回させるが、飛翔体はシャトルの動きに合わせて向きを変え、的へと向けて正確に飛行してくる。そしてついに、船体後部に激突した。シャトルは破片を飛び散らせながら、くるくると回転しつつ、尻餅をつくように月面に墜落した。砂埃が舞い上がり、一定時間、漂うように浮遊したあと、シャトルや散乱した破片の上に降り積もる。喧噪が消え去ると、月面は再び静けさを取り戻した。

　数分後、何かの気配を感じて神谷は目を開けた。うっすらとした意識の中で、こちらを見つめる人影が見える。それは身を乗り出すようにして腕を伸ばすと、神谷の背中の辺りをまさぐった。そこには生命時装置が備え付けられていて、もしそれが停止されれば、この宇宙空間では生きてはいけない。命の危機にあるのだと理解してはいたが、体が言うことをきかなくて、彼はどうすることもできなかった。

　そんな時、人影が突然、はっとした様子で動きをとめると、ぬうっと立ち上がり、左右を見渡したのち、くるりと向き直って逃げるように去って行った。ややのち、入れ替わりに別の人物が現れて、同じように神谷を覗き込み、バイザー越しに彼の様子を確かめると、次にアンナの状態を確かめた。しばらくしてまた一人やってきて、二人は互いに見合ってなに事かを話し始めた。その様子から、彼等が、自分たちをどうにかしようと考えているのではなさそうだと、神谷は考えた。そうして、その思いが彼の心の中で支配的になっていくと、急に安堵感に襲われて、彼は再び、意識の混濁の深みへと落ちていった。

　小さな一室のドアが開いて、女性が手にトレイを持って入ってきた。彼女は神谷を見て笑みを浮かべると「気分はいかが？」と聞いた。

「君は？」

　神谷は当然の質問を投げかけた。

　彼女はその問いをキャッチすることはなく、静かな足取りで歩いてくると、神谷の膝の上にトレイを乗せた。トレイにはコーンスープとロールパンが三つ、焼きたての厚めのハムが二切れ乗

っていて、脳天を突き抜けてしまいそうなほどの香しい匂いを漂わせていた。腹の虫が空気を震わすほどの大きな泣き声を上げた。
　女性がクスリと笑った。
「お腹が空いたでしょう？　全部残さず食べてくださいね」
　彼女が何者であるかなど気になる部分はあるものの、この泣き虫を黙らせるには彼らが望んでいるものを与えるより他にない。神谷は感謝の言葉もそこそこに、スープとパンとハムに喰らいつき、ものの数分で食べつくした。
「おかわりしますか？」
　女性が微笑みと共に聞いた。
　腹の虫はまだなにか言いたそうではあったが、ある程度、胃袋も満たされて思考回路も十分に働き始めた段階となっては、まずはこの状況について、はっきりさせておかなければならない。
「いや、十分だ。それより、ここはどこで、君は誰なんだ？」
「それは……」と彼女が答えようとしたところで、今度は男が部屋に入ってきた。
　男は二人の様子を見て「だいぶ具合はいいようだな」と笑顔で言った。
　女性は空になった器の乗ったトレイを持ち上げて見せて「ええ、このとおり」とにこやかに笑って「では、私はこれで」と部屋を出て行った。
　男は歳のころは五十代の前半、背は高く色白で痩せ型、面長の顔立ちは目の辺りがアンナと良く似ている。彼はそばまで歩いてくると、椅子に腰掛け足を組んで神谷を見つめた。
「あなたは？」神谷が尋ねた。
「私はジョセフ。君たちに、力を貸してやって欲しいと頼まれている」
「頼まれている？　……イブラヒム局長に？」
「半分正解だ。間接的に、という意味では合っている」
　つまり、直接的に命令を下した者が他にいると言うことだが、イブラヒムは地球人だから、ジョセフに直接指示を出せるとすれば、それは月側の人間だろう。無論、強硬派の誰かであるはずがない。
「ということは、ホセ局長？」
「正解だ」
「局長がどうして？」神谷はここで再び思案に入ったが、すぐに結論に達した。「なるほど、つまり、地球と月の穏健派は繋がっているということか」
「正解だ。目的を同じくする者同士、連携しない理由はない」
「では、あなたはホセ局長の部下ということか？」
「部下、というのは正しくない。支援は受けているがね。我々はあくまで、独立した一つの組織として活動している」
「組織？」
　ジョセフがホセの部下でないとすれば、それは非政府組織ということになるが、それで思い当たるのは一つしかない。
「”月の夜明け”か」

　ジョセフは微笑んだ。
「そのとおり。君は優秀だな。ヨウ司令官も人を見る目があったということだな」
「俺たちを攻撃してきたのも彼？」
「命令を下したのはそうだろう。君たちが月にくることをどうやって知ったのかは、わからないがね」
「ホセ局長はこうなることを予見して、あなたに協力するよう頼んだのだろうか」
「まあ、なにがしかの邪魔が入ることは予想していただろうな。連中の鼻は犬並みだから」ジョセフは呆れ顔でそう言って、足を組み直し「それにしても、直接乗り込もうとはなかなか大胆だな」
「それ以外に、彼らをとめる方法がないと考えたんだ」
　うむ、とジョセフは頷いた。
「しかし、彼らは耳を貸そうとはしないだろう。地球を力ずくで奪うことが目的なのだからな」
「それでもとめなければならない」
　覚悟の裏に、悲壮感をひた隠しにしたような表情で神谷は言った。
「だが、彼らに近づくのは容易ではないぞ。お尋ね者の君らが、すんなり中に入れるとは思えん」
「やはり難しいだろうか」
「難しいだろうな」
「なんとかならないだろうか」
　ジョセフは思案げに腕を組み、やがて言った。
「考えてみよう。少し時間をくれないか？」
「地球には大量破壊兵器がある。それが使われる前になんとかしたい」
「無論だ。そんなに待たせるつもりはない」
「わかった。宜しく頼むよ」
　ジョセフは立ち上がり、神谷の肩をぽんぽんと叩いた。そして部屋を出ようとしたところで振り向いて「そうそう。彼女のことだが、食事をおかわりしたそうだ。君も、もっと食べておいたほうがいいぞ」とうれしそうに笑った。

　アンナの頬から涙が流れ落ちた。その彼女の頬に腕がぬうっと伸びてきて、ごつくて太い指が滴をそっと拭い取った。アンナはゆっくりと目を開けた。数回ほど目をぱちくりとしてから、自分を見下ろしている人影に瞳を移す。彼女は始め、その人物が誰かわからなかった。しかし、やがて、それが記憶の中に残る面影と同じものであることに気がついて、彼女は、その者を呼ぶ言葉を、確かめるように声に乗せた。
「おとう……さん？」
「気分はどうだ？　痛いところはないか？」
　男は心配顔で、指先でアンナの頬を撫で、優しい声で聞いた。

「本当に、お父さんなの？」
　アンナは頬にこそばゆさを感じながら、その感触にすべての意識を向けた。父親は死んだと思っていたから、目の前にいる人物が本物だと信じてよいか迷っていたのだ。
「ああ、本物だ」父親ははっきりと確信を示して、ぴしゃりと自分の両足を叩いて「このとおり、足もちゃんとついてるぞ」と微笑んだ。
　アンナは勢いよく跳ね起きると、飛び込むようにして父親に抱きついた。永く忘れていたぬくもりが、体を覆う布きれを通してジンジンと伝わってくる。それはストーブみたいに熱を持っていて、ともすれば、本当に火傷をしてしまいそうなほどだった。しかし、また失うくらいならそれで良い。アンナはきつく抱きしめた。
「本当に、お父さんなのね」
　アンナは確信を持って呟く。
「こうして再びお前に会うことができて、父さんもうれしいよ」
　父は娘の背中を軽く叩き、そして優しく撫でた。
　アンナはしばらくの間、父の腕の中で懐かしさに浸った。そして、失った時を埋めるには時間が足りないが、少なくとも、今このときにおいては、十分なほどに愛情をその抱擁から受け取ると、彼女はベッドに腰を下ろして尋ねた。
「ここは月よね？　どうしてここにいるの？」
　父親は遠くの方に目を向けて、懐かしむような、そんな顔で話し始めた。
「ある街で診察を行っていたときのことだ。月の空爆を受けてな。それはもう、激しい爆撃だった。ありとあらゆる建物は破壊され、人も大勢死んだ。私も瓦礫の山に下敷きとなって、そのときは当然、死んだと思ったよ。だが、そんな私を、月の人間が助けてくれたんだ」
「月人が？　助けた？　どうして？」疑問を重ねる度に、アンナの目は見開かれた。
「私が医師だったからだろう」父親は娘に視線を向けた。「月では病院の数が圧倒的に少ない。知っているか？」
「うん。知ってる」
「医師の数が少ないからだ。そのため、診療所や病院の数も少なく、大勢が治療を受けられないでいる。そのせいで、早くに病で死ぬ者が後を絶たない。だから彼らは、私にここで診療所を開いて、診察を行わせようとしたんだ」
「それで、どうしたの？」
「もちろん、引き受けたさ」彼は堂々と胸を張った。「医師にとっては月人も地球人も関係ない。皆、同じ命なんだ」
「そうね。確かにその通りよ。私も医者だから分かるわ」
「お前、医者になったのか？」
　父親は思いがけないことにびっくりして目を丸くした。
「うん。お父さんの遺志を継ごうと思ったの。私も医者になって、たくさんの人を助けたいって」
「そうか、そうだったか」父親は深く頷き、感動とうれしさに顔をほころばせた。「だが、どう

して軍人になった？」
「軍人になれば、危険な場所にも派遣されるでしょう？　そういう場所で、治療を待っている人がいると思ったの。私自身にも危険が及ぶことは当然わかってるわ。でも、そういう人を助けたいと思ったの。それで」
「そうか」父親は誇らしげに何度も頷いた。「本当に立派になったな」ジョセフの目にはうっすらと光るものが浮かんでいた。
「もう、何年も経つのよ」
　娘は恥ずかしそうに笑う。
「そうだな。年の経つのも早いものだな」
　父親は感慨深げに言った。
「いまも医師を続けているの？」
「もちろんだ」
　アンナは室内を見回して「それじゃ、ここはお父さんの診療所？」
「いや、そうじゃない」
「それじゃ、ここはどこなの？」
「組織のアジトさ」
「組織？」アンナは小首を傾げる。
「”月の夜明け”と名乗っている」
「月の……夜明け？」
「月が、地球に比べて重力が低いことは知っているな？」
「ええ、もちろん」
「それ故に、月の人々は様々な病を抱えている。しかし、症状を軽くすることはできても、完全に治すことはできない。その可能性があるとしたら、方法は一つだ」
「地球ね」
「そうだ。だから彼らはどうしても地球に帰る必要があった。不治の病ともいえるそれらを克服するためにな。だが、地球はそれを拒んだ。だから彼らは、強硬な手段をとるしかなかった」父親は未来を見るような目で遠くを見た。「だが私は、もっと別の方法があると考えた。互いに協力し合い、共存する道があるはずだと……。それで私は、医師としての仕事は続けつつ、反強硬派として、レジスタンス活動をすることにした」
「地球との共存を実現するために、ということね」
「そのとおりだ」
「和平交渉で月に来たとき、それを良く思っていない人たちがいるって聞かされたわ。お父さんたちとは別のグループなの？」
「いや、同じさ」
「えっ？」
　父親はくつくつと笑った。
「強硬派に反対する組織があるとは知られたくなかったのだろう。だから嘘を教えられたのさ」

　アンナは呆れ顔で「自分たちの体制は磐石だと、そう示したかったのね」
「そういうことだな」
「それにしても、レジスタンスになるなんて、大胆ね」
「それはお前も同じだろう。テロリストになるんて」そこで父親はあえて沈痛な面持ちとなって「父さんは悲しいよ」
「あれは濡れ衣よ。ありもしないことをでっち上げられたの」
「わかっているさ。冗談だ」父親は笑った。
　娘は暫しふくれていたが、ほどなくくすくすと笑い出した。やがてアンナは決意と共に言った。
「和平を実現するためにも、総攻撃をとめなきゃ」
　父親は頷いた。「まずは彼氏の話を聞いてみよう。全てはそれからだ」
「彼氏？」アンナはやや怪訝な顔をしていたが、ほどなく「それじゃ、無事だったのね」と安堵に胸を撫で下ろした。そして、ふと、父親が意味ありげに見ているのに気がついて、その理由に思い至ると、髪の毛が逆立ってしまうそうなくらいに顔を赤らめて「違うわよ！」
「そうか。それは残念だ」父親はそう言って、アンナの様子を窺いながら「孫の顔が早く見たい」
「知らない！」アンナはぷいとそっぽを向いた。
　父親はなおも意地の悪い笑みを浮かべて「ちなみに、彼ならたいした怪我もないから、近いうちに目を覚ますだろう。もしかしたら、もう起きているかもしれない」
「聞いてないってば！」彼女は頬を風船のように膨らませた。
　父親は楽しそうに笑って、小さい頃にしたのと同じように、娘の頭をごしごしと撫でた。アンナはそれを恥ずかしく感じながらも、懐かしさに浸りたくて、敢えてされるがままに任せた。

　その日、神谷の下を訪れる者があった。男は三十代の半ばほどで、黒いポロシャツにカーキ色のズボンを穿き、四角い顔立ちに角刈りの頭髪がでんと居座って、不健康そうな土気色の肌に、狐のような目がちょこんと乗っかっていた。
「あー、神谷さん？」男は言った。
「ええ、そうですが？」ドアの隙間から、男を探りつつ神谷は答えた。
「あなたにお話がありまして」
「わたしに？」なんの用だろう、と神谷は訝りつつも、脇へと退いて「どうぞ」と男を招き入れた。
　男は中に入ると、なにかに警戒するようにあたりを素早く見回した。
「それで、お話というのは？」
「ええ」男は振り向いた。「妹さんがいらっしゃいましたよね？」
「ええ、いますが……それがなにか？」
「妹さん、お元気ですか？」
　神谷の顔が瞬時にして不安の色に染まる。「なにかあったんですか？」
　男は上着の内ポケットに手を突っ込んで、携帯端末を取り出すと、動画を再生して、それを神谷に見せた。「こんなことになってましてね」
　神谷はかっと目を見開いて「なんだ、これは」と声を震わせた。
　男は答えず、ファスナーみたいに口を閉じていた。やがて動画の再生が終わると、携帯端末をポケットにしまい込んで、ようやく口を開いた。「実は、あなたにやって欲しいことがありましてね。意味はわかりますね？」
「このやろう！」神谷の顔が仁王像のそれのようになった。
「あなたも妹さんはかわいいでしょう？　そうですよね？　たった一人の肉親ですからね」
「妹はどこだ！」神谷は男の胸ぐらを掴んだ。
「こちらの願いを聞いてさえいただければ、妹さんは無事にお返ししますよ。我々だって、鬼じゃないんですから」
「鬼じゃない？　こんなことをしておいて？　畜生がなにを言う！」
「畜生とはひどい言いようですね。……まあ百歩譲って、それは良しとしましょう。で、どうするんです？　妹さんは見殺しですか？」
　神谷は握りしめる拳になおも力を込めて、刺し貫かんばかりの眼力で睨み付けた。怒りは脳天を突き破りそうなほどに頂点に達していて、今にも男を殴り倒してしまいそうだったが、妹の命を盾にされてはどうしようもない。神谷はあまりに力を込めすぎて岩のようになってしまった拳を、なんとかして開くと突き放すようにして手を放した。
「わかっていただけたようで良かったですよ」
　男はやれやれと埃を払うように上着を撫で、しわを伸ばして乱れを整えた。そしてそれが済むと、男は神谷に目を向けた。

「ジョセフは知っていますね」
「ああ、それがどうした」
「彼を殺して欲しいのです」
「なに？」
　神谷はマリアナ海溝ほどにも深いしわを眉間に刻んだ。
「我々にとって、彼は邪魔な存在でしてね。なにかとうるさくてかなわないのです」
「お前、ヨウ司令官の手下か」
「そういうあなたは、ホセ局長の手下でしょう？」
「なぜ自分でやらない？」
「これまでも何度かやろうとしたんですがね」男は頭痛に悩まされる時みたいなそんな顔をした。「警戒が強くて、なかなか近づけないんですよ。でもあなたなら彼に近づけるでしょう。信頼されているようですからね。それで、あなたにやってもらおうというわけです。で、どうです。やっていただけませんかね？」
「断ったらどうなる？」
「野暮な質問ですね。わかるでしょう？」
　男はにやりとして、上着の内ポケットの辺りを撫でた。
　彼の言うことに従えば、妹の命は安全かもしれない。しかし、ジョセフを失えば、総攻撃をとめるという目的も難しくなるだろう。当然、ヨウたちの狙いもそこにあるはずだ。答えは自然と導き出された。
「断る」神谷はしっかりと言った。
　男はにやにや笑いを掻き消して「いいんですか？　妹さんがどうなっても」
「俺の妹だ。あいつもわかってくれるさ」
　男はため息とともに「そうですか……残念ですね」と言って、すぐにニタリと笑う。「仕方がありませんね。あなたには死んでもらいましょう」彼は腰に手を回し、ベルトに挟んでおいた銃を引き抜いた。「安心してください。妹さんはすぐに送ってあげますから」
「このまま逃げられると思うのか？」
「もちろん、そのつもりですよ。私もみすみす捕まってしまうほど、間抜けじゃありませんからね。むしろ、あなたの方こそ、自分の心配をしたらどうです？」
　男は銃を向けた。
　銃はピタリとぶれることなく神谷に狙いを定めていて、その銃口から光線が一閃すれば、それは彼の体を貫いていとも容易く命を奪うだろう。そして男もまた、引き金を引くのにためらう心など持ち合わせていないはずだ。なにか武器の代わりにでもなるような物でもあれば、この非常事態を逃れる方法が見つかったかもしれない。が、自室でのんびりとくつろいでいたわけで、そのような物を持ち合わせているはずもない。彼の言うとおり、今は自分の心配をするべきだろう。神谷は悔しさと苦さをその顔に浮かべて、唇を強くかみ締めた。と、そのとき、来客を知らせるチャイムが鳴った。音につられて、男は思わず背後を振り向いた。神谷はその瞬間を見逃さなかった。彼はマイクタイソンのジャブみたいな素早で、腕を伸ばして銃をがしっと掴んだ。驚

いた男は振り返り、奪われてなるものかと咄嗟に腕を引いた。無論、神谷の方も一度掴んだものを放すつもりはない。今度は両手で銃を握り、男の腕を捻り上げた。すると男の方も、両手で神谷の腕をねじり返す。そうして、押したり引いたり、或いは捻ったりねじられたりと、銃の奪い合いは続いて、彼等はもつれ合いながら、ワルツでも踊っているみたいに、くるくると室内を動き回った。そして、いくつかのルーティンが終わろうかという頃、突如として、舞踏は終わりを告げた。積み重なって不安定になったジェンガが、一気に崩れるみたいに男はドサリと倒れた。彼は目を剥いて、口をぽっかりと開けて横たわっている。チャイムが再び鳴った。神谷は呼吸を整えるとドアを開けた。
「どうかしたんですか？　なかなか出ないから……」男性はそう言いかけて目を丸く見開いた。「なにがあったんです？」
「とにかく入ってくれ」神谷は男性の腕を引っ張って中へと入れると、廊下へ顔を出して左右を素早く窺いドアを閉めた。
「彼は……」男性は知り合いを見たときの顔つきで遺骸の側にしゃがんだ。
「知ってるのか？」
「ええ」男性は立ち上がる。「半年ほど前から組織の厄介になっている男です。どうして彼が？」
「こいつはスパイだ」神谷は骸に視線を落とした。「俺に仲間になれと持ちかけてきた」真実は違ったが、ある意味においては間違っていないだろう。なにより、ジョセフを殺せと言われたなどと、話すわけにはいかない。「もちろん、断ったけどね」
　男性は、信じられない、というより、得心を得た、という顔をした。「なるほど、そうでしたか。では、ジョセフさんに報告しないと……」
「それは待ってくれ」神谷は急ぎ言った。男のことを知らせれば、当然、この事態が引き起こされた理由について調べが入るだろう。そうなれば、妹が人質になっていることが知られてしまうかもしれない。今は大事な時期だ。そのことで手を煩わせたくはない。「彼には話さないでくれ」
　男性は頭を振る。「あなたを疑ったりはしませんよ」
「そうじゃない」神谷は男性に向き直る。「総攻撃をとめるために、今はやらなきゃならないことがある。彼にはそれに集中してもらいたい。余計なことに気を回して欲しくないんだ。だから、これは俺たちで処理しよう」
　男性は黙考し、ほどなく頷いた。「わかりました。あなたがそうおっしゃるなら、異存はありません。彼は、私の方で処理しましょう」
「よろしく頼む」神谷はそう言って、男性の肩をぽんと叩いた。

「会議室へ入ったら、君たちはまっすぐヨウ司令官のところへ向かってくれ。我々は出入り口を封鎖する」
　ボディアーマーを身につけながらジョセフが言った。
「ホセ局長に危険が及ぶことばないの？」
　レーザー銃にバッテリーを装着して、それを腰のベルトに差し込みながらアンナが聞いた。
　ジョセフは視線を鋭くし「虎穴に入らずんば虎子を得ず、さ。覚悟はできているよ」
　アンナはきゅっと口を引き絞って頷いてから「それにしても、これをテレビ中継するなんて、すごいこと考えるのね」
　テレビカメラをチェックする仲間に目を向けると、彼は任せろというように親指を立てた。
「多くの人に知ってもらうには、これが一番手っ取り早いからな。テレビだけじゃないぞ。インターネットでも中継される。これは地球にも送られることになっている」
「なんだか楽しそうね」
「連中に一泡吹かせてやれると思うと、つい、な」
　ジョセフはそう言ってウィンクして見せた。
「初めてね。こんなお父さん見るの」
「私だって、若い頃は血の気が多かったんだ。その頃を思い出すよ。そういうお前も、ずいぶんと張り切っているように見えるぞ」
　アンナは嘆息した。
「そうね。お父さんの性格をずいぶんと引き継いじゃったみたい」
　ジョセフはにやりと笑う。
　アンナははにかんで、神谷に目を向ける。その彼の表情を見て「どうしたの？　さっきから黙って……。なにか心配事？」
　神谷は居眠りから突然目を覚ましたみたいにはっとした顔で「いや、なんでもない」と答え、作り笑いを浮かべて頭を掻きながら「少し緊張してるのかな」
「緊張？　あなたが？」アンナは目を丸くした。
「これからテレビに映るんだろう？　それを考えるとね」
「なあに、それ」アンナはあきれ笑いを浮かべた。
　神谷は照れたように笑って、銃をホルスターに差し込むと、本当に緊張していて、それをほぐそうとするように、大きく息を吐き出した。
　彼等は数台のカートに分乗して、ゲートが見えるところまでやって来た。両脇には警備兵が立っていて、厳つい視線を方々に巡らせている。中へ入るためには、まずは彼らをうまく処理しなければならないわけだが、すでに手は打ってある。
　暫くして、ゲートの奥の方からそろりそろりと男が二人現れて、忍者のようにそっと兵士の背後に近づいた。そして素早い動きであごの下に腕をねじ込むと、一気にぐいと締め上げげた。彼等は腕をばたつかせ、身をよじって抵抗を見せはしたものの、ほどなく力尽き、腕をだらりとさ

せて、人形のように動かなくなった。男たちはそれぞれ兵士を引きずってゲートの奥へと姿を消して、やがて戻ってくると、彼等がしていたのと同じように、両側に直立して、ジョセフたちの方に向かって合図した。
「よし。行こう」ジョセフが言った。
　ゲートに着くと、ジョセフは二人の肩を叩いてその労をねぎらい、天井を見上げて、監視カメラに向かって親指を立てた。本来なら、今頃は警報が鳴っていてもおかしくない。が、それがないのは、既に監視システムを掌握しているからだろう。ともかくも、これで後顧の憂いなく、作戦に集中できるというわけだ。
　通路をしばらく進んでいくと、右手に少し大きめの扉があった。
「ここだ」
　ジョセフは立ち止まる。目的の会議室についたのだ。彼は振り向いて続けた。
「さて、いよいよだ。それぞれ作戦通りに動いてくれ。いいな？」
　一同が了解と頷き返す。
「それでは、行くぞ」
　ジョセフは取っ手に手をかけて一気に開いた。そして雪崩となって彼らは乗り込んだ。
　中はもぬけの殻だった。会議に出席するはずの政府要人の姿はそこにはなく、奥の方、円形の会議机の一角に、ヨウがただ一人腰掛けて、してやったりとにやついた笑みを浮かべていた。思いもよらない展開に、彼らは勢いを失って、その場に呆然と立ち尽くした。
「君らがここへ来ることは、あらかじめわかっていたよ」
　椅子に寄りかかり、見下すような目でヨウが言った。
「他の要人たちはどうした？」目をかっと見開いて、ジョセフが聞いた。
「場所を移ってもらったよ。急遽会場が変更になったと言ってね。これから事を起こす上で、彼らは邪魔になるからな。ちなみに、ホセ局長はずいぶんと慌てていたよ」ヨウはクツクツと笑った。「ところで、カメラを下ろしたらどうだね？　テレビ局にいる君らの仲間は既に拘束した。そんなものは持っていても役に立たんぞ」
　しかしカメラマンはファインダーを覗き込んだままそれに従うことはなかった。
「まあいい。好きにするがいい」ヨウは肩をすくめた。そしてジョセフに目を向けて「さて、君らには国家反逆罪の容疑がかけられている。素直に縛に就きたまえ」
「国家反逆罪？」ジョセフは眉をひそめた。「妙なことを言うものだな。いったい、ここのどこに国家がある？」
「我々が地球を取り戻した暁には、一つの国家として、世界が一つのものとなるだろう」
　ヨウは興奮気味に鼻を膨らませ、どうだといわんばかりに胸を張った。
「世界が一つの国家に？」ジョセフは驚きをその顔に覗かせる。が、すぐに眉尻を下げて「理想は立派だが、あまり現実的ではないな」
「たしかに貴様ら地球人には無理だろう。氷期という厳しい時代を迎えてなお、争いをやめなかったのだからな。だが我々は、月の厳しい環境の中で、皆一丸となって困難を乗り越えてきた。その我々になら、地球に移ってもうまくやれるだろう」

「だから一つになれると？」
「貴様らが存在していては不可能だ。決して一つにはなれん」
「なにを言ってる」ジョセフは顔をしかめた。そして長々とヨウの表情をつぶさに眺め、やがて顔をしかめて「まさか……そのための総攻撃か？」
　ヨウの口角が片方だけゆっくりとつり上がっていく。
　ジョセフは眉間に幾筋もの皺を浮かべ、眼光に怒りを乗せた。「皆殺しにする気か？　地球人すべてを」
　アンナの息を飲む音が聞こえた。
「新世界に地球人は不要だ」ヨウは表情を消して、棒読みするみたいに言った。
「なにが新世界だ！」ジョセフは怒りの声を上げる。「そんなことをして作り上げた世界に、いったいなにがあるというのだ？　悲しみと、怒りと、憎しみによって作られた世界に、人々の安寧などあるはずがない！」
「だからこそ、地球人は不要だと言っているのだ」ヨウは睥睨するようにジョセフを睨み付ける。「この狂気に満ちた世界を作ったのは、そもそもお前たち地球人ではないか。貴様の言う、悲しみと、怒りと、憎しみに支配された地球人がな」彼はそこで、微かに悲しげに目を細めた。「だから世界は平和になれないのだ」
「だからといって皆殺しなど、許されるはずがない！」
「先制攻撃をしておきながら、どの口が言うのか！」ヨウは唾を飛ばす。
「確かに先制攻撃をしたのは地球だ。そのことについて弁解するつもりはない。だが、我々は、地球と月の人々が、共存して生きていける世界を作りたいと思っているし、それが可能だと信じている。そしてそれこそが、在るべき新世界の姿だと確信している」
「我々はそんな世界など、望んではいない」
「本当にそうか？」ジョセフは探る目をヨウに向ける。「それはお前の独りよがりではないのか？」
「独りよがりでなにが悪い！」ヨウは吠えるように、割れんばかりの大声を上げた。「地球人が我々の帰還を拒んだせいで……」彼は、一旦はその言葉を飲み込んで耐えようとしたものの、ついには堪えきれなくなって、吐き出すように続けた。「私は息子を失ったのだ。私は……この苦しみを、一秒たりとも忘れたことはない」神谷に目を向けて「そこのお前も同じだろう。明日をも知れぬ身の妹を抱えて、地球人が憎くはないのか？　こうなったのも、全て地球人のせいだとは思わないか？」
　地球が月の人々の帰還を認めてさえいれば、妹も苦しまずにすんだだろう。故に地球人を憎んでいないかと問われれば、正直、首を横に振る自信はない。だから彼は、ヨウの問いかけに答えることができなかった。
　その様子を見つめていたアンナは不安になって、神谷の肩にそっと手を触れようとしたものの、ジョセフの言葉がそれを遮った。
「ご子息を失ったことは残念に思う。しかし、それは私怨に過ぎない。そのただ一つの憎しみを、全ての地球の人々に向けるのは間違いだ。……我々人類は、その思いを……憎しみを超越し、

慈しみへと変えられるはずだ」
　ヨウは高らかに笑った。天を突き抜けるほどに朗々と……。彼は喘ぐように息を吸い込んで言った。
「本当に、そんなものを持ち合わせているのなら、こんな事にはなっていなかっただろう……。あのときに、それを見せて欲しかったものだな」
　彼は笑みを掻き消して、一同を睨み付けると「こいつらを捕まえろ！」と号令した。
　すると会議室の左手、別室へと続く扉が開いて兵士が乱入してきた。彼らは蟻が巣穴から出るときの様子そのままに、わらわらと雪崩れ込んでくると、円卓に沿うように並んで銃を構えた。少しでも身動きすれば、容赦なく撃つぞと言うように、それらは狙いを定めている。
　ヨウは勝ち誇った顔で立ち上がると言った。
「あとは任せたぞ」
「どこへ行く」
　ジョセフの鋭い声が飛ぶ。
「戦後処理について、いろいろと決めなければならないことがあるのでね。私も忙しいのだよ」
　ヨウはそう答え、隣の兵士に何事かを耳打ちした。きっと、場合によっては殺してしまって構わない、とでも言ったのだろう。彼は薄く笑いながら、兵士たちが入ってきたドアから隣室へと出て行った。
　会議室に静けさが降りてきた。兵士たちは無言で銃を向けている。
「どうするんです？」敵に聞こえないよう小さな声で、ジョセフの仲間が聞いた。
「そうだな」ジョセフは少し思案してから「あれをくれ」と手をおしりの方へと回した。
　仲間は手投げ弾を手渡す。安全装置は既に解除されているので、あとは投げるだけで爆発する。彼は横目に神谷とアンナに合図を送り、二人は小さく頷いた。ジョセフは兵士たちの方へ視線を戻すと同時に手投げ弾を投げ込んだ。球形のそれは床でバウンドしたのち、ふわりと浮き上がったところで爆発した。放たれた炎と煙は、圧縮されたスポンジが一気に体積を取り戻すときみたいにもくもくと沸き上がり、爆音は折り重なるように広がって壁や天井を叩いた。兵士たちは驚いてテーブルの陰に身を隠し、ジョセフたちもまたテーブルを背にして姿を隠した。
　ジョセフは机の陰からそっと兵士たちの様子を確かめた。彼等はじっと身動きせず、相手の出方を窺っている。こういうとき、すぐには動かず状況を整理してからすべきことを見極めるのは、兵士たる彼らに染みついた行動原理だ。そしてそれは、ジョセフたちに時を与えた。彼は兵士たちの動きに注意を向けつつ、神谷とアンナに言った。
「お前たちは奴を追え」
「彼らがあそこにいては行けないわ」
　アンナが懸念を述べる。
「我々が連中を引きつける」
「どうするの？」
「退却すると見せかけて、そこのドアから廊下に出て行く。連中は跡を追いかけてくるだろう。その隙に、お前たちは扉を抜けていけ」

「囮になるなんて、危険よ」
　アンナは憂慮を示した。
　ジョセフは笑みを浮かべ、娘の頬を優しく撫でてその憂いを取り除いた。
「大丈夫だ。私だって、何度も修羅場はかいくぐってきている。このくらいのことはなんでもない」彼は神谷に視線を向けた。「娘のことを頼む。それから、必ず奴を捕まえてくれ。絶対に逃がしてはならない」
「わかった。任せてくれ」
　ジョセフは一つ息を吐いて「さて、始めるか」と仲間に視線を巡らせた。
　彼らは銃を乱射し始めた。激しい銃撃に敵方は机の影に隠れてレーザー光の雨を凌ごうとした。ジョセフはその隙にドアに駆け寄って押し開き、仲間たちは銃を撃ちながらゆっくりと後退を始めた。そしてドアの直ぐそばまで来ると、彼らは通路に飛び出してそのままどこかへと走っていった。兵士たちは銃撃がやむと、巣穴から顔を出す小動物みたいにひょこりと頭を出し、様子を確かめて敵の姿がないのに気がつくと、飛び上がるようにして立ち上がり、慌ててドアへと走った。神谷とアンナは机の下に潜り込み、兵士たちが走り抜けていくのをやり過ごし、彼らの足音が聞こえなくなると、机の下から抜け出して扉へと走った。
　部屋にはヨウの姿はなく、机がぽつんと一つあるだけだった。左に目を転じると、通路へと続くドアが開けっ放しになっており、どうやらそこから逃げたらしい。二人は部屋を突っ切って廊下に飛び出した。
　通路をまっすぐに進んでいったその先で、道が二手に別れていて、どっちへ逃げたのかと彼らは迷った。思案しつつ右へ左へと目を向けていると、左手の道の奥の方から、悲鳴を上げながら人々が逃げてくるのが見えた。その怯えた表情から、彼らが逃げてきたその先で、なにかが起きているようだ。とすれば、推測されることは一つだ。神谷とアンナは顔を見合って互いの考えを確かめ合うと、母川回帰する鮭の如く人々の流れを遡上していった。
　道沿いに進み、やがて彼らは広場へとやって来た。人々はまだ退避の途中で、逃げ惑う姿がちらほらと窺える。神谷はヨウを探して辺りを見回した。右から左、左から右へと視線を繰り返し這わせて、ようやく、人ごみの中に、人々とは反対の方向へと向かうヨウの姿を見つけた。彼は女を一人引き連れていて、その女は疲れているのか、或いは具合が悪いのか、ふらふらとして足下がおぼつかない。
「とまれ！」神谷は大声で叫んだ。
　しかしヨウが振り向くことはなく、彼はただ逃げることの一点にのみ集中していて、どうみても足手まといとしか思えない女を引きずるようにして歩いていく。避難していた人々は二人、一人と減っていき、やがて誰もいなくなった。
「とまらないと撃つぞ！」
　神谷の声が広場に響き渡る。彼は腰を落として体を斜にし、レーザー銃を構えた。アンナもそれに習う。
　ヨウは足をとめた。女が崩れるようにぺたりと座り込む。
「ゆっくりと振り向け」神谷が言った。

　ヨウは覚悟を決めたのか、言われたとおりに振り向いた。しかし、それも最初だけで、途中でくるっと向き直ると、彼は引き連れていた女の腕を引っ張って立ち上がらせ、振り向かせてそのあごの下に左腕を回して、がっちりと抱え込んで銃をこめかみに突きつけた。女は立っているのもやっという様子で、目を瞑り、か細い呼吸を静かに繰り返している。
　神谷の息を吸い込む音がはっきりと聞こえた。ヨウがニタリと笑う。勝利したような彼の声が言う。
「よしよし、いいぞ」
　不審そうにアンナは首を傾げ、神谷に目を向けた。彼は心臓がぴたりと止まってしまったかのような顔をしていて、言葉を忘れてしまったみたいに口を閉じていた。
　代わりにアンナが言った。
「彼女をどうするつもり？　私たちとは関係はないはずよ」
「それがそうでもない」ヨウは銃口をぐりぐりと押し付けた。「この女はそいつの妹でね。人質にと連れてきておいたのだ」アンナははっとして神谷を見つめた。彼は瞬きもせず、横顔に見える表情は凍り付いたようにぴくりとも動かない。彼女は彼の心境を思い、ふつふつと怒りを覚えた。ヨウは続けた。「我々の言うことを素直に聞いてさえいれば、無事に帰してやったのだがな」
　アンナはヨウを鋭く見つめて「我々の言うことって……なんのこと？」
「教えてやったらどうだ？」ヨウは嫌らしく笑う。
　神谷は言うか言うまいか迷った。が、今となっては黙っていても仕方がない。彼は小さく深呼吸して「君のお父さんを殺すように頼まれた。妹の命と引き換えにね」
「えっ？」アンナは瞠目した。
　父親の暗殺計画を聞かされて驚かないはずはない。それが、肉親の命と引き替えともなればなおさらだ。しかし、彼女の父親は現に生きているわけで、それはつまり、妹の命より、彼女の父親を助けることを選んだと言うことだ。
「どうして、彼の命令に従わなかったの？　妹さんの命がかかっているのに」
「なにを優先すべきかよく考えて出した結論だ。その判断が間違っていたとは思っていないよ」
「でも……」アンナは今にも泣き出しそうな顔をした。
「いいんだ。おかげで、こうして彼を追い詰めることができた。それは君のお父さんの協力があってこそだ。だから気にする必要はない」
　結果的に、父親の命が助かったことはうれしい。が、大事な肉親が天秤に掛けられたわけで、そのときの彼の気落ちを思うと、どんな顔をして良いのか、彼女はわからなかった。
　神谷はアンナの様子をちらりと見遣ってから、責任はこの男にあるのだと、そう宣言するように言った。
「あなたにはもう逃げ場はない。彼女を放して投降するんだ」
　ヨウはカラカラと笑った。
「逃げ場がないだと？　それはお前の方だ。いいのか？　妹がどうなっても」
　もちろん、妹を助けたい気持ちはある。彼とて、できることならすぐにでもそうしたい。だが

、今は成すべきことが他にある。神谷はヨウの眉間に狙いをつけた。
　ヨウは目を細くして銃口を見つめ、最後通牒だとでも言うように女性の首を締め上げた。彼女はううっとうめき声を上げ、苦しそうに顔を歪める。女性の顔色が、ナスみたな紫色に変わっていく。
　一度は覚悟を決めた。が、苦しげな妹の姿を見ていると、自然と指の力が抜けていく。神谷はゆっくりと腕を下ろした。
「よし、よし、いいぞ」ヨウは満足げに言った。「銃を捨てろ」
　だが神谷は直ぐには従わず、ヨウを睨まえてささやかな抵抗を見せた。
　ヨウは苛立ちを言葉に乗せた。「捨てろと言っただろう！」
　神谷は放り投げるように銃を捨てた。
「お前もだ」
　アンナもそれに従う。
「いいか？　跡をつけてくるのではないぞ」
　ヨウは女性を引きずったまま、通路の方へと歩いていこうとした。
「待て！　妹を放せ！　もう関係ないだろう！」
　神谷が怒鳴った。
「いいや、これは私の切り札だ。最後まで付き合ってもらう」
「切り札？　盾にしているだけだろう！　彼女を解放しろ！」
　金切り声が尚も響く。
「身を守るための盾だ。そう簡単に放すものか」
　ヨウはなおもじりじりと後退した。神谷とアンナも跡を追う。ヨウは銃口を女性に押し付けて「とまれ！　とまらないと女を撃つぞ！」
　女性の顔は藍染めの織物みたいに真っ青で、操り人形のようにぐったりとしていて、生きているのかどうか判然としない。神谷ははたと立ち止まった。
　ヨウは彼女を切り札だと言っているわけだから、簡単に殺すような真似はしないだろう。が、だからと言ってその補償があるわけではない。神谷としても万が一の事態は避けたい。彼らの間で微妙な駆け引きが続いた。
　そうした緊張が暫く続いて、まんじりとも事態が変化をみせようともしない頃、通路の方が少し騒がしくなってきた。その音の方に、ヨウが視線を向けて、顔のパーツが寄ってしまいそうなほどにくしゃっとした苦々しげな表情を浮かべた。なんだろうと振り向くと、ジョセフとその仲間数人が、空中を滑るように飛んでくるところだった。彼らは近くまで来ると神谷とアンナのそばに降り立った。
「お父さん！」アンナが喜びの声を上げた。
　ジョセフは笑みを浮かべてそれに答え、次いでヨウを見つめて「もう終わりだ、司令官。すべては終わったのだ」
「終わった？　なにがだ？」
「お前の企みは既に白日の下にさらされた。誰もお前を支持していない」

「なにを馬鹿な」
　ヨウは思わず吹き出した。
「あのモニターを見ろ」
　ジョセフはそれを指差す。
　彼の仲間が携帯端末から連絡をすると、暫くのち、街頭のディスプレイを見上げる人々の姿が映し出された。ディスプレイには、会議室でのヨウとジョセフのやり取りが映っていて、市民はその映像を見て、思案げに腕を組んだり、不安な面持ちで隣の者と抱き合ったり、頭を抱えて呆然と立ち尽くしたりと、皆様々な反応を見せていた。
「なんだ、これは……」ヨウは呟くように、わなわなと声を震わせた。
「あらかじめ、こうなることを見越して準備をしておいたのだ。備えあれば憂いなし、とよく言うだろう？」ヨウがキッと睨み付けた。ジョセフはそれを無視して続ける。「会議室での出来事は、すべて市民の知るところとなった。そして見ての通り、彼らはお前のしようとしていることに疑念を持ち始めている。既に一部から、お前を糾弾する声も上がっているぞ」
　ヨウはディスプレイに映し出された人々の様子を惚けたように眺めていた。が、やがて面貌を崩してケラケラと笑い出し「もはやこれまでということか」と覚悟を示した。そして笑みを消し去って「覚えておけ。貴様らに明日は決して来ないことを」と言い終わるや否や、銃口をこめかみに当て、ためらいすら見せることなく、一気に引き金を引いた。放たれた光線は頭蓋を右から左へと突き抜けて、噴出した血潮はシャワーのように広がって、雨となって降り注いだ。活力を失い、朽ちて倒れる木のように、彼はぱたりと倒れた。
　神谷は突然の出来事に呆然として立ち尽くしていた。が、すぐさま妹のことを思い出し、彼は飛び上がるようにして彼女の下に駆けつけた。抱き起こし、その名を叫ぶ。だが、それに答える気配はない。彼女の呼吸は蚊が鳴くほどに弱々しく、顔色は血の気を失って、まぶたはぴたりと閉じ合わさっている。
　ジョセフがそばにしゃがみ込んで女性の様子を確かめた。そして振り向いて「彼女を病院に」と仲間に指示する。すると一人がカートを運転してきて、女性をそっと後部座席に横たえた。
　不安げな面持ちの神谷に向かって「君も一緒に行け」とジョセフが言った。
　神谷は急ぎカートに飛び乗った。カートはゆっくりと動き出し、そして神谷の思いそのままに、一気に速度を上げて走り去っていった。
　アンナはジョセフの横に並び立ち「大丈夫かな」と心配顔で言った。
「わからん。ただ、無事であることを願うしかない」
　ジョセフはそう答えて、励まそうとするように娘の背中を撫でた。
　アンナは振り向いて、ヨウの骸を見下ろした。権力を欲しいままに暗躍した男も、今はその力を失い、アケロンの畔にて、迎えの船がやってくるのを待っているだろう。
「これで戦争も終わるわね」
「そうだな。しかし、ようやくスタートラインに立ったに過ぎない」ジョセフは顔を上げ、決意の視線を遠くへ向ける。「大変なのはここからだ。道のりは容易ではないだろう。だが、やらねばならん」

「そうね」アンナは頷いた。
　そう納得はしたものの、どこか釈然としないなにかを彼女は感じていた。それは、ヨウの死に顔が薄気味悪く笑っていて、死の間際に際してもなお、自信に満ちた表情を浮かべていたからだ。まるで、自分の計画はまだ失敗していないのだと、そう言っているかのようだ。アンナは言い知れぬ不安を覚えて、背中を悪寒が駆け巡るのを感じた。

「彼女のそばにいなくていいの？」
　ふらりと現れた神谷にアンナは尋ねた。
　神谷は頷いて「少し落ちついたからね」と笑顔を見せた。
　しかし、アンナにはそれが嘘だとすぐにわかった。ジョセフから彼女の容体については聞いていたし、なにより、彼のその力ない笑顔が虚勢であると物語っていたからだ。
「そばにいるべきよ。彼女が今必要としているのは、あなたなんだから」
「妹のことは担当医に任せてあるから大丈夫だ。それに、俺がいたところで出来ることはない」
「そんなことないわ」アンナは頭を振った。「こういうとき、大切な人がそばにいてくれるだけで、その人には励みになるのよ。いてほしいときにいてくれないことは、とても悲しいことだわ」
　そう言った彼女の言葉には実感がこもっていた。
「わかってる。けど、彼女ならきっと、自分のことはいいからと、そう言うに決まってる」
　神谷は確信を持って言い切った。
　アンナは半ば呆れたようにため息をついた。
　そこに男がやってきて言った。「ジョセフさんがお呼びです」
「彼は自分の部屋？」神谷が聞いた。
「ええ。なにか大事なお話があるそうですよ」
　ジョセフは山のように積まれた資料に囲まれて、まさに雪崩に巻き込まれでもしたかのような格好で仕事をしていた。二人が現れると、その山の谷間から顔を覗かせた。
「お話があるそうですが？」神谷が山の頂から覗き込むようにして言った。
　ジョセフは資料を机の上に丁寧に置き、椅子の背に寄りかかった。皮のきしむ音が鳴る。
「地球に持ち込まれた大量破壊兵器について、連絡があった」
　神谷とアンナの顔が豪雨の前の雨雲みたいに暗くなった。まさか、という思いが脳裏をよぎったからだ。
　それをジョセフは感じ取って「安心しろ。それが使われたというわけではない」とすぐに言い添えた。
　雨上がりの空みたいな日差しが二人の顔に差す。
　ジョセフは続けた。「調査したところ、ただの張りぼてだとわかった」
「張りぼて？」アンナが怪訝な顔をした。
「木材で精巧に作られた、ただの模型ということだよ」
「爆発なんてしないってこと？」
「そういうことだな」
「つまり、俺たちは爆発もしないただのおもちゃを運ばされたってことか」
　神谷がなんとも言えない表情を浮かべた。
「おもちゃにしては冗談が過ぎるがな」とジョセフは苦笑いを浮かべる。

「でもよかった」アンナは安堵に胸を撫で下ろす。「もう、なんの心配もいらないわけね」
「それについてはな」ジョセフは表情を曇らせる。
「なにか気になることが？」神谷が聞いた。
「強硬派の残党について仲間に調べさせていたのだが、どうも不穏な動きがあるようだ」
「不穏な動き？」神谷は眉をつり上げた。「なにか企んでいると？」
「残念ながら、詳しいことはつかめていない」ジョセフは首を振る。
　神谷は、オートバイが通り過ぎていく時のエンジン音みたいに唸った。
　すると「そう言えば」とアンナがふと思いだす。「あなたが地球で捕まったとき、妙なことを耳にしたの」
「妙なこと？」
「ええ」アンナは頷いた。「あなたが地球に来たのは、軍事情報を得るためだったのよね？」
「ああ」神谷は首肯する。
「それ以外には？」
「それ以外？」彼は眉をつり上げた。のち頭を振って「いや、ないね」
「他の情報にもアクセスされた形跡があるそうなの。僅かにその痕跡が残っていたそうよ」
「他の情報って？」
「地球連合で行われる、国際会議のスケジュール。いつ、どこで、どんな会議が行われるか。そして誰が出席するのか」
「その情報に俺以外の誰かがアクセスした？」
「ええ」
　ジョセフが尋ねる。
「どの会議の情報にアクセスしていたかはわかっているのか？」
「環境に関する国際会議よ。地球上のほとんどの指導者が参加するわ」
　ジョセフはトントンと指先で机を叩き、暫く思案を広げ、やがて言った。
「もし、その会議が襲撃を受け、指導者たちに万が一のことでもあれば、世界は混乱するな」
「確かに混乱はするだろうけど、それもすぐ収まるだろう。どこの国も、そういった事態には備えているはずだから」神谷が見解を述べる。
「もしかしたら、それに乗じてなにかする気かも」アンナが発言した。
「そうだとして、それができるほどの戦力を、彼らは持っていないはずだ。地球上の部隊は全て、撤退しているからね」
「だとしたら、なにをするつもりなのかしら」
　うーんと神谷は再び唸った。
　あとをジョセフが引き継ぐ。
「いずれにしても、事が起きてからでは遅い。できる手は打っておくべきだろう」
　神谷もアンナもそれについては異論はない。二人とも大きく頷いた。ジョセフは続ける。
「どうだろう。二人には、すぐに行動に移せるよう、地球に降りて準備をしておいてもらえないだろうか」そこで神谷をじっと見て、憂色を滲ませながら「頼めるか？」と確かめた。彼の妹は

未だ病床にあり、地球に降りるとなればしばらくは会えなくなる。そのことを心配しているのだ。
「問題ない」神谷は即答した。
「ちょっと待って。彼は……」
「いいんだ」神谷はアンナが言い切るのを遮った。「今すべきことがあるなら、それに集中したい」
　アンナは物憂げな表情を浮かべた。永く父を失っていた彼女としては、その辛さをよく知っていたから、彼の妹から兄を引き離したくはなかったし、この苦しいときにこそ、彼を側に置いてやりたいと思っていた。だが、彼の決意は固そうで、それを変えさせるのは無理そうだ。
「申し訳ない」ジョセフは心苦しそうな顔で頭を垂れた。「本当なら別の者を向わせたいところだが、こちらも人手が足りないのだ」
「構わない。俺もなにかをしている方が気が紛れる」
　ジョセフは感謝の眼差しを返した。
「こちらでも調査は進める。なにかわかったら、すぐに連絡しよう」

　神谷とアンナはジープに乗って、活動拠点となっている基地から、会議が行われる会場へと移動した。道々、山のように資材を積み込んだトラックが何台も行き交って、復興へと向けた人々の溢れださんばかりの活力を感じる。アンナは車窓から外を眺めた。建物を囲む足場を歩く作業員の姿と、風に棚引くシートが見えた。
「復興は順調？」
「順調と言えるほど順調には進んでないですね」ドライバーはため息交じりに答えた。「なにせ人が足りてないんですよ。働き手も、技術者も」
「それだけ多くの命が失われたと言うことか」神谷は哀悼の念を込めて言った。そして「代償は大きいな」と悔しげに顔を歪めた。
「そこが戦争の罪深いところね」アンナは吐息を吐き出す。「労働力だけでなく、知識さえ奪うのだもの」
「でも、技術革新には役立った、なんて評価もありますよ」
「それは結果論だろう」神谷は続けて吐き捨てる。「都合の良い言い訳だな」
　アンナがあとを引き継いで「自分たちのしたことを正当化したいのよ」と呆れ顔で「間違いを認めたくないのね」
「自分は悪くないってね」神谷は鼻を鳴らした。
「揉めてますよ。誰が責任取るのかって」運転手は愉快そうに言った。
「だろうな。まあ、悪役は必要だな。連合を悪者にする訳にもいかないし」神谷は遠くの空を見つめた。二羽の鳥がもつれるように飛んでいくのが見える。「けど、それが理由で、復興が遅れるのだけは避けて欲しいものだな。多くの人が、一刻も早く、元の暮らしに戻れるのを願っているんだから」
　一時間ほどのち、車は街へと入った。爆撃によって破壊された家々のその傍らに、どこからか持ち寄った品々を並べた露店が所狭しと並んでいる。市場と見まごうほどのその場所は、右を見ても左を見ても、人々の笑顔と歓声に充ち満ちており、つい先日まで、戦禍に包まれていたなどとは想像するのさえ難しい。こうした人々の活気と活力は、復興の足がかりとなるだろう。そして燃料となって、それをさらに加速させるに違いない。車は点々と続く穴ぼこをジグザグに避けながら進み、とある建物の前で停止した。
「会議はここで？」神谷が聞いた。
「ええ、あと五時間ほどで始まりますよ」ドライバーが答える。
「各国の首脳はもう中に？」アンナがちらりと会場の建物を見遣ってから尋ねた。
「いえ、これからでしょう。今は業者の連中だけですよ」ドライバーは後部座席を振り向き「お二人はどうしますか？」
　神谷はあたりを見回した。「そうだな。まずは周辺を調べてみよう」
「私もいくわ。一人より、二人の方が早いでしょう？」
「わかった」

「それじゃ、私はここでお待ちしてます」
　ドライバーはエンジンをとめた。
　二人は車を降りると正門を挟んで左右に分かれ、建物をぐるりと囲む塀を横目に見ながら注意深く歩き始めた。
　建物をぐるりと回っていくと、ちょうど正門の裏側に、物資の搬入に使われる少し大きめのゲートがあった。門は閉じられていて、警備員が左右に立ってしっかりと監視をしていて、中に入るには当然、彼らのチェックを受けなければならない。神谷は門を背にして左右へと目を走らせた。向かいの建物に人気はなく、これと言って気になる部分はない。次いで道路に視線を転じて見たが、時折、荷物を満載したトラックが行き交う以外には、特別注意を引くような車両の姿も見当たらない。ほどなく、反対方向からアンナがやって来た。
「どうだった？」神谷が聞いた。
「特に気になるようなところはなかったわ」
「こっちもだ」
　アンナは振り向いて、懐疑的な目で建物を見つめた。「本当になにか起こるのかしら」
「わからない」神谷は首を振って建物を見上げた。「いずれにしても、なにかが起こるんだとしても、絶対にとめなきゃならない」
「ええ、そうね」
「とりあえず戻ろう。なにか連絡が入っているかもしれない」
　神谷とアンナの姿を見つけると、ドライバーは車を降りて大声で言った。
「お待ちしてました。ジョセフさんから連絡がありましたよ。折り返し欲しいそうです」
「ここから連絡できるのか？」神谷が聞いた。
「ええ。そこのを使ってください」
　ドライバーは車のダッシュボードを指差した。
　その中央、本来ならラジオ装置のある場所に、通信装置が備え付けられていた。神谷は運転席に乗り込み、装置を操作した。すると直ぐに応答があって、神谷とジョセフは通話を始めた。その間、神谷の顔にはこれといった感情は現れてはいなかったが、話が終わって振り向いたときには、焼かれた鉄みたいに顔が赤く染まって、キツネのように目が吊り上がっていた。
「どうかしたの？　とても怖い顔をしているわ」アンナが不安顔で聞いた。
「月が、今度は細菌兵器を地球に運び込んだらしい」
「細菌兵器？」アンナは訝しげに首を傾げた。「また張りぼてじゃないの？」
「いや、今度は本物のようだ。科学者連中がそれを認めたらしい」
　アンナは憤りをその顔に覗かせて「そんなもの、どうするつもりなの？」
「今日は世界中から人が集まる。指導者だけじゃない。政府関係者やメディアも大勢やってくる。もしその彼らが、ウィルスに感染した状態で国に戻れば、あっという間にそれは広まるだろう」
「まさか……」アンナはまん丸と目を剥いて声を大にする。「ここでそれを使うつもりなの？」
　神谷は頷いて「おそらくそうだろう。彼らはいわば、ウィルスの運び屋ってわけだ」

「なんてこと……」
　アンナはうつむいて両手で顔を覆った。もしかすると泣いているのかもしれない。
「奴の狙いはこれだったんだ。戦争なんかより遙かに効率がよくて、そして確実に命を奪える」
　アンナは顔を上げた。涙は流していなかったが、代わりに、強い決意が浮かんでいた。
「それはどこにあるの？　もしかしてもう中に？」
「その可能性は高いだろう」
「どうするの？」
　神谷は僅かに考えて「中を探そうと思う」
　アンナはしっかりと頷き返す。「そうと決まればのんびりしている暇はないわ。急ぎましょう」
　ウィルスをこの建物の中で効率的かつ広範囲に拡散させるとすれば、空調システムを使うのがもっとも良い方法だ。換気のために取り入れられた空気はウィルスを乗せて上から下へ、そして右から左へとダクトを巡り、やがて吹出し口から室内へと送られる。人間は呼吸のためにそれを吸い込み、酸素を消費して二酸化炭素を吐き出すが、ウィルスは体内に居残って、幾日かの潜伏期間を経たのち、満を持して活動を開始し、人間の体を蝕み破壊しながら自らをコピーして増殖し、やがて体外へと飛び出して別の宿主に伝染する。人間は感染したことなど気付きもしないが、ウィルスに侵されたその時点で既に、片足どころ両足までが、死の淵へと足を突っ込んでいるのだ。
　空調室には銀色のパイプが天井を縫うように張り巡らされて、箱形の重厚そうな機械類が所狭しと並んでいた。
　ごうごうと響き渡る騒音に顔をしかめながら、アンナが大きな声で「探すの大変そうね」と感想を述べた。
「そうだな」神谷は室内を見回した。「あるとすれば、おそらく、送風機か、そこから通じるダクトのどこかに設置されているはずだ」彼は振り向いた。「手分けして探そう。見つけたら呼んでくれ」
「わかった」
　アンナは頷いてすぐに行動に移った。
　探す、と一言に言っても、そう簡単ではない。大小様々な機械やパイプやらがごちゃごちゃと入り組んで、複雑に絡み合う様は難解な知恵の輪のようで、見ていて訳がわからなくなる。そうした中から姿形もわからない物を探すのは、メダルゲームのメダルの中から本物の貨幣を見つけ出すのに近いかもしれない。ともあれ、二人はしゃがみ込み、時には這いつくばったり、身を乗り出すようにしたりして、隙間という隙間をくまなく調べた。万が一、見逃すようなことがあれば一大事だ。
　そうやって奥の方へとやってきて、唸りをあげる大きな装置の向こうを覗いた時、パイプの隙間に潜り込むようにして、背を向けてうずくまっている人影を見つけた。なにやらごそごそと作業をしているようで、こちらの気配に気付いた様子はない。修理業者だろうか……。神谷は右を見て、左を見て、そこへと通じる通路があるのを見つけると、ぐるりと回り込んで、その人影の

背後に立って、なにをしているのだろうかと覗き込んだ。人影はその手元を照らすようにペンライトを口に咥えて、送風機と思われる装置から伸びるダクトの部分に、なにやら仕掛けを施しているようだった。
　声を掛けようと口を開いたとき、気配に気付いた人影は、ぎょっとした様子で振り向いた。彼は暫く神谷を見つめたのち、ねじが回転しながらせり上がるみたいにゆっくりと立ち上がった。
　神谷はその様子を目で追いながら「君は……」と驚きをその顔に表して「君は、ジョバンニか？」
　人影はじっと神谷を見据えた。彼は手に大きなスパナを握っている。
「やはりそうか」神谷は確信を得ると同時に問い掛ける。「ここでなにをしてる？」
「早かったですね」ジョバンニは質問には答えずただそう言って、うっすらと笑みを浮かべた。そして感心したように続けた。「さすがは神谷さんだ」
　神谷は送風機のそばにちょんと鎮座する小さな箱に視線を移した。「それはなんだ？」
「ここに来たってことは、わかるでしょう？」
　神谷は表情を険しくして「ヨウの指示か？」
「ええ、そうですよ」
　あっけらかんとジョバンニは答えた。
「なぜこんなことを……」
　悲しげな顔で神谷は聞いた。
「父の頼みですからね」
「父？」神谷は訝しむ。「彼の息子は死んだと聞いた」
「僕は養子なんですよ」ジョバンニは遠くを見るような目で話し始める。「実の父は軍人で、地球で戦って死にました。今も遺体は見つかってません。母は元々体が弱く、父の死後ふさぎこむことが多くなって、やがて心労が重なって死にました。そのとき僕はまだ幼くて、身寄りもなかった僕を、ヨウさんは引き取って育ててくれたんです」ジョバンニは言葉を切り、僅かに声を大きくして「あなたには想像もつかないでしょうけど、僕にとってはとても優しい、いい父親だったんです。僕の目標でもあったんですよ。それをあなたは……」
　彼は怒りの表情で睨みつけた。
　騒動を聞きつけたアンナがやってくるのを、神谷は右手を上げて制した。
「復讐か？」
「そうですね。確かに憎いですよ、あなたが……。今すぐこの場で殺してやりたいくらいです。でも、だからって、私怨でやってるわけじゃありません」
「それじゃ、どういうわけなんだ？」
「月人の手に地球を取り戻す。それが父の宿願でした。僕も子供の頃からよく聞かされましたよ。それで僕は、父の願いを叶えてやりたいと思うようになったんです」
「だからこんなことをするのか？」
「当然でしょう？　息子として、父の遺志を継ぐのは。そちらの彼女にもわかるはずですよ」ジョバンニはアンナに目を向けた。

　彼女はびくりと体を震わせたが、それをおもしろいと思ったのか、ジョバンニは小さく笑った。
「お前と彼女は違う」
　神谷ははっきりと、言葉に鋭さと力を込めた。
「どう違うって言うんです？」
　ジョバンニは怪訝な顔で肩を竦める。
「彼女のそれは、人を生かすためのものだ。だが、お前のは人の命を奪うものだ。そこが根本的に違う」
「僕がやろうとしていることは、僕たちが生きるために必要なことなんですよ。どこも違うとは思えませんね」
　ジョバンニは呆れ顔というよりは、むしろ哀れみを込めた眼差しで神谷を見つめた。
　神谷はため息を吐き出す。
「これ以上は、なにを話しても無駄なようだな」
　ジョバンニは肩を竦めた。「そのようですね」彼は右足を半歩後ろに引いた。「僕はとめられませんよ」
「いや、お前をとめる必要はない。後ろにあるそれを、破壊すればいいだけだ」
「だから……させませんて」
　言うなりジョバンニは神谷に襲いかかった。しかし神谷もそれはお見通しで、彼は横様にダンスでもするようにステップし、ジョバンニの攻撃をひらりとかわした。そして虚を突かれバランスを崩してつんのめりそうになっているジョバンニの横方向から、腰のあたりにタックルした。二人はそのまま二メートルほど通路をもつれるように進んで、絡み合いながらドスンと床に倒れた。神谷はすぐに起き上がり、馬乗りになってジョバンニを見下ろした。
「俺の勝ちだ。あきらめろ」
　ジョバンニは軽く笑いを漏らした。「上に乗っかったくらいで、勝ったつもりですか？」彼は笑みを掻き消して「舐めないでもらいたいですね」と神谷の胸ぐらを掴んでぐいと引き寄せつつ、自らも上体を起こして強烈な頭突きを喰らわせた。神谷はうっと呻いて息苦しげな表情で天井を仰ぎ見る。ジョバンニはその隙を見逃さず、体をひねって神谷を横様に倒すと、素早く起き上がり上にまたがって、にやついた笑顔と冷めた目で見下ろした。
「さあ、今度は僕の番ですよ」
「そうそう簡単にやられるものか」
「試してみようじゃないですか」
　ジョバンニは右腕を高々と突き上げると、重力に自らの膂力を上乗せして、斧のように拳を打ち下ろした。
　神谷はそれを防ぐべく顔の前で腕を交差させた。そこにジョバンニの拳がぶつかって、ゴツンと鈍い音が鳴る。次に左腕を持ち上げて勢いよく振り下ろすが、やはり防壁に阻まれて攻撃は神谷には届かなかった。しかし、それで諦めるような男ではない。上がだめならばと、草を刈るように横様に腕を振り回した。するとその鎌は壁を突き抜けて、神谷の頬を捕らえて打ち据えた。

　上から下からバチン、ゴツン、バチン……。肉と骨のぶつかり合う音が空調室に木霊する。端から見れば、こうして一方的に攻撃を受ける様は誰もが神谷の負けを予想しただろう。しかし、彼自身がそう宣言したように、やられっぱなしで終わることはなかった。
　神谷は殴打の雨をかいくぐって腕を伸ばし、ジョバンニの胸ぐらを掴むとぐいと力一杯引き寄せて、お返しとばかりに彼の前頭部に思いっきり頭突きをお見舞いした。ゴンという鈍い音が鳴り、ジョバンニはあっと声を上げて体を後方にのけぞらせた。そうして彼がひるんでいる隙に、神谷は素早く体を起こすとそのままぐるんと一回転して、再びマウントポジションを取り、倍返しだぞとばかりに、霰の如く拳を打ち下ろした。虚を突かれたジョバンニは、神谷の攻撃をかわすことができず、その打撃は彼の顔面を強かに、そして正確に捉え続けた。だが、彼もまた、日々の訓練の中で鍛え上げられた頑強な兵士だ。ジョバンニは打ち下ろされる拳の隙間を縫って手のひらを突き上げた。それは神谷のあごを的確に捉えて、衝撃は脳を揺るがして一瞬の意識の喪失を引き起こし、朦朧としている間にジョバンニは体を横にひねって体勢を入れ替えた。そして再びジョバンニが優位となった。そうやって、攻守が入れ替わり立ち替わり交代して、二人の戦いは長い時間続いた。
　しかし、徐々にジョバンニの方が優勢となっていく。年齢の差かあるいは実力の差かは定かではないが、ともかく、このままでは神谷の敗北は明らかだった。
「僕の勝ちですね。諦めてください」
　肩で息をつきながらジョバンニは言った。
　神谷は言い返せなかった。それだけの力をほとんど残していなかったのだ。
「終わりにしましょう。僕もすぐにここから逃げなきゃいけない」
　ジョバンニは足下に手を伸ばすと裾をめくりあげ、足首に括り付けられたナイフを鞘から引き抜いて、逆手に握ると頭上高く振り上げた。そのナイフの切っ先が神谷の胸に深々と突き刺されば、彼は間違いなく死ぬだろう。ジョバンニはそれを確信してにやりと笑みを浮かべた。
「覚悟はいいですか？」
　神谷は二度ほどゆっくりと深呼吸して「いや、お前の負けだ。敵は俺だけじゃないってことを、忘れていたな」と背後に立つ人物に向かって言った。ジョバンニは要領を得ないという顔をしていたが、やがてその意味することに気がついて、うしろを振り向こうとした。が、その瞬間に後頭部をゴツンという鈍い音が襲って、彼は短いうめき声だけを残して崩れるように倒れた。
「助かったよ」神谷は体を起こしながら命の恩人に謝辞を述べた。
「怪我は？　平気？」
　アンナは手を差し出した。
「ああ、大丈夫だ」神谷はアンナの手を握る。
「それはよかったわ」彼女は神谷を引っ張り起こした。「それにしても異常だわ。父親の遺志だからって、こんなことするなんて」
　彼女はジョバンニを見下ろした。
「まったくだ」
　神谷は頷いて、彼女の視線の先へと目を向けた。

　ジョバンニは体をくの字に折り曲げて横たわっている。殴られたあたりから幾ばくか出血しているが、致命傷になるほどではなさそうだ。神谷はかがみ込んで喉のあたりに指先で触れてみた。血管はしっかりと脈を打っていて、呼吸も深く繰り返されている。彼は安堵のため息とともに立ち上がった。
　神谷はジョバンニが作業をしていたあたりに歩いて行き、しゃがんで奥の方を覗いた。そこには円筒形の装置があり、そこからチューブが伸びて、ダクトに開けられた穴へと繋がっていた。四桁の赤いデジタル数字がかちりかちりと値を減らしている。
「それが？」
　アンナが背後から覗き込んだ。
「おそらくね。この装置からチューブを通って、ウィルスがダクトに放出される仕組みだろう」
「どうするの？　時間はなさそうよ」
　装置を解体してその活動を停止させるには、それなりの専門的知識と技術が必要だ。が、残念ながら、神谷はそれらを持ち合わせていない。そしてタイマーは一時間を切っていることを示していて、彼女の言うとおり、あまり猶予はなさそうだ。彼はジョバンニに目を向けて、ややのち、視線を上げた。
「彼はここから逃げだそうとしていた。空港は遠い。きっと近くにシャトルを泊めているはずだ。そのシャトルでこれを宇宙へ持って行こう」
「宇宙に？　宇宙空間に捨てるってこと？」
　神谷は頷いて「そこなら人への被害もでないだろう」
「でも、いつ地球に落ちてくるかわからないわ。もしそうなったら大変よ」
「そうだとしても、大気圏で燃え尽きてしまうだろう。……けど、そうだな、万が一って事もあるな」彼は思案して「ジープに積んでいた爆弾を使おう。それをこいつにくっつけて爆発させる。高温の熱の中では、さすがにウィルスも生きてはいけないだろう」
「私もいくわ」
　アンナは毅然と宣言した。
「いや、俺だけでいく」神谷ははっきりと、首を大きく振って拒否した。
　実際、どんな危険があるかわからない。それ故に、彼は彼女に来て欲しくなかった。だから敢えて突き放すように言い添えた。「君が来たところで、やれることはない」
「ひどい言いようね」アンナは少し傷ついたようだった。
「実際、これを運んで爆発させるだけなんだから、俺一人で充分だ。わざわざ君の手を煩わせる必要なんてないよ」神谷は言い訳気味に言った。
「わかったわ」アンナはため息と共に同意した。そしてこればかりは譲れないという顔で「でも、見送りくらいはするわよ。だめなんて、言わないでね」
　神谷は微笑みを返して「わかった。言わないよ」
　アンナは振り向いて「彼はどうするの？」とジョバンニを見下ろした。
「暫く目を覚ますことはないだろう。ただ、医者に診せないとな」
　するとアンナが腰を下ろして、ジョバンニの怪我の様子を確かめた。

「そうか、君も医者だったな」
　忘れていたというように神谷は言った。
　アンナは立ち上がり「軽傷よ。心配ないわ。外の彼に話して、病院に連れて行かせましょう」
「なるほど、うまく手加減したわけだ」
「そのつもりはなかったんだけど……どうしてかしら？」アンナは首を傾げた。
　神谷は苦笑いを浮かべて、どうしてだろうねと、肩をすくめた。

「なんです、それ」
　ジープの運転席に腰掛け、二人の帰りを待っていたドライバーが、神谷が大事そうに抱えていた装置を見て怪訝そうに尋ねた。
「これか？　知りたいか？」
　神谷はおそるおそるといった様子でジープの荷台に装置を載せた。
「いえ、やめておきます」ドライバーは急いで車を飛び降りた。
「助手席にプラスチック爆弾を積んでたな」
「ええ、敵が……いえ、彼等が残していったものですが」
「そうか」神谷は微かに苦笑を浮かべた。戦争が終わってまだ間もない。彼等を敵と呼ぶのは無理もない。「使わせてもらって構わないな？」
「ええ、構いませんが……どうするんです？」ドライバーは尋ねてから「いや、いいです」
　神谷は微笑を浮かべた。
「頼みがある」
「……やばいことでなければ」
　神谷は今度は破顔した。
「空調室に男が一人、気を失って倒れている。彼を病院に運んでもらえるかな？」
「いいですよ。でも、暴れたりしまんよね？」兵士らしからぬ不安げな顔で、彼は確かめた。
「大丈夫だ」神谷は力強く答える。「手足をきちんと縛ってあるから」
「わかりました」ドライバーは安堵に胸を撫で下ろす。「実は事務方だったもので……」聞いてもいないのにそう言い訳したが、まずかったと思ったのか、一つ咳払いをして「任せてください」と胸を張った。
「よろしく頼むよ」
　神谷は微笑んで、彼の肩を叩いてジープの運転席に乗り込んだ。同じくはにかんだような笑みを浮かべながらアンナが後に続いた。
「君が言っていたのはここか」
　神谷は亀みたいに首を伸ばして、フロントガラスの上から目を覗かせて公園を眺めた。
「ええ。周囲を木々で囲まれているから、ここならシャトルを隠すのにちょうどいいわ」
　車を公園の中へと乗り入れて、更に奥へと走らせていくと、砂場とブランコのその向こう、公園の中程にシャトルがあった。戦争が終わってまだ間もないこともあり、公園でくつろぐ人や遊ぶ子供の姿はない。
　神谷はジープをシャトルの近くで停車させた。運転席から滑るように降りて歩いていき、シャトルに乗り込んで開閉ボタンを押し込むと、歯車が噛み合う音がしてハッチが口を開けた。しかし、わずかに開いただけでそれ以上はぴくりとも動かない。旧式のシャトルだとたまにこういうこともあったから、神谷は特に気にするでもなくもう一度ボタンを押した。すると今度は軽やかな音を上げてシャトルは大口を開けた。彼はやれやれと肩をすくめたのち、シャトルを降り

てジープの荷台から装置と爆薬を運び込んだ。そしてすべての準備が整うと彼は言った。
「さて、もう行かないと……。あまり時間がない」
　タイマーは残り三十分を示していた。
「気をつけて」
　不安な面持ちでアンナが言った。
「すぐに戻ってくるよ」神谷は勇気づけるように力強く言って、微笑みと共に付け加えた。
「ちょっとコンビニに行ってくるみたいなもんさ」
「随分遠いコンビニね」アンナはあきれたように笑った。そして真剣な顔になって「必ず生き延びて。妹さんのためにも……」
　神谷は真剣な眼差しを返して「君のためにもね」
「知らないわ。そんなこと」
　アンナはそっぽを向いた。
　神谷はうれしそうに微笑んだ。そして一呼吸置くと「それじゃ」とハッチのボタンを押した。
　モーター音と共にゆっくりと口を閉じ、アンナはそれをじっと見守った。
　ほどなくエンジンが音を上げ、船体の底から風が吹き出して土埃が巻き上がる。アンナは数メートルほど後方に下がった。
　ゆらゆらとシャトルは浮き上がり、充分な高さまで上がるとくるりと方向転換をして、天馬のように上空へと駆け上っていく。アンナはその姿が小さな黒い点になるまで、ずっと見送っていた。

「まだ生きていると信じているのか？」
　落ち着き払った口振りでジョセフが言った。
「死んだという確証はまだないわ」
　アンナは無線機のマイクに向かって口をとがらせた。
「あれからもう五日も経っている。生きている見込みは少ない」
「まだ五日なら、見込みはあるわ」
「地上での話なら、あるいは可能性はあるかもしれない。だが、宇宙空間は地上と違って危険に満ち溢れている。そんな中を生き抜くのは容易ではない。お前も医者ならわかるだろう」
「お父さんは彼に生きていて欲しくないの？」
　アンナの声が咎めるように言った。
「そんなことはない。私だって、彼には無事でいて欲しい。ただ、お前はお前のすべきことに集中するべきだと、そう思っているだけだ。彼がそうしたようにな」
　父親の諭す言葉に娘は言い返すことができず、ただ口をつぐんだ。二人の間に沈黙が訪れて、自然の流れで通信は終わった。
　アンナはぎくしゃくとした動きで歩いて行くと、すとんと椅子に腰を下ろした。彼女にも父親の言っていることはよくわかっている。この戦争で怪我を負った人々や、十分な治療を受けられ

ない人々が医師の手当てを待っている。そして地球と月との共存へと向けた作業など、彼女のすべきことは山ほどあった。だから個人的なことで立ち止まっているわけにはいかないのだ。アンナはテーブルに肘をついて顔を両手で覆った。やがてしくしくとすすり泣く声が室内を満たした。

忙しさの中で日々はあっという間に過ぎ去っていき、刻まれる時の中で悲しみもいつしか薄らいでいった。そうして心の傷のかさぶたも幾分かは剥がれ落ちた頃、体を震わせるような奇跡の出来事が、アンナの心を鷲掴みにした。彼女はいてもたってもいられなくなり、仕事を仲間に任せて急ぎ病院へと駆けつけた。看護婦たちの叱責も構わずに廊下を走り、病室のドアを勢いよく開ける。そして息で肩を大きく弾ませながら、中へと進んだ。担当医の話では、救出されたときにはだいぶ衰弱していて、もう少し遅ければ命はなかっただろうということだった。しかし、ベッドの上で眠る彼は痩せ細ってはいたものの、その寝息は穏やかで血色も悪くはない。自然と涙が流れ落ちた。ぽろぽろと雨のように。彼女は突っ立ったまま、溢れ出す感情にすべてを委ねた。やがて悲しみは安堵に変わり、かさぶたもすべてが剥がれ落ち、傷跡も綺麗さっぱり消え去って、彼女の心を覆ったのは、深い深い、愛情だった。

アンナは毎日毎日、病院へと足繁く通い、彼が目を覚ますのを待ち続けた。そして六日目、彼はようやく目を開けた。医師がやってきて容態を確かめ、もう安心だと笑顔でアンナに伝えた。医師と看護婦が部屋をあとにすると、アンナは椅子に腰掛けた。患者はゆっくりと首を回して柔らかな笑みを向ける。頬が少しこけてまるで老人のような容貌ではあったが、そこに浮かぶ笑みは間違いなく彼のものであった。

「やあ、久しぶり」

ややかすれてはいたが、しっかりとした声で神谷は言った。

「気楽なものね。こっちの気も知らないで」

アンナは怒ったように言い返した。

「でもちゃんと、約束は守ったろう？」

「すぐに、とあなたは言ったわ」アンナはわずかに頬を膨らませた。「これのどこがすぐに、なの？」

「そうしたかったのは山々なんだけど、そうも簡単にはいかなかったんだ」と神谷は言って、体を起こそうとした。

すると素早くアンナが立ち上がり、その背に腕を回して優しく支えた。

「起き上がって大丈夫？」

「ああ、問題ない。それとも、医師として寝てろって言うかい？」神谷は悪戯っぽく笑った。

アンナはため息をついて「いいわ。好きなようになさい」

神谷は腰を浮かしてよいしょとベッドの上を移動して、ヘッドボードに背中を預けた。

アンナは彼の腰の後ろに枕を差し込んで、上掛けを腰のあたりまで引っ張り上げると椅子に腰掛けた。

「それで、なにがあったの？」
　神谷は軽く咳払いをして「少し、水をくれないかな」
　アンナは水差しからコップへ水を注ぎ、それを神谷に手渡した。彼はゆっくりと時間を掛けて水を飲み干し、空になったコップを返すと短く息を吐いて続けた。
「宇宙空間に出たところで、時限式の信管を設置して、後部ハッチから外に射出しようとしたんだ。ところがハッチは全く動かなかった。動きそうな気配もなかったんだ。爆発までは時間がない。それで仕方なく、装置をそのままにして、搭乗口から外に脱出することにした」
「宇宙空間に？」アンナは目を丸くした。「自殺行為よ」
「爆発に巻き込まれるよりは、外に逃げる方が生存の可能性があるんじゃないかってそう思えたんだ。そのときは……。でも、時が経つにつれて、間違いだったかもって思ったよ」
「一瞬にして焼かれる方がよかった？」
　神谷は肩をすくめた。
「あるいは……ね。でも、こうして君の顔を、もう一度見ることができたわけだから、俺の判断も間違いではなかったと言えるね」
　一瞬の間ののち「うれしい、なんて言わないわ」
「そうだろうと思ったよ」
　アンナは微かに笑ったようにも見えたが、あるいは単に見間違いだったかもしれない。
「でも、どうやって助かったの？」
「君のお父さんだよ」
「えっ？」アンナはまん丸と目を見開いた。
「ずっと俺を探してくれていたらしい。彼がいなかったら、今頃はデブリの一部となっていただろう」
「父は……そんなこと一言も言っていなかったわ。むしろ、あなたのことを諦めろというようなことまで、言っていたくらいなのよ」
「それは君に、早く前に進んで欲しいと思ったからだろう。彼としても、君の悲しそうな姿を見たくはなかったはずだ」
「だからって、なにも言わないなんて……」
　アンナは怒ったような、それでいて困ったような顔をした。
　神谷は優しく微笑んだ。
「彼も、俺が生きているとは思っていなかったと思うよ。だから変に期待を持たせたくはなかったんだろう。もしそれで見つからなかったら、君は余計に傷つくだろうからね。だからなにも言わなかった、というより、言えなかったんだと思うよ」
「でも、言って欲しかったわ」
「すべては君のためさ。なんだかんだ言ったって、娘のことが心配なんだよ」
　アンナはうれしくもあり、恥ずかしくもあるというような表情を浮かべた。
　神谷は更に続けた。
「俺は感謝してるよ。彼のおかげで、こうして生きていられるんだからね。あの無限とも言える

ほどの広大な宇宙空間で、塵ほどにもちっぽけな一人の人間を探すのは、並大抵のことではなかっただろう。それをずっと探し続けてくれて、とうとう俺を見つけてくれた。命の恩人だよ」
　アンナは頷いて「そうね」と小さく息をつき「感謝しなきゃね」
「きっと喜ぶよ」
「いつ、退院できるの？」
「すぐに。いつまでも寝ているつもりはないよ。やるべきことはたくさんある」
「その通りね。本当に」
　アンナは外へと目を向けた。眩しそうに目を細める。
　神谷はアンナの視線を追って目を向ける。さわやかな青空の向こうに、ゆっくりと滑るように降りてくる無数の黒い点が見える。
「帰還は順調？」
　アンナはため息を漏らす。「問題がないわけじゃないけど、おおむね、順調と言って良いかも」
「苦労しているんだね」それを慮って神谷は眉尻を下げた。
「彼らにとって地球は、故郷というよりは新天地と言った方がいいわ。右も左もよくわからないわけだから……。そんな場所で、これまで敵だった相手と暮らすわけだもの、不安を感じないはずない。地球の人々にしたって、彼らの帰還を快くよく思っていない人もいるわ。だからそういう部分で、衝突することが少なからずあるの」
　神谷は頷いて、短く息を吐き出した。
「そういう対立があることは、ある程度仕方のないことだな。例えるなら、新大陸を求めてやってきた人々と、原住民との間で対立が起こるのと同じことだね。まあ、不安なのは地球の人にとっても同じはずで、いずれ時間が解決してくれるだろう」
「そうね」アンナは視線を戻した。「ビクトルが協力してくれているわ。月人と共存してきた自分たちになら、その経験を生かせるだろうって」
　神谷はゆっくりと、そして期待を込めて大きく頷いた。「それはいいね。きっと助けになるだろう」そして思い出したように「ところで、彼らは関心がないと思ってた」
「初めはそのつもりだったみたい。でも、いつまでも閉じこもっているわけにはいかないって」
「そうだね。いずれ人々の活動範囲は北へと広がっていくだろう。そうなれば、無関心ではいられない」
「ええ、そのときに無用な対立を防ぐためにも、積極的に関わることが必要ね」
　神谷は頷いた。「道のりは厳しいかもしれないけれど、きっと、素晴らしい未来が広がっているはずだ」
「ええ。みんな、希望に満ちた顔をしているわ。天国のような、夢の場所にようやく来られたって」
　神谷は感慨深げに目を細めた。「確かに、月の人々にとって地球は夢の場所と言えるな。その地球に、生きているうちに来ることができるなんて、考えてもみなかっただろう。俺自身、そうだったよ」

アンナは再び窓の外へと視線を転じた。遠くに見える山の稜線は深緑の衣を纏い線を描くように左右へと延びていて、白い綿飴みたいな雲が空に寝転んでぷかぷかと浮いている。この星では当たり前のこの光景も、月では決して見ることのできない景色だ。それを、月の人々が夢の場所と考えるのも無理はない。

「私たちはそんなふうに考えたことなかったわ。生まれた瞬間から死ぬそのときまで、これが当たり前のことだと思ってたから」

「だから尊いものだと気づかない。唯一無二の存在であることにね」神谷があとを引き継ぐ。「俺たちは月に街を築いた。それはとてもすごいことだと思う。それだけの技術力を持てたことはね。でも、それが限界だった。月は地球ではないし、地球にもなりえない。地球の代わりになることはできないんだ。俺たち人類にとって、この地球だけがたった一つの故郷なんだ」

少し興奮気味に語る神谷を、アンナはびっくりしたような顔で見つめた。これは月という過酷な環境の中で生きてきたからこその彼の言葉であり、それ故に、感情が高ぶるのも無理からぬことだ。

「確かにその通りね。いつかどこかに、地球と同じような星が見つかったとしても、それはきっと、地球の代わりにはなれないのよね。だってこんな奇跡、そんなに簡単に起きるはずないもの……。だからこそ、私たちはそれを大切にするべきね」

「家族と同じようにね」

アンナはちらりと神谷へと視線を送って「父も忙しいのよ」

「君の話を聞くくらいの時間はあるよ。と、いうか、作るだろう」

ほんの少しだけ間が空いて「そうね。そうするわ」

アンナは立ち上がり、椅子を両手で持ち上げて、邪魔にならないように壁際へと寄せた。

神谷はその様子を目で追いかけながら「君のお父さんには、改めて挨拶に行かないとね」

「それは……ひょっとしたら、時間を割いてはくれないかも」

アンナは恥ずかしそうに言った。

「君がうまく説得してくれることを期待するよ」神谷は意地悪そうに微笑んだ。「でも、もしかすると、喜んで会ってくれるかもしれないね」

「だといいわね」

アンナははにかんで、ベッドに歩み寄ると神谷の唇に自分の唇を重ねた。数秒ほどのち、唇は名残惜しそうに離れて、互いに別れの言葉を述べた。

神谷は去って行く彼女の後ろ姿を見送ってから、外を眺めた。シルバーの窓枠は額縁のように外の景色を描き出している。そこに広がる青空は、フェルメールの描く青のように鮮やかで、その見目そのものと同じく、心をしゃきっとさせた。

エピローグ

　雲をかき分けるようにして一台のシャトルが降りてきて、怖々といった様子でゆっくりと地面に着陸した。エンジンがため息のように一つぶるっと音を上げ、停止する。ほどなくハッチが開いて、人々が奥から姿を現して、外へ出ようとするその手前で立ち止まると、あたりをきょろきょろと見回した。その様子はキャリーバッグから顔を覗かせて、初めて見る景色に戸惑いを見せる猫のようだ。しかしそんなふうに当惑を見せているのもわずかな時間にすぎない。彼らの表情はすぐに笑みに包まれて、感激に顔がほころんだ。映像や写真でしか見たことのない緑の景色が眼前に広がり、自然のままの空気が肺を満たしていく。笑顔にならないわけがなかった。彼らは地上に降り立つと、確かめるように大地を踏みしめて歩いた。そうしてついに、彼らは地球人となった。
　そのシャトルから女性が車椅子に乗って降りてきた。背後には男が一人立っていて、ゆっくりとした注意深げな足取りで車椅子を押している。女性は地上に降り立つと、他の人々がそうしたように、感動に顔を輝かせ、両手を左右に広げて胸一杯に空気を吸い込んだ。それはつぼみから顔を覗かせた新芽が、呼吸をしようとめいっぱいに葉を広げる様にも似ていた。そしてその表情は、体の隅から隅までを命で満たされていくのを感じて、生への喜びに心が湧いているようだった。
　アンナは女性がゆっくりと息を吐き出すのを待ってから、そばへと歩み寄って声をかけた。
「千尋さんね？」
「はい」
「アンナよ。初めまして」
　アンナは手を差し出した。
「初めまして」
　千尋は手を握り返した。
　アンナは背後の男性にちらりと目をやって、笑みを浮かべて言った。
「お兄さんも自慢でしょう。こんなかわいい妹さんがいて」
「ありがとうございます」千尋はクスッと顔をほころばせ、花のような笑みを浮かべた。「私も、こんなすてきなお姉さんができてうれしいです」
「ありがとう。私も、あなたのような妹ができてうれしいわ」アンナも微笑みを返した。「本当に、元気になって良かったわ」
「先生も、一時はどうなることかと思ったって、言ってました」
「あなたを危険なことに巻き込んでしまって、本当にごめんなさい」
　アンナは申し訳なさ一杯の顔で謝罪した。
　千尋は頭を振った。
「いいんです。気にしないでください。アンナさんに責任があるわけじゃないんですから」
「そう言ってもらえると助かるわ」アンナはほっと胸を撫で下ろした。「これからどうするの？」

「まずは新居を見に行こうじゃないか」神谷が答えた。「そのあとで学校に行って、手続きを済ませないと……。それから病院に行って挨拶もしなきゃね。もっとも、もう済ませているけどね」
　千尋は首を回して兄を見上げてから「アンナさんが先生？」と輝く瞳を主治医に向けた。
「ええ、私が責任を持って、あなたの病気を治すわ。がんばりましょうね」
「はい」千尋はうれしそうに微笑んだ。「お姉さんが見てくれるなら、安心ね」
　アンナは恥ずかしそうに笑って「なんだかこそばゆいわね」
「すぐに慣れるさ」神谷は言った。「そしてじきに、本当の姉妹のようになるよ」
「ええ」アンナは微笑んで「きっとそうね」と腕を伸ばして千尋の頬を優しく撫でた。
　彼女の頬にはうっすらと紅が差していて、本当に少女といった様子でかわいらしい。そこに光が差し込んで、瞳に星が浮かんだ。
　アンナは神谷の隣に並んだ。二人は千尋の肩に手を置いて、互いに見合うと空を見上げた。先ほどまで厚ぼったく覆っていた雲は綿飴みたいに溶け消えて、青空の向こうから太陽が顔を出し、地上を燦々と照らした。澱は消え、澄み渡る空には、一点の曇りもなかった。